

サティア・サイババ
ラーマヤナを語る

凡例

文中の〔角カッコ〕は訳注を、
三角のカッコ はふりがなを、
四角 ではさんだ箇所はゴシックをあらわしている。

「ラーマヤナ」の主な登場人物。

ナーラーヤナ	ヴィシュヌ神。宇宙を維持する最高神。時代を超えてさまざまに化身する。
ダシャラタ王	アヨーディヤーの王
カウサリヤー	ダシャラタ王の妃 きさき 。ラーマの母。
カイケーイー	ダシャラタ王の妃。バラタの母。
スミトラ	ダシャラタ王の妃。双子であるラクシュマナとシャトルグナの母。
ラーマ	最高神ナーラーヤナの化身。アヨーディヤーの王子。
バラタ	カイケーイー妃の息子でラーマの弟。ラーマに代わってアヨーディヤーを一四年間統治する。
ラクシュマナ	ラーマの忠実な弟。
シャトルグナ	ラーマの弟。ラクシュマナとは双子の兄弟にあたる。
ヴァシシュタ	アヨーディヤーのお城に住む司祭
ヴィシュヴァミトラ	聖者。儀式を守るためにラーマを魔物と戦わせる。ラーマとシーターとを妻合 めあ わせる。
シーター	ジャナカ王の娘。ラーマの妻となる。
マンタラー	腰の曲がった召使の女。カイケーイー妃をそそのかし、ラーマを追放させる。
ラーヴァナ	ランカー島を支配する魔物の王。シーターを誘拐する。
マーリーチャ	魔物。黄金の鹿に化けて、シーターの気持ちを惹きつける。
ジャターユス	鳥。誘拐されるシーターを守ろうとするが、魔王ラーヴァナに敗れる。
シュールパナカー	魔王ラーヴァナの妹。
スグリーヴァ	猿の王。ラーマを助ける。
ハヌマーン	猿の戦士。ラーマの忠実なしもべ。
ヴィビーシャナ	ラーヴァナの弟。兄を見限り、ラーマの側につく。
インドラジット	ラーヴァナの長男。妖術を使う。

前書き

『ラーマヤナ』は、最高神ヴィシュヌの化身ラーマを主人公とする古代インドの叙事詩である。ラーマ王子の妻シーターが魔王ラーヴァナに誘拐され、ラーマは弟のラクシュマナと猿の軍団を連れて敵の棲むランカー島に向かう。大戦争の末、魔王ラーヴァナを倒してシーターを無事取り戻し、ラーマは生まれ故郷の都アヨーディヤーに戻り、王に即位する。

『ラーマヤナ』は『マハーバータ』とともにインドの精神世界において大きな魅力をもつ神聖な物語として重んじられてきた。それだけではない。タイの壁画、カンボジアのアンコール・ワット、あるいは中国の『西遊記』、バリ島のケチャク、さらには日本の民話『桃太郎』、20世紀のアメリカ映画『スター・ウォーズ』(Episode)に至るまで、この物語の影響は広い範囲に及んでいる。お姫さまがさらわれ、正義の主人公が猿を連れて助けに行くという物語には、国や文化の違いを越えて人間のこころの深いところを動かす、何か普遍的なものがひそんでいるかのように見える。

南インドの聖人、バガヴァン・シュリー・サティア・サイババは、一九九六年の五月、南インド、カルナタカ州バンガロール郊外にあるプリンダーヴァンの講堂で、学生および一般の人々を相手に、『ラーマヤナ』を、十一日間をかけてははじめから終わりまでを順序立てて物語った。通常サイババの講話はテルグ語でおこなわれ、英語の通訳がつく。一回の講話は一時間半くらいで、メモのようなものは一切見ることはない。それまでもサイババはラーマについての講話を何度もしてきたのではあるが、これだけの長さの物語を連続講話を通して語った例としては、書物の形ではこれがただひとつの記録となる(これとは別に、サイババが書いた本として“Rama Katha Rasa Vahini”(『ラーマ王子ものがたり』)がある)。このときサイババは数えて七歳(満六九歳)であった。同じことを何度もしてきたならともかく、その年齢で合計十時間以上にわたって、数千人の聴衆を前に、メモなしでひとつの物語を通して語るといふ試みを初めておこなうのは、驚くべきことだと思う。ただし、ただし、この『ラーマヤナ』においては、物語の後日談にあたる部分は語られていない。また、はじめの一章と最後の章は、物語と直接関わらない教説が語られている。そこでこの翻訳では、この物語の全体がすっきりと読めるようになることを期待して、はじめと終わり(第一章および第一章)の部分を大幅に削る編集をした。

この『ラーマヤナを語る』において、サイババは「外面的な生き方」から「内面的な生き方」への転換をくり返し説いている。近代小説の人物像に慣れた人にとって、ラーマやシーターは、欲望にとられることも葛藤に迷うこともなく、あまりにも立派で、理想的でありすぎるように見えるかもしれない。しかし神話の歴史は、近代小説の歴史よりもはるかに長いのだ。この連続講話の中でサイババが語っているように、『ラーマヤナ』とは私たちのこころの中の物語であり、神の化身ラーマも魔王ラーヴァナもともに私たちのこころの中に棲んでいて、彼らの戦いは私たちの生きている限りつづくのである。

この連続講話からちょうど四年目、ラーマがアヨーディヤーに帰還した日であるディーワリー祭の日に、この翻訳をインターネットで発表することにした。

二 九年一 月一七日 Brahmananda 宇野梵悦

目次

前書き

第一章 この連続講話のはじめに..... 6

「ラーマヤナ」の聖なる世界に深く入っていくことで、人生の大いなる達成は得られる。

第二章 ラーマの原理（ラーマ・タットヴァ）その栄光..... 9

物語のはじまり。ダシャラタ王は儀式をおこない、四人の王子をさずかる。最高神ナーラーヤナの化身であるラーマは、その長男として生まれる。

第三章 使命のはじまり.....16

ラーマと弟のラクシュマナは、聖者ヴィシュヴァーミトラとともに森に行き、魔物の女タータキーらを倒す。一行はさらにミティラーの都へと向かう。ラーマはシヴァの弓を折り、ジャナカ王の娘シーターとの結婚が決まる。

第四章 自然（プラクリティ）と神（パラマートマ）との結婚.....25

ラーマとシーターとの結婚式がおこなわれる。時はすぎ、ダシャラタ王の引退が近づく。このとき王位に就くはずであったラーマは、一四年間森に追放されることになる。

第五章 シーター、連れ去られる.....35

ラーマは、妻のシーターと弟のラクシュマナとともに、森から森へと放浪をつづける。魔王ラーヴァナの欲望とはかりごとによって、シーターが誘拐されてしまう。

第六章 シーターを探して.....41

ラーマとラクシュマナは、シーターを探すうちに、猿の王スグリーヴァと猿の戦士ハヌマーンに出会い、その協力を得ることになる。ハヌマーンはランカ島に渡り、ついにシーターを見つける。

第七章 大戦争はじまる.....50

魔王ラーヴァナの弟ヴィビーシャナが、ラーマの軍勢に加わる。ラーマはランカー島へと渡る橋を海にかける。正義と悪との大いなる戦いがここにはじまる。

第八章 ヴィビーシャナの最高の帰依.....57

魔王ラーヴァナの弟ヴィビーシャナは、魔物どものいくさの戦い方をよく知っており、妖術を破ることでラーマの軍勢に大きな成果をもたらす。

第九章 ラーヴァナ倒れる.....63

ラーマとラーヴァナの戦いは、七日七晩にわたってつづく。魔王はついに倒れ、息絶える。ラーヴァナの悪い行いのせいで、ランカー島のすべては醜く汚れてしまったのだ。

第一章 シーター、みさおの化身.....72

ラーマとシーターは再会し、ラーマはシーターをようやく受け入れる。一行はアヨーディアの都に帰還し、ラーマは王に即位する。

第一章 真理（サティア）と正義（ダルマ）.....84

ラーマの統治は、平和と調和と豊かさに色どられた、理想の統治と呼ばれた。神だけがまことの友である などの教えが説かれ、この連続講話は終わる。

第一章 この連続講話のはじめに

世界を平和に導いて、
狭い心を捨てさせて、
すべてはひとつであり
むすびつきであり
助け合いだと教えるもの。
これこそが、まことの聖なる教育なのだ。

学生のみなさん。愛の化身たち。

強く美しく生きられるよう、人生の行為のすべてを変えていくこと。それは、あらゆる学生にとって何より大切な務めです。ところが残念ながら今の教育は、まともな生き方、むすびつき、愛などの、まことの教育の証あかしとなる徳性を育てられないままです。自分を高めようとする人にとっても、そうでない人にとっても、人生はまるで氷のように見るみるうちに溶けてなくなってしまいます。学生のみなさんは、そのことに気がつかなければなりません。

今の学生は、人生の目的とは何なのかわかっていません。人生の目的がわからないのに、それをつらいとさえ感じない人もいます。人生の本質をさとる努力をする人は、百万人が一千万人にひとりしかいません。しかしその努力こそ、人生の目的をはたす手がかりとなるものです。多くの学生や社会人が、食べものや着るもの、住まいや富を手に入れ、便利で心地よいものを味わうことが人生の目的だと考えています。そんなまやかしにとらわれたままでは、どんなにがんばっても人生は悲劇的なままです。人生の目的に気づけば、その日からすべてが変わります。苦しみ（ヴェーダナー-Vedana）から苦しみの解放（ニルヴェーダナー-Nirvedana）に変わるのです。光を自覚し、英知を身につけ、存在の意味をさとれば、苦しみは悦びに変わります。光といっても、太陽や月やランプの光のことではありません。こころ（heart）〔訳注……精神の情緒的なはたらき〕の光です。英知とは、科学的な知識のことではありません。こころを大きく変え、さとりに達することです。存在とは何でしょう。自分自身の真実をさとるのが、存在のまことの意味です。自分自身の真実をさとるとは、自分とは肉体ではない、心（mind）〔考えるはたらき〕でも、感覚でもない、気づくことです。まことのさとりとは、自分は物質的な限界の彼方にある、すべてを超えた原理に支えられているのだと、わかることです。

教育、そして不滅のもの

学生のみなさん。この夏期講話では、みなさんが教室で勉強する学科の範囲を超えていくことが必要です。この夏期講話で英知を学び、その英知によってよい徳性の輝きと悦びを得るのです。

富に恵まれ、行いが正しくても、跡継ぎがいないで悩んでいる人もいます。立派な学歴があっても、職に恵まれずに困っている人もいます。今の教育は、他人に物を乞うものに

成り下がってしまいました。神にお願いすれば、神は必ず応えます。人に物を乞うよりも、神に願った方がはるかにいいのです。

わたしは〔サティア・サイ大学の〕副学長から、「ラーマヤナ」の栄光について話をするよう求められました。わたしはこれから毎日午後、この叙事詩のすばらしさを説き明かしていきます。

「ラーマヤナ」

そのひとつひとつの音が、学生たちにとってこの上なく意味深いものです。人間の身体が血液の細胞でできているのと同じように、「ラーマヤナ」も神聖で気高い細胞でできています。「ラーマヤナ」の聖なる世界に深く入っていくことで、人生の大いなる達成は得られるのです。

学生は、時間割で決められた勉強だけしていればいいものではありません。精神的な世界にも入っていくべきです。わたしは決して世間の学問を軽んじているわけではありません。世間のことを学ぶのと同じように、精神的な世界の教育の大切さを説きたいと思っているのです。例をあげてお話ししましょう。

サッカーの試合は、ふたつのチームでおこなわれます。どちらの側にも十人ずつ選手がいて試合をします。試合中、ふたつのチームはお互いのゴールの間でボールを蹴って得点をあげようとします。人生とは、世間の学問と精神的な学問というふたつのゴールをめぐる試合をしているようなものです。試合中、選手はボールが空気でいっぱいになっているうちは、蹴りつづけます。ボールの空気が抜けてしまったら、誰もそんなボールを蹴りはしないでしょう。ボールの中の空気は、我欲がたまっているという意味です。我が強い人は、我欲がなくなってしまうまでは人からの攻撃にさらされる他はありません。ボールがしぼんでしまったら、手で取り去られるでしょう。反対に、大きくふくれあがったボールは、情け容赦なく蹴られるはずで、それと同じように、我欲を滅ぼした人が尊敬されるのに対して、我欲の強い人はありとあらゆる攻撃的まともになるのです。我欲から解き放たれた人だけが、理想の人へと変わることができます。世間のものは、あらわれては消えていきます。精神的なものはいつまでも残ります。精神的な道こそがすべての行為の支えとなるべきなのです。

背骨がなければ身体はなりたたないのと同じように、よい徳性と精神性がなかったら、人生は沈みこんでしまいます。背骨は三三の骨から成っていて、身体のすべてを支えています。それと同じように、よい徳性と精神性の原理が、人生を貫つらぬく背骨となっているのです。

「ラーマヤナ」を作り上げているのは、よい徳性という背骨です。わたしはそれを明らかにするつもりです。「ラーマヤナ」のよい徳性と精神性の原理に、学生のみなさんが強くこころを惹かれ、そこから豊かな恵みを得られるよう、わたしは願っています。学業を終えた人々も同じように、人生をよい徳性や精神性にむすびつけていくことが大切です。財産も知識も、みなさんを幸せにはくれません。神の愛だけが、永遠の喜びを与えてくれます。喜びだけでなく、この上なく強い力も与えられるでしょう。

どんなに多くを学んでも、神への愛がなかったら、何の実りも得られない。

あらゆることを学んでも、いつまでたっても愚かな者は、愚かなままで変わらない。

あらゆることを学んでも、いつまでたっても邪悪な者は、邪悪なままで変わらない。

学んでも理屈が達者になるばかり、澄んだ英知は身につかぬ。

たとえどれほど勉強しても、死から解放されないならば、いったい何の役に立つ。

不滅のものに達する知識を求めなさい。不滅のものとは何でしょう。不正なもの、不徳なものを捨て去ったのが、不滅のものです。人生は、いつの日か終わる定めです。よい徳性を、決して滅びることのないものを求め、努めはげみなさい。この、よい徳性の輝きこそ、今、国が求めているものです。この我欲のあふれている時代、わたしたちの学生が、よい徳性の輝きを放つように自分を磨き、幸福な、立派な国になるように力をつくすこと、それがわたしの強い願いです。

第二章 ラーマの原理(ラーマ・タットヴァ)その栄光

ラーマの御名 みな は、砂糖より、極上の蜂蜜よりもなお甘く、
カード にまさる味わいがある。
ラーマの御名は、唱えるにつれ果物の蜜そのものの味となる。
だからこそ、まことの気持ちでこころから、ラーマ、ラーマと唱えるがいい。
〔カードcurdは凝乳 ぎょうにゅう。ヨーグルトに似た乳製品〕

「ラーマヤナ」とは、人類の理想、ラーマの物語であると言われてきました。ほんとうはラーマの示した理想を实践すれば、誰でもラーマその人と言えるのです。だからラーマの示した理想を求めることが、すべての人にとってきわめて大切な務めです。「ラーマヤナ」は、個人、家族、そして社会のダルマ〔なすべき務め〕の結晶としてうやまわれています。

ラーマの物語がはじめて書かれてから幾千年もの時が流れたのですが、「ラーマヤナ」の、こころの内なる物語は、わたしたちの人生のあらゆる瞬間で演じられています。「ラーマヤナ」は、ラーマだけのお話ではありません。「ラーマ」という言葉は、〔妻の〕シーターのことをも指しています。ラーマとは〔この世界のすべてを意味するのだから〕、大地の娘、すなわちシーターという意味でもあります。大地は自然(プラクリティ)の一部なので、この大地に生まれたすべての子供たちは、シーターの備えていた徳を養うことが必要なのです。ヴァールミーキ〔この叙事詩を記録した最初の詩人〕は、「ラーマヤナ」のはじめのところでは、ラーマを理想の人間としてよいか迷いがあったのですが、書き進めていくうちに、ラーマこそは神その人であると思わざるを得なくなってきて、やがてこの叙事詩の終わりに、ラーマこそは神の化身であると結論しました。それに対して、トゥルシーダース〔一六～一七世紀の北インドの詩人。『ラーマ・チャリット・マーナス』という叙事詩を残した〕ははじめからラーマこそまさしくナーラーヤナ〔最高神ヴィシュヌ〕その人であるという信念をもってその「ラーマヤナ」を書きはじめ、ラーマは理想の人であると深く信じ、それを結論としました。「カンバ・ラーマヤナ」〔十二世紀にタミル語で書かれた「ラーマヤナ」〕の作者、カンバンは、人は神であり、神は人である(ナラはナーラーヤナであり、ナーラーヤナはナラである)という気持ちに強く動かされて、その「ラーマヤナ」を書きました。三人の偉大な書き手は、それぞれの「ラーマヤナ」において、自分たちの受け取り方に応じて、それぞれに違った意義を見えています。それぞれの作者は、それぞれに違った「ラーマヤナ」を描き、それぞれの信仰と考え方に見合ったラーマ像を示しています。まことにラーマの原理(ラーマ・タットヴァ)は、あらゆる人によって発展せらるべきものです。

アヨーディアーの栄光

アヨーディアーは、豊かなコーサラ国の中でもとりわけ栄えた都 みやこ でした。この都は

マヌ大王〔太陽神の息子〕が築いたもので、ここよりも美しい町はどこにもないほどでした。らせん状の建物が建ち並び、大きな市場や美しい庭が広がっていました。アヨーディヤーに住む人々は、美しい町をさらに新しく美しいものにしていくことを喜びとしていました。建物には真珠や宝石がちりばめられ、きららかに輝いていました。王のダシャラタは、あらゆる徳をそなえた人でした。そこに住む人々もみな、ダシャラタ王のもつ徳をそれぞれにそなえていました。王は清らかで、少しの我欲もない、安らぎと愛そのもののような人でした。国のわずらいをわが子のわずらいのように思い、大きな愛情を惜しみなく注いでいたのです。

ダシャラタ王は、八人の大臣と相談しながら国を治めていました。どの大臣も立派な人ばかりでした。聖典を修め、感覚の節度を守っていました。王の言葉を何よりも重んじ、王から命じられた仕事を成し遂げるためなら、いつでも命を捨てる覚悟でいました。王のお城にはふたりの祭司（プロヒタProhita）がいました。ヴァシシュタとヴァーマナVamanaです。このふたりは道に則のつとめた神聖な生き方をしていました。神を瞑想することに日々を捧げていました。

ダシャラタ王は、自分の政務を果たすことを大きな喜びとしていたのですが、ただ、子に恵まれないことだけが悩みでした。やがて、お妃きさきのカウサリヤーに娘が生まれ、シャーンティーと名づけられました。子供を望んでいる王さまは他にもいました。アンガAnga国のローマパーダRomapada王です。ローマパーダ王が自分の親しい友となったので、ダシャラタ王はシャーンティー姫をローマパーダ王の養女にやることにしました。ローマパーダ王はシャーンティー姫をたいそう可愛がり、深い愛とまごころをもって育てました。シャーンティー姫が年頃になると、ローマパーダ王はリシャシュリングRishyashrunaという若い聖者に嫁とづがせました。

ある日のこと、大臣のスマントラがダシャラタ王のもとへ行き、「お子をさずかるために『子息生誕の儀式（プトラカーメーシュティ・ヤジニヤPutrakameshti Yajna）』をおこなってはいかがでしょう」

と申しあげました。それとともに、ご祈禱をおこなうにあたっては、シャーンティー姫の婿である聖者リシャシュリングに祭司さいしを勤めていただくことも言い添えました。そこでダシャラタ王はスマントラ大臣とともに、みずからアンガ王国まで出向いていきました。そして「子息生誕の儀式」をとりおこなうにあたって、ローマパーダ王と聖者リシャシュリングをアヨーディヤーに招いたのです。

ちょうどそれが地上でおこなわれているときのこと、神々が大勢集まって、天界にいる最高神ナーラーヤナ〔ヴィシュヌ神〕のもとを訪ね、ランカー島の魔王ラーヴァナの非道なふるまいから救ってほしいという願いを申しあげていました。創造神ブラフマーが魔王ラーヴァナに神の恵みを与えてやったため、ラーヴァナはどんな魔物にも、どの天界の生きものにも殺されぬ身になっていたのです。このため、神々は気がかりでなりません。そこでブラフマーはこう言って、神々をなだめました。

「確かにわたしは魔王ラーヴァナの願いをかなえてやり、ラーヴァナは魔物によっても神々によっても倒されることはなくなった。ただし人間の手にかかって殺されることについては、何も言っていない。ラーヴァナは、人間のことを軽く見ており、虫けらのようにしか思っておらぬ。人間の手にかかって倒されるなど、夢にも思っていない」

そこで創造神ブラフマーは、神々にこう宣のべたのです。

「最高神ナーラーヤナが人間となって生まれ、ラーヴァナに死をもたらすであらう！」

このように、地上と天界で、あらまほしきことがふたつ重なったわけです。

神の化身ラーマの誕生

ダシャラタ王の願いに応え、「子息生誕の儀式」の祭司を勤めるために、賢者リシャシュリンガはアヨーディーヤの都にやってきました。最高神ナーラーヤナは、ダシャラタ王の祈りを大いに悦び、ついにその姿をあらわしました。そして、

「神の恵みを与えてやろう。そなたには子がさずかるであろう」

と宣 べたのです。最高神ナーラーヤナは、甘いミルクがゆ（パヤサムPayasam）の入った器をダシャラタ王に渡し、三人の妻に食べさせるように言いました。徳の高い行いと、道に則 った神聖な生き方によって、ダシャラタ王は、神の恵みを受けることができたのです。神の恵みは、まことにその人の努力にふさわしい形であらわれます。

ダシャラタ王は、ミルクがゆを同じ量に分けて、三人のお妃に与えました。王さまにとっては、どのお妃も同じように大切であったからです。学者（パンディット）の中には、お妃によってミルクがゆの量を変えて渡されたという、ゆがめた事実を言う人もいます。ダシャラタ王の三人のお妃、カウサリヤー、スミトラー、カイケーイーは、みんなたいへん仲良く、互いによく気づかって暮らしていました。

一番若いお妃のカイケーイーは、とても幸せな気持ちでこのミルクがゆを受け取りました。カイケーイーがまず思ったのは、自分の息子にアヨーディーヤの王さまになってもらいたい、結婚前にダシャラタ王がしてくれた約束があるのだから、ということでした〔ダシャラタ王は結婚前にカイケーイーに、どんな願いでもふたつかなえてやると約束していた〕。

カウサリヤーもたいそう喜んで自分に分けられたミルクがゆをいただきました。自分が一番年上の妃なのだから、自分が産んだ子がきっとアヨーディーヤの王さまになるに違いない。そうカウサリヤーは考えました。

ところが真ん中のお妃スミトラーは、そんなことを考えて喜んだりはしませんでした。誰とも仲がよく、スミトラー（すてきな友達）という名前にかなったふるまいをしていた人です。スミトラーは、自分に分けてもらったミルクがゆをテラスの手摺 てるの上に置いたあと、お風呂 呂に入って濡れた髪を太陽の下で乾かしていました。ところが、あれこれとせわしくしているうちに、空から驚 わし が舞い降りて、ミルクがゆの入った器をさらっていったのです。スミトラーはダシャラタ王の怒りを恐れ、カウサリヤーとカイケーイーに、この苦しい立場について相談しました。ふたりともたいそう徳の高いお妃 きさき さまでしたから、自分たちの分をスミトラーに分けてあげたのです。こうしてカウサリヤーからもらったミルクがゆのおかげでラクシュマナが、カイケーイーからもらったミルクがゆのおかげでシャトルグナが、スミトラーから生まれることになったのです。〔ラクシュマナとシャトルグナは、スミトラーが産んだ双子〕。そんなわけですから、カウサリヤーとミルクがゆを分けて生まれたラクシュマナがラーマに親しみ、カイケーイーとミルクがゆを分けて生まれたシャトルグナがバラタに親しむのは、まことに自然なことなのです。ラクシュマナは、まことの道に違 たが うことなく最後まで忠実にラーマに仕 つか えました。シャトルグナは最後までバラタに仕 えました。バラタはシャトルグナがいなかったら片時 かたとき も生きてはいなかったでしょう。互いに深くこころが通い合っていたのです。それと同じように、ラーマもラクシュマナがいなかったら生きていけないし、ラ

クシュマナもラーマがいなければ生きてはいけません。ラクシュマナが戦場で気を失ったときのラーマの悲しみは、たいへんなものでした。

「ああ、ラクシュマナ、この広い世界で、わたしはシーターのような妻を迎えることも、カウサリヤーのような母をもつこともできるだろう。だが、おまえのような弟をもつことは二度とできない」

ラーマのラクシュマナに対する至上の愛とはこのようなものです。

「ラーマヤナ」と人生の四つの目的

この四人の兄弟は、四つのヴェーダ〔聖典〕が形をなしたものです。四つのヴェーダとは何でしょうか。

「リグ・ヴェーダ」〔讃歌。インド最古の文献〕は話す言葉（ヴァーチェVaak）が形をなしたものの、

「ヤジュール・ヴェーダ」〔祭詞〕は心（マナスManas）〔考えるはたらき〕が形をなしたものの、
「サーマ・ヴェーダ」〔歌詠〕は生命 いのち の原理（プラーナPrana）が形をなしたものの、
「アタルヴァ・ヴェーダ」〔呪詞〕は知性（ブッディBuddhi）〔正しい判断をする精神のはたらき〕が形をなしたものです。

こうして、ダシャラタの王家の中で、四つのヴェーダが、ラーマ、ラクシュマナ、バラタ、シャトルグナの四人となって演じられていたのです。

もし、誤った考えにとらわれて、ラーマは最高神の化身なのだから、自分などとうていラーマのようにはなれないと思ったら、豊かなものは得られないでしょう。世界の主 ぬし が、人類に理想を示すためにこの地上に姿をあらわしたことに気がつかなければいけません。ラーマの示した偉大な模範に従って、すべての人が自分を磨いていくべきです。ほんとうはラーマは、すべての人のこころの奥で、大いなる喜びの原理のかたちで生きています。こころの奥にある大いなる喜びの原理とは、真の自己のことで、真の自己のない人は、この世にひとりもいません。ラーマの原理はすべての人の中にあります。それと同じように、ダシャラタという言葉の深い意味について考えてみる必要があります。ダシャラタはコーサラ国の王であるということにとどまりません。ダシャラタ王は人間の肉体を 十の感覚が引いている馬車を 象徴しています。肉体は、

活動するための五つの器官〔目・耳・舌・皮膚・鼻〕と

知覚するための五つの器官〔見・聞き・味わい・触れ・臭いをかく〕でできています。〔合わせて十の感覚器官〕

ダシャラタ王の四人の息子は、人生の四つの目的をあらわしています。すなわち

正義（ダルマDharma）

富（アルタArtha）

欲望（カーマKama）

解脱（モークシャMoksha）です。

この四つの目的が、人生を完成させてくれるのです。この四つなくして、いかなる完成もありません。正義（ダルマ）と富（アルタ）には深い関係があります。富は、正しいやり方で手に入るべきです。それと同じように、欲望、願いもまた、神聖で正しいものでなくてはなりません。

ラーマという神さまは、ダルマ〔正義〕の化身です。だからこそ、
「ラーマ、それはダルマの化身（ラーモー・ヴィグラハヴァーン・ダルマRamo Vighrahan Dharma）」

というのです。

ダルマの原理をゆるぎのない支えとして、よい人生を生きてください。残念なことに、この四つの目的はまったく軽んじられ、ないがしろにされています。しかしダルマとは、気ままな楽しみのことではありません。ダルマの主 ぬし である神に仕えることです。魔王ラーヴァナは、富を集め、欲望を満たすことを望んでいました。ダルマの原理にまるで逆らっていたのです。ラーヴァナはたいへんすぐれた学者で、六四の学問を修めていました。それに対してラーマは三二の学問を修めていただけです。しかしラーマはその学問を実践し、身につけていました。ところがラーヴァナは学問をほんとうに身につけることはできませんでした。身につかぬものは欲望（カーマ）の形となってあらわれ、このためにラーヴァナはついにその身を滅ぼします。ラーマが正義（ダルマ）の化身であるならば、ラーヴァナは欲望（カーマ）の化身といえます。こうして正義と悪との戦いがおこりました。ラーマは、ダルマの原理に従っていたために、サティア Sathya（真理）の化身となっていきます。ラーヴァナはダルマに背 そむ いていたせいで、いつわり（アサティア Asathya）の化身となってしまいます。善と悪、真実といつわりとの戦いは永遠につづきます。サティア（真理）とダルマ（正義）というふたつの原理に従い、実践するのは、すべての人の務めです。サティアとダルマこそは、神が形をなしたものです。このふたつ他に神はありません。

「ラーマヤナ」を生きる

ラーマの原理には、妙なる神秘がたくさんあります。ラーマの物語は、倫理的にも精神的にも実質的にも、この上なくすぐれたものです。この世界でどう生きるべきか、家族の中で、社会の中で、どう行動すればいいかを、ラーマの物語は教えています。それからまた、どうやって自分をいましめ、人格を磨くかも教えてくれるのです。

強い人格を志すことによってはじめに、家庭や社会で理想あるふるまいができるようになります。ラーマは、あらゆるすぐれた徳性を深く身につけた、理想の人となりました。ラーマは、心の落ちつき、調和、喜びといった原理も深く身につけていました。この大いなる喜びの原理は、どんな人のこころにも秘められています。人類のすべての人に、この喜びの原理をさとり、味わう権利があります。喜びの原理こそは、ラーマの原理です。真理・正義・愛・平安。ラーマは、この四つの大切な原理が肉体となってあらわれた存在なのです。

ラーマは、全宇宙を支えているダルマの化身です。まことの人間とは、ダルマの原理に従って実行する人です。燃えるのは炎のダルマであり、冷たいのは氷のダルマです。燃えなければ炎ではないし、冷たくなければ氷ではありません。それと同じように、人間のダルマは、身体を使って行動し、こころの導きに従うところにあります。何をするときも、心と言葉と行為がひとつにむすびついていること それがダルマの実践です。つまり、ダルマの生き方とは、神の生き方をいうのです。

人々は、ダルマという言葉のほんとうの性質もその偉大さもわからないまま、この言葉を口にしています。ダルマにはいろいろな種類があります。一家の主人のダルマ、独身の人のダルマ、

世を捨てて出家した人のダルマなど、さまざまです。しかし、こころ(heart)のダルマこそが最高のダルマです。こころのダルマこそは、人生のダルマです。どんなにつらくても、心と言葉と行為をひとつにむすびつけていかなければなりません。「ラーマヤナ」は、その最高の証あかしです。神の中の人間性と人間の中の神性がむすびつけば、完全なるもの(プールナトゥヴァ Poomathva)となります。

「神はすべてである。創造の前であってもすべてであり、創造の後であってもすべてである(プールナマダハ・プールナミダム・プールナトゥ・プールナムダチュヤター) Poomamadhah Poomamidham, Poornaath Poomamudatchyate)」と言います。この完全なるものが、人間には十分にそなわっているのです。

多くの人がラーマの物語の深い意味をまるで知らずにいます。「ラーマヤナ」のもつ細やかで微妙な意味を、ラーマやラクシュマナ、シーター、バラタ、シャトルグナなどの言葉の深い意味を、これからわたしは説き明かすつもりです。「ラーマヤナ」の中にある妙なる真理を理解することで、はじめてみなさんはこの物語を正しくとらえることができるでしょう。

ラーマの原理は、この上なく神聖で、品性の高い、輝かしいものです。ラーマの原理(ラーマ・タットヴァ)を身につけても成し遂げられないことなど、この世にひとつもありません。ラーマの物語が生まれてから何千年もすぎました。しかしラーマの原理は人々の胸に深くきざまれています。ラーマの原理はいつまでも若々しく、新しく、永遠に尽きることがありません。この世のどんなに小さなものにも、どんなに大きなものにも、ラーマの原理は含まれています。ラーマの原理は名前や姿に限られません。あらゆるものを超え、時間さえも超えています。永遠に咲きほこる花のように、ラーマの原理は生きつづけます。学生のみなさんは、ラーマの原理を知ること、人間の本質とは何なのかがわかるでしょう。

神が化身(アヴァターラ)として、人間の姿をしてこの世に生まれたとしても、それが自分たちと同じ格好をした、ただの人だと思っはいけません。神の化身は人の姿はしていても、その格式と厳 おごそ かなさまは限りがないのです。

白い石をお菓子と思って食べてはならぬ。

綿 わた の実をマンゴーと思って食べてはならぬ。

なぜ神は人の姿を取るのか

姿かたちにとらわれて、惑わされてはいけません。神は人の姿となり、みずからが模範になることによって、人間の生き方を変えます。人の姿になることで、はじめて人間を解放することができるのです。ダルマと神をないがしろにして墜 おちていくのは、人間だけです。人としてのダルマをかえりみないのは、人間だけです。鳥や獣は、それぞれのダルマを堅く守っています。そのダルマは少しも衰えてはいません。だから神の化身(アヴァターラ)が、鳥や獣に生まれることもないのです。

主クリシュナ〔完全なる神の化身。「バガヴァッド・ギーター」を説いた〕はこう言っています。

「わたしは善を守るために、この地上にやってきた(パリトラナーヤ サードゥナム Parithranaya Saadhunam)」(『バガヴァッド・ギーター』第四章第八節)

神の化身（アヴァターラ）は、よいものを守るためにやってきます。ラーマの名前をただたどしく唱えているだけでは何にもなりません。まずラーマの原理を正しく知ることが大事です。ラーマの原理（ラーマ・タットヴァ）は愛の原理（プレーマ・タットヴァ）です。ラーマに習い、愛の道を進みながら、自分を変えていきなさい。どんなに深く立派な学問があっても、心が変わっていかなければ何ものにも達することはできません。

第三章 使命のはじまり

真理と正義と愛とがともになされれば、大地は悦びに満たされる。
真理と正義と愛とがともにあるならば、世界の平和とさいわいは守られる。
このとうとい真理を聞くがいい。
バーラタ〔インド〕の誉 ほま れあるれ息子よ。

聖仙ヴァールミーキは、三つのやり方で「ラーマヤナ」を伝えています。ラーマの物語、〔ラーマの妻〕シーターの物語、魔王ラーヴァナを滅ぼす物語、この三つです。

「ラーマの行いが『ラーマヤナ』である（ラマースヤ・アヤナム・イッティ・ラーマヤナム Ramasya ayanam iti Ramayanam）」

「ラーマヤナ」はラーマの物語として語られます。それはまた、神の物語でもあります。

それから「ラーマヤナ」は、シーターの物語として語られる叙事詩でもあります。シーターの物語とは、ひとりの自己の物語でもあります。

「ラーマヤナ」の三つめの面は、魔王ラーヴァナが倒される物語です。ラーヴァナが倒されるとは、無知が滅びることを意味します。ひとりの自己と、究極の真の自己とのつながりがわかれば、無知は消え去るのです。

「ラーマRama」という言葉には「ラRa」「アAa」「マMa」という三つの音の単位があります。

「ラRa」は、火の原理を意味します。

「アAa」は、太陽の原理を意味します。

「マMa」は、月の原理を意味します。

そして、

宇宙のはじめておこりし時の音「アAa」は、太陽の原理であり、無知の闇をはらいます。

「マMa」は、月の原理であり、内なるところ（heart）を静めます。

「ラRa」は、火の原理であり、まやかしをはらいます。

このようにラーマの名前はヴェーダの教えを含んでいるのです。

アサトーマー・サッド・ガマヤ

タマソーマー・ジョーティル・ガマヤ

ムリッティヨールマー・アムリタム・ガマヤ

Asathoma Sad Gamaya

Tamasoma Jyothir Gamaya

Mrithyorma Amrutham Gamaya

真理でないものから真理へ

闇から光へ

滅びゆくものから不滅のものへ、

どうかわれらを導きたまえ。

〔「プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド」(1-3-28)〕

ヴァシシュタの喜び

四人の子供が生まれると、ダシャラタ王は子供の誕生に伴う儀式をすべておこないません。二日目、ダシャラタ王は聖者ヴァシシュタに、四人の子供たちへの祝福を与えていただきたいとお願いしました。はじめ聖者ヴァシシュタは声も出ず、言祝 ことほぐ言葉もたどたどしいほどでした。ようやく落ちつきを取り戻すと、こう言いました。

「いやはや、魔法でもかけられたように言葉が出ませぬ。私がこの王家に来た務めは、今日はたされました」聖者ヴァシシュタはさらにこう言います。

「私が僧としてここに来たのは、世界の主 めし が王のお血筋の者としてお生まれになり、そのお方とつながりをもつ幸運を求めたからです。王の富や地位に惹かれたわけではありませぬ。王のお血筋の者として生まれたのは、まさしく神その人であられます。しかし、この世のまやかしにとらわれているために、王はこれからもこのお方が人間の子だと思いこまれたままでしょう」

聖者ヴァシシュタは、喜びの涙を流しながら家路につきました。この日、自分の人生の目的が達せられたことを知ったからです。

教育を受ける

それよりも少し前、ラーマが生まれたときに、とても意味深いことがおこっています。子供が産まれたというおめでたい知らせを伝えに、カウサリヤーの召使いの女がダシャラタ王のもとへ大急ぎで駆け込んできました。知らせを聞いたダシャラタ王はたいそう喜んで、宝石の首飾りをその召使いに与えてやろうとしました。ところが召使いの女は王の申し出を断ったうえ、こう申し上げたのです。

「王さま。わたくしどうしても、あのお子さまを抱っこして、頬 ほお ずりしたいのです。どうかどうか願いをかなえてくださいまし」

昔は徳の高い生き方をした人がいて、こんなとうとい考えをしていたのです。

ダシャラタ王は、大きな愛情をもって子供たちを育てました。子供たちが五歳になると、聖なる紐 ひも の儀式〔学問のはじまりの儀式〕をおこないました。王さまは聖者ヴァシシュタに、子供たちに学問の手ほどきをするよう求めました。

子供たちは十歳になる前に、四つのヴェーダを学び終えました。それどころかその年頃には全員が よい徳性について、世間について、精神的な道について あらゆる種類の学問を修めたのです。四人の子供たちは、すべての人々が穏 おだ やかで幸せになれるよう、努めはげんでいました。

第一に学んだ知識は、精神について、内なるたましいについての知識です。たましいについての学びこそは、最高の学びです。俗世間の知識はどれも、いわば小川のせせらぎのようなものです。それに対して精神的な知識は、大海原のようなものです。この四人の子供たちもまた、高い品性と最高の徳を身につけていました。我欲で汚れることのない徳です。子供たちはさらに、弓

術や剣術や馬術などの武芸を修めました。四人は、馬や象に乗る名手となりました。あまりに速く駆けていくさまは、目にも止まらぬほどでした。そしてラーマに弓術の手ほどきをしたのは、カイケーイー妃 ひ でありました。弓の名手であったカイケーイー妃は、まれなる愛と大きな親しみをもって、いくさの技術をラーマに教えたのです。

子供たちが十四歳になったときに、ダシャラタ王はみんなを結婚させることにしました。男の子が道から外れることがないように早いうちに結婚させるのは、この時代のしきたりでした。このために王さまは、聖者ヴァシシュタのようなすぐれた長老にいろいろと相談をしていたのです。

そのとき、聖者ヴィシュヴァーミトラがあらわれました。ダシャラタ王はこの聖者を手厚く迎えました。聖者ヴィシュヴァーミトラはまず王に祝福を与え、王と国民の無事について問いかけました。ダシャラタ王が聖者ヴィシュヴァーミトラに訪ねてきたわけを尋ねると、聖者は、「もしも王がわしの望みをかなえると約束していただけるならお話しいたそう」

と言います。王が、

「あなたさまのお言葉どおりにいたします」

と約束すると、聖者ヴィシュヴァーミトラはこう言ったのです。

「そなたの息子のラーマを、儀式（ヤジニヤ Yajna）を守るためにつかわしてもらいたいのだ」
〔魔物の女タータキーが、聖者がおこなう儀式の邪魔をしていたため〕

それを聞いたダシャラタ王は、聖者に許しを乞いました。

「ヴィシュヴァーミトラさま。息子のラーマは十四歳です。まだ幼く、これまでどんな苦労もしたことはありません。儀式（ヤジニヤ）を守るために息子をひとりで行かせるなど、わたくしにはとうていできません」

聖者ヴィシュヴァーミトラは、怒りの声をあげました。

「愚かなことを申すでない！そなたは自分の言った言葉をひるがえそうというのか。誇り高きイクシュヴァーク Ikshvaku の一族〔ラーマの家系〕の者で約束を違 たが えた者は、いまだかつてひとりもおらぬ。イクシュヴァークの血を継ぐ男はいつも、真実を貫き、潔 いさぎよ く、神聖でなくてはならぬ。そなたはわしとの約束を破り、一族の栄光に泥を塗ろうというのか。どんな立派なことをして、どれほど神への勤め（ヤーガ Yaga）をしても、約束を違 たが えては何にもならぬぞ。いつわりを口にした者の罪は、死に値する。約束が守れないくらいなら、死んだ方がましであろう」

ダシャラタ王は聖者ヴィシュヴァーミトラの言葉を聞いて怖ろしくなりました。ちょうどそこに聖者ヴァシシュタがやってきました。何がおこったかを察し、ダシャラタ王に言いました。

「王さま。約束の言葉を違 たが えるのは、イクシュヴァークの血を引く者にふさわしくありません。ラーマさまの身を案ずることはないのです。ラーマさまは、この上なきめでたきお方。最高神ナーラーヤナ（ヴィシュヌ）の化身であります。儀式（ヤジニヤ）を守るために、ヴィシュヴァーミトラとともに行かせるがよろしいでしょう」

ダシャラタ王は、ラーマを聖者ヴィシュヴァーミトラとともに行かせることを受け入れました。ラクシュマナは、ラーマの分身のような人であったので、自分はラーマについていきたいと言いました。ラクシュマナはラーマの影のような存在です。同じように、シャトルグナはバラタの分身のような人でしたから、やはりバラタについていきたいと言ったはずで、これからお話しすることで、ラクシュマナとラーマが、シャトルグナとバラタが、どれほど深くつながっているかがわかるでしょう。

スミトラー妃のふたりの息子、ラクシュマナとシャトルグナは、この世に生まれたとたん泣き出しました。ラーマとバラタがゆりかごの中で楽しそうに笑って遊んでいるというのに、ふたりはまるで泣きやみそうにありません。ずっと泣きつづけているので、みんな途方に暮れてしまいました。スミトラー妃は、玩具 おもちゃ や面白そうなものなど、いろいろなやり方でふたりに泣きやんでもらおうとしたのですが、どうしようもありません。ダシャラタ王は何人もの医者にも相談し、この困った事態を解決したいと思ったのですが、やはりどうにもなりません。母親であるスミトラー妃は、最後の手段として聖者ヴァシシュタを呼びました。偉大な聖者はしばし瞑想に入ったあと、こう言いました。

「ああ、この子供たちの苦しみを取り除くのに薬など何もいりませぬ。ラクシュマナさまをラーマさまの隣に寝かせ、バラタさまのゆりかごにシャトルグナさまを寝かせればよろしいのです。ラーマとラクシュマナは同じ神の一部(アムシャ Amsha)です。バラタとシャトルグナも同じなのですよ」

スミトラー妃が言われたとおりにすると、ラクシュマナとシャトルグナはすぐに泣きやみました。それまではふたりともお乳を受けつけなかったのに、たくさん飲んでゆりかごで遊べるようになったのです。ふたりの様子が急にこんなに変わったことに驚いて、スミトラー妃は聖者に、どうかこのわけをお話しく下さいとお願いしました。聖者はこれを説き明かしました。

「よろしいか。枝は木の一部でしょう。人は神の一部です。神がいなければ人は生きることができません。ラクシュマナさまはラーマさまと同じ星のもとに生まれたのですから、ラーマさまと一緒にいられるまではあの子の心は安まらないのです。シャトルグナさまの場合も同じです。あの子はバラタさまと別々では耐えられないでしょう。どの人間も、そのみなもとである絶対の真の自己と離れては生きていけません。魚は、宝石を埋めこんだ金の鉢 はち があつたところで、そこに水がなければ生きていけません。魚は水の中で安らぎを得られるので、金の鉢の中で安らぐのではありません。水は魚が生きるみなもとなのです。それと同じく、ひとりの自己は、そのみなもとである究極の真の自己に達するまで、まことの安らぎは得られないのです」

思いどおりになる権力や富があっても、心の安らぎが得られない人はたくさんいます。それは、自分自身のみなもとである神と離れて生きているからです。世間は、はかない楽しみは与えてくれるけれど、永遠の安らぎと喜びを味わうためには、大いなるみなもとに還っていく他はありません。ひとつの生命 いのち もまた、永遠なる存在とむすびつくことで、はじめて幸せを見つめることができるのです。ラクシュマナがラーマと、シャトルグナがバラタと一緒に寝かせてくれるまで泣きつづけていたというこのお話は、その最高の真理をあらわしています。これが「ラーマヤナ」が第一に教えてくれる、偉大な教えです。

聖者ヴィシュヴァーミトラはダシャラタ王に、ラーマは最高神ナーラーヤナの化身なのだから決して大事はないと強く説きました。さらにまた、ラーマは神その人なのだから、別れを悲しむことはないとも言っています。そうやってダシャラタ王をとらえた、まやかしの力をはらおうとしたのです。ところがこの、ダシャラタ王をまやかしの力から解放放とうとした聖者ヴィシュヴァーミトラその人が、あとになって、ラーマとともに森を抜ける途中、まやかしの力にとりつかれることになるのです。

聖者とふたりの兄弟が、夕方になってサラユ川 Sarayu の岸辺に着いたときのこと。聖者ヴィシュヴァーミトラは言いました。

「ラーマとラクシュマナよ。お前たちはまだ子供だから、魔物の恐ろしい姿など見たこともなか

ろう。魔物から身を守るために『カ ちから (バラBala)』と『さらに強い力(アティバラAthibala)』というマントラMantraを教えてあげよう」

こうしてふたりにマントラを教えたあとで、聖者はあろうことか神の化身に向かってマントラを教えるなどという自分の厚顔 こうがん ぶりを、ひどく恥じ入ることになるのです。

使命のはじまり

二日目、聖者ヴィシュヴァーミトラはラーマとラクシュマナとともにシッターシュラマ Siddhashrama〔行者の草庵〕にたどり着きました。そこは、主 シュリー ヴァーマナ〔矮人 こびと。ヴィシュヌ神の第五の化身。世界を三步でまたいだとされる〕によって聖なる地とされたところです。シュリー・ヴァーマナこそは、遠いはるかな昔、カシャヤパKashyapa〔七大聖人のひとり〕の家系に生まれたナーラーヤナ〔最高神ヴィシュヌ〕その人でした。

アーシュラマAshrama〔草庵〕に着いてから、聖者ヴィシュヴァーミトラはラーマに言いました。

「ラーマよ。このシッターシュラマは、タータキーThatakiという魔物の女にすっかり荒らされてしまっている。タータキーには象百頭にも等しい力がある。お前はその女を殺さねばならぬ」

ラーマは言いました。

「先生(グルジ) 女の人を殺したくはありません。聖典で禁じられています」

「悪いしわざをなす者は、たとえ女でも殺さねばならぬ。この世に災いをもたらす女を殺すことは罪ではないぞ」

そこでラーマは聖典の言葉を引きました。

「『恐怖にかられている者、眠っている者、酔っている者、助けを求めている者、そして女。そのいずれかにあたる者を殺すのは正しくない』といいます」

「確かに聖典では、女を殺すことを禁じている。だが、人間に罪をもたらす女を殺すのは、罪にはならぬ」

ラーマはまだ受け入れがたく、こう問いかけました。

「これまで誰か、女を殺した人がいるでしょうか」

「インドラの神〔いくさの神。仏教では帝釈天 たいしゃくてん〕は、〔魔物の〕ヴァイローチャナVirochanaの娘、マンダラーMandharaを殺した。この女があまりに人々を苦しめていたからだ。マンダラーは死に値するのだから、自分は正しいことをしたのだとインドラの神は宣のべている。また聖者バラドヴァージャBharadwaja〔多くの賛歌の作者とされる聖人〕の妻があまりにひどく暴力をふるっていたので、ヴィシュヌの神はこの女を殺した」

聖者ヴィシュヴァーミトラの話聞いて、ラーマは魔物の女タータキーを倒そうと心に決めました。正しく気高い女性に手を触れてはならないが、あまりにひどい罪を犯している女は殺さざるを得ないことが明らかになったからです。そう話しているさなか、魔物の女タータキーの、耳をつんざくような声が聞こえてきました。タータキーはヴィシュヴァーミトラたちに雨のように石を降らせます。ラクシュマナは弓で次々と矢を放ち、石の雨をとどめました。すると今度は血と炎が嵐のように降ってきます。ラーマは勇 いさま しくこれを迎え撃ち、タータキーの攻撃をはねつけました。するとタータキーは醜い姿をあらわし、耳が壊れそうな恐ろしいどなり声を発します。ラーマは、

「音を射当てるもの(シャブダベーディShabdahedi)」

という技を使いました。この技を使うと、音のする方に向かって矢が飛んでいき、攻撃をするのです。魔物の女はたちまち地面にどうと倒れました。すると間もなく、タータキーの息子、マーリーチャMarichaとスパーフSubahuが攻め込んできました。タータキーと同じように、このふたりもシッターシュラマに、炎や血や石を雨あられと降らせます。そこでラーマは、

「心の矢(マーナサ・アストラManasa Astra)」

を放ちました。「心の矢」はマーリーチャを、何百キロもの彼方に吹き飛ばしました。次にスパーフに向かって、

「炎の矢(アグネーヤアストラAgnyastra)」

を放つと、スパーフはたちまち地面に倒れ伏しました。さらにスパーフの手下に追い打ちをかけるため、

「風の矢(ヴァーユ・アストラVayu Astra)」

を放つと、手下どもはみな、たちまち溶けて影も形もなくなってしまいました。

こうして、シッターシュラマは、かつてと同じような静けさと安らぎを取り戻しました。そこに住んでいた聖者や学生、女や子供たちも、言葉にできないほど喜んでいました。何人もの聖者がラーマの前に集まって誉めたたえます。

「ラーマ、あなたこそまさしく主 シュリー ナラーヤナの化身です。すべてを知り、どんなことでもでき、あらゆるところにいらっしゃるお方です。まだそんなにお若いのに、これまで誰もできなかったことを成し遂げたのですから」

それから聖者ヴィシュヴァーミトラは、五日間にわたる儀式(ヤジニヤ)をはじめました。聖者との約束どおり、ラーマとラクシュマナは儀式(ヤジニヤ)を絶えず見守りながら、食事も睡眠も断ったまま、儀式のおこなわれている祭壇のまわりを回りました。儀式(ヤジニヤ)のしめくりに、聖者ヴィシュヴァーミトラはラーマとラクシュマナに休むように言いました。ふたりは五日間も眠っていなかったからです。

ちょうどそのとき、ミティラー〔北ビハールのヴィデー八国の首都〕のジャナカ王から知らせが届きました。集会が催もよおされ、パーラタ〔インド〕のすぐれた勇者が招かれるというのです。それは、シヴァ神〔創造と破壊の神。仏教では大自在天 だいじざいてん〕の弓を折ることができる者がいるか見定めようとする集会でした。これに優勝した者には、ジャナカ王の娘、シーターを娶めとることができるというのです。聖者ヴィシュヴァーミトラはラーマとラクシュマナに、ミティラーの都に行ってシヴァの弓を折ってみるように言いました。はじめラーマは、父の許しを得ていないため、ミティラーに行こうという気はなかったのですが、ヴィシュヴァーミトラがふたりを説き伏せました。

「ラーマ、おまえの父はおまえに、わしの命ずるところに従うように、わしの思うとおりにふるまうように言ったはずだ。わしがミティラーまで一緒に行くように言うのだから、おまえはこの言葉に従わねばならない」

となれば、ラーマはヴィシュヴァーミトラの言うとおりにする他はありません。

ミティラーに行くまでに、聖者ヴィシュヴァーミトラはラーマにさまざまな強力な矢をさずけました。

「天人(ガンダルヴァ)の矢(ガンダカGandaka)」

「ダルマの神の矢(ダルマジャDharmaja)」

同じく「ダルマの神の矢(ダルマカDharmaka)」

「ヴィシュヌの矢(ヴィシュヌクラVishnukula)」

「創造神ブラフマーの矢(ブラマカBhramaka)」

などです。ヴィシュヴァーミトラは弓の名手だったからです。

出家僧をはじめアシュラムで暮らす人々は、ミティラーの都までヴィシュヴァーミトラのお供とも をすることになりました。この聖者が二度とシッターシュラムに戻ることはない、わかっていたからです。ヴィシュヴァーミトラがミティラーに向かう日になると、近くに住む動物たちまではらはらと涙を流していました。聖者は動物たちを深く思いやり、限りない愛情を向けていたのです。鳥や獣たちも、ラーマとラクシュマナから離れようとしませんでした。アヨーデヤのふたりの王子さまに大きな魅力を感じていたからです。

旅の間、聖者ヴィシュヴァーミトラは道の途中にあるいろいろな寺(アシュラム)の歴史を話してくれました。やがてガウタマGautamaという聖者の庵 いおり にやってきました。そこではガウタマの妻アハリヤーAhalyaが、夫の呪いを受け、石のように固くなったままずっと同じ場所に横になっていました。最高神ナーラーヤナの化身ラーマには、おこったことのすべてがわかっていたのですが、あたかも何も知らないかのようにふるまっていました。ところがラーマがアハリヤーに近づいていくと、その御足 みあし から発せられるエネルギーの振動が、石ようになったアハリヤーに新たないのちを与えたのでした。アハリヤーはラーマの御足に触れ、許しを乞うとともに、どうか恵みをお与えくださいと祈りました。

まさにそのときその場所に、聖者ガウタマが姿をあらわし、アハリヤーのけがれがはらわれたことを認めたのでした。ガウタマには、主 シュリー ラーマがやってきて自分の庵(アシュラム)を聖なるものに変えてくれることがわかっていました。アハリヤーを救ったあと、ラーマとラクシュマナは、ヴィシュヴァーミトラ、聖者ガウタマ、それから他の多くの聖者とともにミティラーへの道を進むのでした。

ラーマとラクシュマナがあらわれると、まるでライオンの子どもたちがミティラーの都まで行進してきたかのような大きな評判となりました。人々はふたりを誉めたたえ、この麗 うるわしい王子のことを噂するようになりました。ジャナカ王は、このふたりにふさわしい礼儀をつくして、暖かい歓迎の気持ちをあらわしました。ジャナカ王は、ラーマたちのために広い立派な屋敷を用意して、もてなしをしました。ところがラーマは、ひどく疲れて横になっているかのようなそぶりをしていました。十字に組んだ足をもみほぐしています。聖者ナーラダ〔ヴェーダの詩人のひとり。時代を超えてさまざまな神の化身の物語にあらわれる〕が人の姿をした最高神ナーラーヤナにまみえるために、そこにやってきました。神さまが自分の足をもんでいるのを見て、ナーラダは話しかけました。

「世界の主 ぬし よ。長い道のりを歩いてこられて、お疲れですかな」

ラーマは答えました。

「ナーラダ、わたしが疲れることがあると思うか。そんなことは決してない。わたしのこの身体はお前たちのためにある。わたしのためではない。この人間の身体を使って、人類を病 やまいから救わねばならないのだ」

まやかし(マーヤー)の力

神は、ダルマを支え、守るために、人間の姿となってこの地上に生まれました。この世界に住むあらゆる生きものの中で、人間だけがダルマの道から外れて生きています。神が人間の肉体をまともにも、人々はまやかしにとらわれたままです。神のおごそかな徳が目に入らないのです。まやかしは、厚いカーテンのように人間の目をおおい、真実を見えなくしています。ヤショルダーYashoda〔クリシュナの養母〕や聖者ヴィシュヴァーミトラのように、神と親しんだ人々でさえ例外ではありません。

あるとき、パララマ〔クリシュナの兄〕が母のヤショルダーに、弟のクリシュナが泥 どもを食べていると言いつけました。ヤショルダーに叱られると、まだ幼い〔神の化身〕クリシュナは真実を告げようとして、驚くべきことを口にしたのです。

「母さん、いったいぼくが泥 ども を食べ、顔に泥を塗るような、どろどろの、どろくさい子供だと、ほんとに思ってるんですか」

この言葉は、クリシュナの神性を豊かにあらわしています。ところが哀れなことに、ヤショルダーは、クリシュナの言葉の含んでいる深い啓示がわかりません。それどころか、クリシュナに口を開けなさいと言います。そうすればクリシュナがほんとうに泥を食べたかどうかかわかるといったのです。幼いクリシュナは、あーんと口を開けました。なんという驚きでしょう。クリシュナの口の中で、大宇宙の幾多の星ぼしが、ゆっくりと回転しているではありませんか。ヤショルダーは叫び声をあげました。

これは夢ではないかしら。それとも魔法使いに魔法でもかけられたのかしら。

これはいったいほんとなの？それとも何かのまちがいで。

私、起きているわよねえ。

私、ほんとにヤショルダーなの？

そのとたんにヤショルダーは、クリシュナが神その人であることに気がつきました。ただし気がついたといっても、それは長くはつづきません。クリシュナが口を閉じ、幼い姿で自分の前に立ったとたんに、ヤショルダーはクリシュナを抱きしめて、ふつうの子と変わらぬ扱いをしたのです。

それはナーラダやヴィシュヴァーミトラのようなすぐれた聖者でも同じです。聖者ヴィシュヴァーミトラはダシャラタ王に、王の息子のラーマが最高神の化身だと強く説いていたでしょう。それなのにラーマがふつうの王子であるかのように、バーラBalaとアティバラーAthibalaのマントラを教えたのです。ヴィシュヴァーミトラのようにすぐれた聖者でも、まやかし(マヤー)の不思議な力からは逃れられなかったのです。

シヴァ神の弓、折られる

大勢の力強い男が、広場にシヴァ神の偉大なる弓を車に乗せて引っぱってきました。バーラタ〔インド〕の遠くの国ぐにから、シーター姫を迎えるためにたくさんの王子が集まっていました。みんな、力くらべに挑戦することよりも、シーターとの結婚の方が大事でした。ところがラーマとラクシュmanaは、聖者ヴィシュヴァーミトラに命じられたとおりにここまで来ただけで、何を期待するわけでもありません。次から次へとたくさんの王子がシヴァ神の弓を持ち上げようとす

るのですが、恥ずかしそうに自分の席に戻っていくばかりです。魔王ラーヴァナもやってきて、弓を持ち上げて折ってやるうとしたのですが、弓の下じきになってしまい、ひどく悔くやし
い思いをしました。我欲にとらわれた人は、人生で必ずつらい思いをします。みんなに大声で笑
われて、ラーヴァナは、十個の頭をすべてなくしてしまったかのように、深く傷ついたのでした。

ラーマが弓に向かって静かに歩いていくと、集まっていたたくさんの王子から、驚きとねたみ
の聲があがりました。まだあどけない十四歳の少年がシヴァの弓に向かって歩いていくのです。
場内にどよめきの聲が上がりました。くらべるものとしてないシヴァの弓を、まだ幼さの残る少年
が持ち上げようとは、向こう見ずもはなはだしいと言っています。ところがラーマは弓を手にす
るや、そのまま左手で持ち上げました。嵐のような歓声がおこります。そして、ラーマが弓を曲
げ、弓弦 ゆみづる をつなごうとすると、シヴァの弓はすさまじい音を立てて折れてしまっ
たのです。立派な男性があらわれてついにシーターを娶めとることになって、人々は惜しみな
い拍手を送りました。聖者ヴィシュヴァーミトラはラーマに聞きました。

「どうだ。シーターと結婚するつもりがあるか」

するとラーマは、うやうやしい態度で、

「父と母の許しを得ない限り、結婚など思いもありません」と答え、それどころか、

「両親の許しがなければ、シーター姫を見るつもりもありません」

とさえ言っていました。

そこでさっそくジャナカ王は馬車で使者を送って、ダシャラタ王とお付きの者たちをミティラ
ーに招きました。ラーマとシーターが結婚すると聞いて、みんなたいそう喜びました。たくさ
んの歌をうたい、ふたりの結婚をぜひじかに目にしたいという願いをあらわしました。

そうするうちにダシャラタ王は、お妃や大臣や他の多くの人々とともに、ミティラーの都に着
きました。ジャナカ王は礼儀をつくし、大喜びでみんなを迎えました。立派な式の用意が整えら
れました。ラーマはこの上なく美しい衣装に飾られ、婚礼の大テント（パンダールpandal）に連
れて行かれました。

インドのしきたりでは、花婿と花嫁が掌てに乗せた聖なる穀物を、お互いの頭にかけて合
います。ラーマとシーターは王家の血筋の者でしたから、お互いの頭に高価な真珠をかける用意が
なされました。シーターは手を赤い色に塗っていたので、手のひらに乗った白い真珠はオレンジ
色に輝きました。その真珠がラーマの白いターバンにかけられると、真珠は白く輝きました。そ
の真珠がラーマの蒼あおい肌に着ると、真珠はまるでサファイヤのように瑠璃るり色
に輝くのです。

ラーマとシーターの結婚とは、まさしく自然（ブラクリティPrakriti）と神（パラマートマ
Paramatma、大いなるたましい）との結婚でした。シーターは大地から生まれ、大地の磁力、も
のを引きつける力をさずかっていた。だからこそ自然（ブラクリティ）の一部であった弓は、
軽々と持ち上がったのです。シーターが上げようと思ったために、磁力の助けによって弓はゆっ
くりと上がっていきました。ラーマがシヴァ神の弓を持ち上げようとしたときも、同じ原理がは
たらいていました。ラーマは磁石そのものなのだから、ラーマにとっては、弓を持ち上げるこ
となど、少しも難しくはなかったのです。すべては全人類のために演じられた神の劇の一部です。
ラーマとシーターの結婚は、まことに盛大におこなわれました。人々は、神の結婚というおごそ
かな栄光を、競きそって歌っておいりました。

第四章 自然（プラクリティ）と神（パラマートマ）との結婚

真理をいつも語るなら、仰 ぁお ぎ見られて頼りにされる。
真理とともにある人は、幸せで楽に生きられる。
真理の道を生きるなら、誰よりもいのちは永 なが い。
それがわたしの説きたい真理。

木に、自分の実を味わうことができようか。
草に、その花の蜜を味わうことができようか。
世間の学者に、神の知識の甘い実を味わうことができようか。
一枚の紙に、一冊の書物のまろやかなる英知がわかるうか。

愛の化身たち。

この世にはふたつの生きる道があります。ひとつは「外面的な生き方（プラヴリッティ Pravritti）」もうひとつは「内面的な生き方（ニヴリッティ Nivritti）」です。人間が物質的な出来事をとらえ、楽しみを得るのは「外面的な生き方（プラヴリッティ）」にあたり、そうしたものを超え、深い悦び、不滅のものを抱いているのが「内面的な生き方（ニヴリッティ）」だとふつうは考えられています。ほんとうは、どちらも同じひとつのものです。どちらも同じみなもとから来ているからです。外面的な性質とは、内面で感じているものの影であり、こだまです。

どうして人々は、外面的な生き方（プラヴリッティ）という足かせを解いて内面的な生き方（ニヴリッティ）に進むことができないのでしょうか。それは数多くの過去世から積み重ねてきた性質のためです。内面的な生き方にわき目もふらずにただちに飛びこんでいくのは、誰にもできることではありません。外面的な生き方から内面的な生き方への切り換えは、少しずつ、着実に進んで行くことが大切です。

さいわいをもたらすシーター（シーター・カリヤーナム Sita Kalyanam）

ミティラーでの結婚のお祝いは、四日にわたってつづきました。結婚の儀式というのはただの物質的なものと見られがちなのですが、ほんとうは深い精神的な意味があります。

結婚式の初日、花婿の親族が、式への招待のために、学者（パンディット）や聖者とともに花嫁の家に向かいました。同じ日、こちらも結婚式への招待のために、花嫁の親族が、夫が健在の女たち（スマンガリー Sumangali）とともに花婿の家に向かいました。

二日目は、花婿と花嫁の、それぞれの王家の歴史が高らかに読み上げられ、それとともにそれぞれの先祖への感謝の言葉が宣 べられました。コーサラとミティラーの地に栄光をもたらした、あまたの偉大な王の名前が読み上げられ、その徳がたたえられました。人々は、イクシュヴァーク王朝を栄えせしめた多くの王（ラーマの先祖）に思いをさせ、その徳をたたえました。ミティラーの立派な町の基礎づくりをしたニミ Nimi 王にはじまる、ヴィデーハ Videha 王国を統治

したたくさんの王〔シーターの先祖〕の名も同じように読み上げられました。感謝の気持ちが人生の大切な部分であり、自分の家系や国の栄光につくした人々への感謝を明らかに宣のべるべきだという真理を、この儀式は教えています。

三日目には、大きな規模の施ほどこしがなされました。たくさんの牛が金色の麻布や飾り物で色どられ、これを受けるにふさわしい人々に贈られたのです。乳牛 ちちうし は人間の四つの母 肉体の母(デーハマターDehamata) 牛の母(ゴーマターGomata) 大地の母(ブーマターBhoomata) ヴェーダの母(ヴェーダマターVedamata) のひとつにあたるのですから、牝牛 めうし を施すのはたいへん意義のあることです。

四日目は、「娘を施しに与える儀式(カニヤダーナKanyadana)」がおこなわれる日です。ジャナカ王は娘のシーターを連れてきました。ウールミラーUrmila、マーンダヴィーMandavi、シュルタキールティSrutakeertiもついてきています。三人はジャナカの弟サーカSaakaとクシャドヴァジャKushadhawajaの娘たちでした。ウールミラーはサーカの、マーンダヴィーとシュルタキールティはクシャドヴァジャの娘でした。それから、ダシャラタ王が四人の息子を連れてきました〔このときラーマの三人の弟は、それぞれシーターの三人のいとこと結婚した〕。

四人の花婿と四人の花嫁の間を仕切っていたカーテンが上がりました。

ラーマはあらぬ方を向いたまま、シーターを見ようとしませんでした。それに気がついたジャナカ王がラーマに呼びかけました。

「これが娘のシーターですよ(ママ・プットリー・イダム・シーターMama puthri idam Sita)」

それに対してラーマは答えました。

「まだ結婚のしるしの紐 ひも (マンガラ・スートラMangara Sutra) を結んでおりません。結婚もしていないのにその娘を見るのは罪深いことです。不心得なことで、偉大なるイクシュヴァークー族の名をけがしたくはありません」

この言葉こそは、ラーマがダルマの化身である証あかしです。ラーマは、妻はひとりであり、言葉はひとつであり、矢は一本であるという正義を貫きました。

聖者がマントラを唱え、楽師が楽器をかなでる中、ラーマはシーターの首に、結婚のしるしの紐 ひも (マンガラ・スートラ) を結びました。

次に、花嫁と花婿とが花輪をかけあう時となりました。ラーマが立ち上がるとシーターよりもかなり背が高くなってしまいうため、シーターがラーマの首に花輪をかけようとしても、とても無理なようです。そこでシーターは花輪を手に、静かに立ち上がりました。このときラーマはラクシュマナに合図を送りました。ラクシュマナはとても賢い人でしたから、ただひとりラーマの合図の意味に気がつきました。ラーマの合図の意味がわかると、ラクシュマナは、そんなことはとても無理ですという合図を送り返しました。ラクシュマナは、アディシェーシャAadhishesha(最高神ナーラーヤナがもたれかかっている、とぐるを巻いている蛇)であったので、シーターの立っている場所を高く盛り上がらせることができるはずだという合図をラーマは送ったのです。もしも地面を高くすれば、まわりの地面もみんな一斉に高くなってしまいうと、ラクシュマナは合図で伝えました。ラーマは、頭をかがめるつもりは少しもありません。自分に帰依する者には頭を下げて、女性のために頭を下げることは決してないと誓っていたからです。ラクシュマナは機転の利く人です。とっさにラーマの御足にひれ伏しました。ラーマは、ラクシュマナに立つてもらうためには、どうしてもかがみこむ他はありません。そこでシーターはこの機をとらえ、すぐさまラーマに花輪をかけたのでした。四人の花婿はあっこ四人の花嫁とともに、聖なる炎のま

わりを回りました。

神の証 あか し

次に、召使いがサラユーSarayu川の水を満たした器を運んできました。シーターがラーマの足を洗うのです。シーターは少しためらいました。石になったアハリヤーが血の通かよ う女性となったように（p22）ラーマの御足に触れると自分のはめてある金の腕飾りが女の人に化けてしまうのではないかと思ったのです。ラクシュマナはシーターの思いをさとり、自分からラーマの御足を布でふきました。それからシーターに、サラユー川の水でラーマの御足を洗うように言ったのです。シーターはそのとおりにして、自分の頭にその水をかけました。

「娘を施しに与える儀式（カニヤーダーナKanyadana）」となりました。ジャナカ王は聖典の教えにのっとり、こう言います。

「わしの娘を施しに、そなたに与えよう」

そこで花婿はこう言うことになっています。

「あなたさまの娘を施しにお受けいたします」

ところがラーマは一言もいわず、じっと黙ったままでした。婚礼の儀をつとめる祭司 さいしが口を出します。

「ラーマ、このめでたき時がすぎてしまう。さあ、すぐに言いなさい。『あなたさまの娘を施しにお受けいたします』だ！」

ラーマは応えました。

「イクシュヴァークの血筋の者が施しを受けたことはありません。『娘（カニヤーKanya）を』のあと『施し（ダーナDana）に』とおっしゃったために、わたしはあなたさまの娘を迎えることができないのです。イクシュヴァークの一族は、ただ与え、受けとることはしないものです。『娘（カニヤーKanya）を』のあとの施し『（ダーナDana）に』を外していただけるなら、あなたさまの娘をお受けいたしましょう」

ジャナカ王はラーマの思いを認め、『娘（カニヤーKanya）を』のあとの『施し（ダーナDana）に』を外して言いました。そこでラーマは言いました。

「あなたさまの娘をお受けいたします」

インドの伝統では花婿は、

「富（アルタ）と欲望（カーマ）と正義（ダルマ）について、私は妻の望みをかなえます」

という約束を言葉にしなければなりません。ラーマはそう約束するのを断りました。もしも自分と自分に従う者たちとの間に妻が割り込んでくるようなことがあれば、妻を放棄せざるを得ないとラーマは思っていました。そこでこう誓ったのです。

「わたしに仕える者の幸福こそがわたしにとっては何よりの大事。もしもその使命の妨げとなるなら、わたしは妻を放棄するつもりだ」

ラーマは、統治者としてのふるまいに、これほど高い基準を置いていました。この時代の統治者は、すべての言葉によく気をつけ、決して自分の言葉を違 たが えることがなかったのです。

ヴィシュヴァーミトラ、旅立つ

そうやってみんなが忙しくしている中、聖者ヴィシュヴァーミトラがやってきて、言いました。「ラーマとラクシュマナよ。おまえたちに最後の祝福を与えよう。これからわしはヒマラヤ山脈に向かう。わしがこの世にやってきた使命はすでにはたされた。わしは自然（ブラクリティ）と神（パラマトマ）との結婚を見る日を待ち望んでいたのだ。わしはこれまで、最高神ナーラーヤナとその妻ラクシュミーの結婚をはたすための手足であろうとしてきた。肉体を捨てるのに、これに勝 まさ る時はない。だからこれからわしは、ヒマラヤに向かおうと思う」

ヴィシュヴァーミトラの言葉を聞いて、誰もが驚き悲しみました。

このように聖者ヴィシュヴァーミトラは、ラーマヤナのはじめのところで、きわめて大切な役割をはたします。旅立ちの前にすべての武器をラーマにさずけたあと、ヴィシュヴァーミトラはこう言いました。

「そなたはあらゆる武器のみなもとだ。いまそれをお返ししよう。この世界のさいわいは、そなたとともにある。だからこそ、この武器のすべてをその手にゆだねよう」

ダシャラタ王は、はらはらと涙を流しながら言いました。

「ヴィシュヴァーミトラさま。息子にさせていただいたご恩は忘れませぬ。いつまでも感謝しておりますぞ」

聖者ヴィシュヴァーミトラは、そこにいた人々の礼拝 らいはい を受け、泣きやまぬ人を慰め、ヒマラヤ山脈へと向かいました。このあと「ラーマヤナ」では、聖者ヴィシュヴァーミトラについては何も語られていません。

アヨーディヤーに帰る旅の支度がととのっても、マーンダヴィー〔バラタの妻〕とシュルタキールティ〔シャトルグナの妻〕は、その日に出発することをためらっていました。シュルタキールティは未来の出来事を読み解く技 わざ に長 た けた人でした。その日が旅立ちには望ましくない日だと感じていたのです。でもそれを他のみんなに言うのははばかられたので、あとで合流すると言っていました。しかしダシャラタ王はその意見を認めず、旅立ちの支度をするようにふたりに言いました。ウールミラー〔シーターの従妹でラクシュマナの妻〕は、マーンダヴィーからためらっているわけを聞いたので、この日は旅立ちによい日ではないとシーターに話しました。それに対して、シーターはこう言ったのです。

「世界の主 めし その人が一緒に行かれるというのに、いったい何を案じておいでです。ラーマさまは時の化身です。神とともに旅出つのなら、おめでたい日など待ついわれはありません。道中何がおころうとも、ラーマさまが必ずお守りくださいます」

アヨーディヤーへ戻る旅がはじまりました。ミティラーの人々は悲しくてなりません。ジャナカ王のような偉大なカルマ・ヨーギー〔みずからの務めを修行とする聖者〕でさえ涙を浮かべていたほどです。何ごとにも執着しないはずのジャナカ王が涙を流すのを見て、ミティラーの人々は驚きました。ジャナカ王は涙のことをこう語っていました。

「これは悲しみの涙ではない。喜びの、至福の涙なのだ」

妻となった四人の娘に、ジャナカ王は馬車や馬や象など、たいへん立派な行列をつけさせました。

旅の途中、大きな声がとどろきました。

「止まれえ！」

聖者パラシュラーマ〔斧を持ったラーマ〕がその場にあらわれて、みんなを驚かせました。パラシュラーマはラーマに向かって言いました。

「ラーマよ、そなたはシヴァの弓を折ったそうだな。シヴァの弓など大したことはないわ。あんなものを持ち上げたくらい何でもない。もしもそなたにまことに力があるのなら、わしの武器を折ってみるがいい」

パラシュラーマはそう言って、ラーマの足もとに武器を放り投げました。ラーマは静かにその武器を拾い上げると、めりめりと折ってしまいました。それを見て、パラシュラーマはラーマの足もとにひれ伏しました。

パラシュラーマについては、人々の間にかなりの偏見があります。ラーマとの勝負がしたくて仕方がない、ひどく我が強い聖者だと思っています。ほんとうはパラシュラーマは、神性の目的のためにその場にあらわれたのです。自分の身につけている十六の聖なる力(カラー-Kala)のひとつをラーマにゆずり渡すつもりでした。完全なる神の化身(プールナーアヴァターラ Poornavather)には、十六の聖なる力(カラー)があります。シュリー・ラーマには十二の力(カラー)が、ラーマの三人の弟には三つの力(カラー)がありました。パラシュラーマには、残りひとつの力(カラー)がありました。その足もとにひれ伏したときに、パラシュラーマはラーマに十六番目の聖なる力(カラー)を与えたのです。〔12+3+1=16〕

そこから一行はさらにアヨーディヤーへの道を進んでいきました。アヨーディヤーでは、たいへんな歓迎がラーマたちを待っていました。誰もが歌い、踊り、四人の王子と四人の妻に聖なる炎(アラティ Aarathi)を捧げました。どこも祝いと喜びであふれんばかりでした。お祝いはまる十日の間つづきました。

それから十二年にわたって、ラーマとラクシュマナは、王国を治めるために父の手助けをしました。ふたりは最も模範となるふるまいをし、王国に暮らすすべての人に喜びを与えていたのです。

王の決意

ある夜のこと、ダシャラタ王は喉のど の渴きをおぼえ、水を飲もうとしました。水差しを手に取りようとすると、手が震えています。王は、自分がもう昔ほど強くはないことに気がつきました。すっかり弱くなってしまった、これ以上国を治めていく力はないとさとしたのです。そう思うとひどく心が乱れ、その日の夜は眠れなくなってしまいました。王は、みずからの衰えにかんがみて、正しい分別に従うならば、これ以上は国を治めるに値しないと考えました。ただちにしかるべき後継ぎに王国をゆずり渡すことにしました。次の朝、ダシャラタ王は大臣を呼び、アヨーディヤーのあとを継ぐのにふさわしい者を話し合うように言いました。なんと気高く、潔いさぎよい行為でしょう！能もないのに権力にしがみつこうとする現代の政治家とは、よほどの違いです。

集会では、長男のラーマがアヨーディヤーの王位を継ぐのにふさわしいと決まりました。ラーマは有能であり、模範的な人物であり、あらゆることを知りつくしていたからです。国民は、ラーマが自分たちの領主になると聞いて、たいそう喜びました。ラーマは国中の人から慕われていました。人々はラーマを、

「悦びをもたらす面立 おもだちのお方(プリヤ・ダルシャナ Prija Darshana)」

と呼んでいたのです。国民は、ぜひラーマさまに王さまになっていただきたいと思いました。ラーマこそはまさしく愛の化身であったからです。このすばらしい出来事を盛大にお祝いするた

めの、大がかりな支度がなされました。

召使いマンタラーのたくらみ

カイケーイー〔ダシャラタ王の一番若い妃。バラタの母〕に仕える召使い女マンタラーは、ラーマがアヨーディヤーの王に即位すると聞いて、ひどく驚きました。ラーマの蹴った鞠 まりがマンタラーの腰に当たって痛い思いをしたことがあり、それ以来マンタラーは、ラーマに深い怨 うら みを抱くようになったのです。それは、四人の兄弟が鞠 まり で遊んでいたときにマンタラーがたまたま居合わせたことからはじまりました。ラーマが鞠 まり を蹴ると、マンタラーにまっすぐ飛んでいき、その腰にぶつかったのです。マンタラーは飛び上がりました。ラーマを除く兄弟はみんな、それを見て大声で嘲笑 わら いました。マンタラーはこれをひどい侮辱と感じ、その日からラーマに怨みを抱くようになったのです。ラーマが間もなく即位すると聞いて、マンタラーの怒りはふくれ上がり、何とかしてやらねば、と思いました。

〔召使い〕マンタラーの怒り(クローダKrodha)と〔魔王ラーヴァナの妹〕シュールパナカー Soorpanakhaの欲望(カーマKama)が「ラーマヤナ」という物語の全体の原因をなしています。マンタラーの怒り(Krodha)がラーマを森に追いやり、シュールパナカーの欲望(Kama)がシーターをランカー島に追いやったのです。マンタラーは悪意に満ちたところでカイケーイー妃のもとへ行き、ラーマの件を伝えました。大切なラーマが明日の朝には王として即位するとマンタラーからはじめて聞いたとき、カイケーイーはたいそう喜んだのです。

ラーマが即位する話を知らせてくれた褒美 ほうび にと、カイケーイー妃が真珠の首飾りを与えると、マンタラーは怒り出し、首飾りを投げ捨てました。マンタラーにとって、自分を侮辱したラーマがアヨーディヤーの王になるなど、絶対に許せないことでした。カイケーイーはラーマをととても大切に思っていたというのに、マンタラーは内に怒りの炎を燃やししながら、お妃の心を毒のような思いで満たしていきました。怒りから生まれる害というのは、とうてい言葉につくせぬものです。

怒りにかられてしまった人は
何をやってもうまくいかない。
罪を重ねて、つまづくばかり。
怒りのせいで名は墮 お ちて
愛する身近な相手とも
別れる他はないだろう。

ついにマンタラーはカイケーイー妃の考えを変えてしまいました。このためにラーマとラクシュマナとシーターはアヨーディヤーを出ていくこととなります。王位に就くはずだったまさにその刻 とき に、ラーマはアヨーディヤーを發 た つのです。

〔カイケーイー妃はダシャラタ王に、どんな願いごとでもかなえてやると言った昔の約束を持ち出し、ラーマを十四年間森に追放し、自分の息子のバラタを王位に就かせるように迫った。ダシャラタ王はかつての自分の言葉をひるがえすことはできず、カイケーイーの申し出を聞き入れた。ラーマは父の言葉に従った〕

ラーマがアヨーディヤーを出ることになったのは、即位の式にあたる時刻が、めでたき刻 とき でなかったからだと言う人がいます。そんな物言いは間違いです。並ぶ者のない英知の人、聖者ヴァシシュタが即位の刻を決めたのですから。何が語られ、何がなされたとしても、ラーマがアヨーディヤーを出ることになったのは、ラーマ自身の意志によるものでした。これについては、ラーマはずいぶん前に、カイケーイー妃に心の準備をしてもらおうとしたことがあります。ラーマにとってカイケーイーはとても近 ちか しい人だったからです。ある日のこと、〔義理の母であった〕カイケーイーと話しているときに、ラーマはこう言ったことがあります。

「母上。わたしが森の奥に行ってしまう心づもりでいていただきたいのです。魔物どもを滅ぼすために、わたしは行かねばなりません。このことで母上は人からひどく言われることもあるでしょう。でも、心を強くもってください。バラタが王として即位するべきこと、わたしを森に行かせること、このふたつを父上をお願いするのですよ」

カイケーイー妃とラーマには、こうした親しみと理解がありました。カイケーイーは、美徳の化身なのです。自分の息子のバラタ以上にラーマを大切に思っていました。

ついにラーマがアヨーディヤーを離れる刻 とき が来ました。王として即位する刻が、森へと旅立つ刻に変わってしまったというのに、ラーマはずっと微笑みを絶やすことはありませんでした。そんなふるまいができるのは、ラーマが普通の人でなく、神の化身だからです。〔ラーマの実の母〕カウサリヤーは、ラーマのように落ちついてこの悲しい知らせを聞くことはできませんでした。カウサリヤーは言いました。

「ラーマや。森に行ってしまうなんて、私はこれまで夢の中だっただけこんな目にあったことはありません。ああ、なんというひどいめぐり合わせなのでしょう。これからは、ラーマにとって森がアヨーディヤーとなり、私にとってアヨーディヤーが森となるのですね。どうか使命を見事に果たして、お帰りになりますように」

森へ

ラーマが森に旅立つにあたって、弟のラクシュマナもついていくことになりました。ラクシュマナは、ラーマと離れて暮らすなど、どうあってもできません。ラクシュマナは最高神ナーラーヤナが座している蛇、アディシェーシャ Adishesha の化身なのですから、ラーマとラクシュマナが別れて暮らすなど、考えられないことでした。ラクシュマナは、誰にも何も言わずにラーマについていきました。ただラーマにこう言うだけです。

「私はラーマさまにお仕えするためにこの世に生まれました。ラーマさまがいなければ、ほんのひと時も生きてはいけません」

ラーマにはラクシュマナのところがよくわかっていたので、ついて来ることを許しました。〔これとともに、シーターもラーマについて森に行くことになる〕

やがて、ラーマが出ていくことが人々に伝わりました。みんな言葉にできないほどの深い悲しみに沈み、引き裂かれるような泣き声をあげています。

「ああ、ラーマさまがいなければ生きていけない。ラーマさまと離ればなれになるなんて、こんな苦しみにはとても耐えられない。このまま生きているよりも、死んだ方がましだ」

ラーマは人々を慰め、森への道を進んでいきました。

そしてあとに残されたアヨーディヤーでは、ダシャラタ王が、ラーマとの別れの悲しみのため

に、死んでしまうこととなります。

ラーマが追放されたとき、バラタとシャトルグナは叔父に連れられて、はるかケーカヤKekaya 王国〔カイケーイ妃の母国。現在のコーカサス山脈の近くとされている〕まで行っていました。高僧ヴァシシュタはケーカヤ王国に便りを送り、ただちにアヨーディヤーに帰るようにバラタとシャトルグナに伝えました。ヴァシシュタは、ダシャラタ王が亡くなったことは伏せていました。

大急ぎで馬車を走らせても、バラタとシャトルグナがアヨーディヤーに戻るまでには十五日もかかりました。兄弟ふたりは、アヨーディヤーの暗く沈んだ姿を見て、ひどく驚きました。鳥や獣は物憂 ものう そうに首をうなだれ、悲しげな声で鳴いています。犬は鼻をつまらせ、つらそうに歩いています。

バラタはカイケーイ妃の屋敷の前で馬車を止めると、母に会いに急いで駆けていったのですが、その様子を見てひどく驚きました。ダシャラタ王が亡くなったこと、バラタが弔 とむらいの儀式をしなければならぬことをカイケーイは告げました。バラタは、父が死の床にあったときに会える運に恵まれなかったことを、悲しく思いました。せめてラーマとラクシュマナだけは父の最期に付き添う幸運に恵まれたはずだ。バラタはそう考えて心を慰めました。

理想の弟、バラタ

バラタはすぐ屋敷に入りました。そこでカウサリヤー妃はバラタに、ラーマとシーターとラクシュマナがアヨーディヤーを出ていった事の次第を語って聞かせました。ラーマがアヨーディヤーを去ったという、さらにつらい知らせを聞いて、父の死という悲しみすらどこかに行っていました。アヨーディヤーを出ていくようにラーマに命じたのが父だと聞いて、父親の死へのバラタの悲しみは、憤 いきどお りへと変わりました。あまりに激しい怒りのため、弔いの儀式をおこなうのを断り、森に行つてラーマを連れて帰ろうと思ったほどです。しかし聖者ヴァシシュタがバラタをなだめ、父上の最期の儀式をおこなうのは、そなたのなすべき務めなのだと言いつ聞かせました。こうしてようやくバラタは、十五日の間油の中に浸けられていたダシャラタ王の遺体をとむらう儀式をおこなったのです。

次いでバラタは、ラーマをアヨーディヤーに連れて帰ろうと決めました。兄弟それぞれの母親、大臣、側近の人々とともに、バラタは森に向かいました。召使い女のマンタラーさえ一緒でした。聖者ティヤーガラージャ〔一八世紀から一九世紀にかけて活躍した南インド、テルグ語の詩人、作曲家〕は、バラタを「英知ある人」とたたえています。聖者はこう歌っています。

あなたが神でなかったら、
猿が橋などかけるでしょうか。
女神ラクシュミー があなたをたたえましょうか。
ラクシュマナがあなたをあがめましょうか。
英知ある人バラタがあなたをうやまいましょうか。
〔女神ラクシュミーは最高神ヴィシュヌの妻。ヴィシュヌがラーマに化身したとき、ラクシュミーもまたシーターに化身したとされる〕

バラタはラーマの馬車の轍 わだち をたどっていきました。森の奥深いところで鳥の群が飛

び交っているのを見つけました。それを見てバラタは、この近くに水場があるに違いないと思いました。水場の近くはたくさんの鳥が集まるからです。そしてまた、ラーマは水場からさほど遠くないところにいるはずだとも判断しました。ラーマにも水が必要だからです。バラタについてきていた人々、兵士、馬、象などの一団はどよめき、もうもうと土けむりを上げました。ラクシュマナは、この騒ぎが何なのか知ろうとしました。木の上に登ると、バラタが軍隊とアヨーディヤーの人々とともに近づいてくるのがわかります。ラクシュマナはアディシェーシャ〔最高神ナーラーヤナが座しているたくさんの蛇〕の化身でしたから、たちまち激しい怒りをあらわしました。

「ラーマさま！バラタが森の奥まで私たちを追い立てにやってきます。私たちと戦うために兵を率いてきたのです」

ラーマは、ラクシュマナに微笑み、言いました。

「ラクシュマナ。バラタと長い間ともにいながら、お前にはあいつのことがよくわかっていないようだ。バラタは平和の化身だ。わたしに深い愛のこころを抱いている。バラタに悪い感情をもってはいけない。少し待って見てるといい」

バラタはラーマのもとまで走ってきて、その御足にひれ伏しました。泣き叫んでは涙を流し、これまでおこったことの許しを乞いました。ラーマは弟をそっと抱きしめ、こう言いました。

「バラタよ。母上と父上は達者でおられるか。一族の者に変わりはないか」

トマス〔イエスの弟子。キリストの復活を疑った〕のような疑い深い人は、こんなふうにも思いかもしれません。

「ラーマがほんとうに神であるならば、ダシャラタ王がもう死んでいるのに、なぜ父は達者かなどと聞くのだろう」

神の化身(アヴァターラ)が人間の姿であられる場合は、いかにも人間らしくふるまいます。それとともに、人間が神の化身から学ぶことができるように、きわめて模範的なふるまいをします。ここでそのことに気がつかなければいけません。

バラタはラーマに、ダシャラタ王の死を知らせました。ラーマはこの悲しい知らせを聞いて、三人の弟を連れてサラユー川に行き、父への捧げものをしました。そのあとバラタはラーマに、アヨーディヤーに戻ってきて国を治めてほしいと必死になって頼みました。ところがラーマは、父上に述べた言葉を違 たが えるつもりはない、と言いました。ラーマのいないアヨーディヤーなど住みたくはない、ラーマがいなければアヨーディヤーなど森の中と同じだとバラタは言います。ラーマの履 は き物を王座におそなえし、アヨーディヤーから離れてナンディグラマ Nandigrama で暮らす、そしてそこで国の務めをはたすと言います。自分は十四年の間ナンディグラマでラーマを待ちつづける、もしも十四年の終わりまでにラーマがアヨーディヤーに戻ってこなかったら、火に飛びこんで死ぬつもりだと言うのです。ラーマはバラタに、アヨーディヤーを正しく治めるように言いふくめ、十四年がすぎたときに、必ずアヨーディヤーに戻ってくると約束しました。ラーマにそう言われ、バラタは重いこころを引きずってナンディグラマへと向かいました。ラーマの弟たちは、みなラーマに忠実でした。三人の弟にとってラーマの言葉は、神の定めた掟 おきて に等しかったのです。

ある日ラーマはラクシュマナに、チトラクータの山〔「輝く峰」を意味する。インド中部、デカン高原北部に位置する〕に小屋を建てるように言いました。ラクシュマナがどこに建てるのか

決めてくれるよう願うと、ラーマはこう言いました。

「ラクシュマナ、どこでもお前の好きなところに建てればいいだろう」

その言葉を聞いて、ラクシュマナは、どうしようもなくつらい気持ちになって、黙りこんでしまいました。シーターがどうしてそんなに悲しんでいるのかと尋ねると、ラクシュマナは言いました。

「私には自分の意志などありません。ラーマさまの望みこそは私の望みです。いったい私がそんなことを言われるような、どんな罪を犯したのでしょうか」

ラーマにはラクシュマナのところがよくわかりました。ラクシュマナを抱きしめ、こう言ったのです。

「お前を傷つけてしまった。どうか許してほしい。ここに小屋を建ててくれ」

「ラーマヤナ」は人間がこの世で、社会や家庭にあって、どう生きるべきかを示しています。ラーマは理想の兄、理想の息子、理想の夫、理想の指導者の模範を示しました。ラーマの理想は、世の中が秩序を失い、混乱に悩んでいる時代にこそ、最もふさわしいものです。この世界において、夫と妻、父と息子、先生と生徒、指導者と一般の人との間に、さまざまな誤解が生まれ、仲たがいがおこっています。わたしたちはそんな時代に生きているのです。この事態を救う道は、ラーマの示した理想に従うところにあります。

第五章 シーター、連れ去られる

無いと思うものが在り、
存ると思うものが無い。
永遠に在るものそれは神だけだ。
ほんとうは無いものそれはこの世界。

学生のみなさん、愛の化身たち。

人間として生きるのは、何よりもとうとく神聖です。この地上に住むあらゆる生き物の中で、人間は最高の存在です。知能がすぐれているだけでなく、神聖な力をそなえているからです。人間にはいろいろな素質や能力があります。残念ながら、能力を間違っただけで使っているために、人生を無駄にしているのです。人間にはふたつの道が開かれています。

さいわいの道（シュレーヨー・マールガSreyo Marga）と
快樂の道（プレーヨー・マールガPreyo Marga）です。

さいわいの道は、すなわち内面的な道です。それに対して、快樂の道は外面的な道にあたります。

チトラクータ山にいる間に、ラーマは多くの聖者や覚者とさまざまな議論を交わしました。道を求める人々は、神とすごす時を心待ちにしていました。外面的な生き方（プラヴリッティ Pravritti）と内面的な生き方（ニヴリッティ Nivritti）、さいわいの道（シュレーヤス Sreyas）と快樂の道（プレーヤス Preyas）などの話題を話し合うことで、この機会を生かしたいと願っていたのです。ところがチトラクータ山の静かなたたずまいは、たちまち騒がしく刺々 とげとげ しい空気になってしまいました。神聖な儀式がおこなわれているのを魔物たちがかぎつけ、激しい攻撃をしかけて聖者たちを苦しめるようになったのです。聖者はみんな、山を離れてもっと安全な場所に行こうとしました。年老いた聖者がラーマのもとへ来てこう言います。

「ラーマさま。魔物たちの邪悪なふるまいは、日に日に激しさを増しております。あやつらは道を求める人々をひどく苦しめています。だからみんな、もうここを出ていきたいと思っております。ラーマさまは家族をおもちの身。こんなところで暮らすのはお勧めできることではありません。あなたさまのように偉大な力の持ち主であっても、ここで暮らすのはやはり危険であります。」

そこでラーマは聖者たちと話し合い、深い森の地、ダンダカの森 アーラーニヤ Dandakaranya に行くことにしたのです。

ダンダカーラーニヤのラーマ

ラーマたちがダンダカの森 アーラーニヤ（インド中央部。ゴダーヴァリー河とナルマダー河の中間にあったとされる広大な森）で暮らしはじめたとたんに、事件がおこりました。ある日、

ヴィラーダViradhaという魔物にシーターがさらわれてしまったのです。魔物はどうしてもシーターを返そうとしません。ラーマとラクシュマナに、シーターを取り返そうとすれば怖いことになるぞと、おどしをかけます。そんなことは意に介さず、ふたりは魔物のヴィラーダに戦いを挑みました。怒り狂ったヴィラーダは、ラーマとラクシュマナを、右手と左手につかんで走り出しました。それを見たシーターは自分の不幸を嘆き、いっそ自分もさらってほしいと魔物に訴えました。ラーマとラクシュマナがヴィラーダの両手を切り落としたのはこの時です。命を奪おうとしても、魔物のヴィラーダの息は絶えません。ヴィラーダはラーマに言いました。

「おれは特別な恵みによって守られている。だからお前がおれを殺すことはできない。どうか穴を掘っておれを埋めてもらいたい」

魔物のヴィラーダはさらに言いました。

「ここから遠からぬところに庵いおりがある。そこでシャラバンガという聖者が、お前たちの来るのを昼も夜も待ちつづけているだろう」

ラーマは、シーターとラクシュマナを連れて聖者シャラバンガのもとへ向かいました。聖者シャラバンガはラーマの姿を見て、大いなる喜びに達しました。

「おお、ラーマさま。私の望みは今日はたされました。もはやこれよりも生きながらえる要はありません。私は幾度もこの肉体を捨てようとしてきました。しかしそんなときも、いつの日か最高神ナーラーヤナにこの森においていただけという望みは忘れなかったのです。私は、人間の姿となった神にまみえるために生きたいと願っておりました。今日この日、ようやく神とお会いすることができました。どうかしばしお待ちください」

そこまで話すと、聖者はラーマの前で薪まきを積み上げました。そしてラーマとラクシュマナとシーターに最期の礼拝らいはいをして、燃えさかる炎の中に身を沈めたのでした。すると炎の中から、天界の楽師トゥムブルThumburuがあらわれました。呪いをかけられて、聖者シャラバンガの姿となって生きていたのです。トゥムブルはラーマとラクシュマナに、偉大なる聖者アガ스티ヤ〔『リグ・ヴェーダ』に登場する聖人〕の庵いおり（アーシュラマAshrama）を訪ねれば、その助けを得られましょう、と言いました。

そこでふたりの兄弟はシーターを連れて、聖者アガ스티ヤの庵いおりを訪ねました。アガ스티ヤは三人に、ゴダーヴァリー川Godavariの岸边にあるパンチャーヴァティーPanchavati〔現在のマハーラーシュトラ州の都市ナーシク〕と呼ばれる場所に行くよう勧めました。パンチャーヴァティーは果物や芋いもが豊かに実るし、気候も過ごしやすく、暮らすにはよいところだと。聖者はわざと、ラーマたちにパンチャーヴァティーに行くようにしむけたのです。魔物どもを倒すためには、シーターがそこで誘拐されることが、どうしても必要であったからです。聖者アガ스티ヤがラーマたちを自分の庵いおりにいさせようとしなかったのは、そうするとシーターの誘拐がなされるからでした。

シーターの助言

放浪をつづけた三人は、パンチャーヴァティーに住み着きました。でもパンチャーヴァティーでは、シーターは少しも幸せを感じられませんでした。ラーマとラクシュマナが毎日、荒ぶる暴力に夢中になっていたからです。ある日のこと、ラクシュマナが果物と芋いもを取りに行っ

ているとき、シーターはラーマのもとへ来て言いました。

「ラーマさま。欲望にかられた人は三つの罪を犯します。嘘をつく、妻以外の女の人を見つめる、暴力をふるう この三つです。ラーマさまは、はじめのふたつからは確かにまぬがれておりますわ。ラーマさまが嘘をつくことは決してないと私は信じています。あなたさまは真実の化身ですもの」

シーターの言葉を聞いて、ラーマはさいわいに思い、言いました。

「自分の妻から立派な人物だと言われるのは、男にとってまことに誉 ほま れあることだ。シーター、わたしが真実に親しんでいることがわかってもらえてうれしく思うよ」

シーターはつづけて言いました。

「それから、人の妻を見つめる欠点もおもちではありません。それはラーマさまのすばらしい徳ですわ。でも、獣や魔物に暴力をふるうのはよいこととは思えません。ここの魔物はラーマさまに何も悪いことをしていないではありませんか」

それを聞いたラーマは、微笑みました。

「シーター、きみの言うことはもっともだ。だが、わたしのしていることは、ここにいる聖者や道を求める人々との約束にかなったものなのだ。わたしは自分の務めをはたさねばならない。約束を守りたいのだ。ここの魔物たちは、わたし個人には悪いことをしない。だが、わたしに帰依する者たちを、言いようのないほど苦しめている。魔物らは悪意をもって、聖者のおこなう儀式を荒らしている。聖者はみんな人類のさいわいと安らぎのために儀式をおこなっている。わたしは人々のさいわいのために力を振るわざるを得ないのだ」

シーターは自分のあやまちに気づき、許しを得ようとラーマの御足に触れました。シーターの行いは、聖典の教えによくかなったものです。

夫が悪に溺れていれば
妻は夫を諫 いさ めるべきだ。
王に正しい助言のできる
大臣のようであるべきだ。

実際、妻というのはマンドーダリーのようになければいけません。マンドーダリーは、自分の夫であった魔王ラーヴァナの生き方を改めさせようと、いつも力をつくしていました。〔マンドーダリーは何度も夫のラーヴァナをいさめ、ラーマに降伏するように説いたが、ラーヴァナはこれを聞かず、結局は身を滅ぼした〕

春になりました。緑の葉が芽吹 めぶ き、涼しい風がやさしく吹いています。

黄金の鹿が姿をあらわしました。シーターはこれまでラーマに、たとえどんな欲も、かなえてほしいと願ったことはありません。でもこのときは、自分のために金の鹿を捕ってきてほしいとお願いしたのです。ラーマは、そうしよう、と言います。ラクシュマナが、そんなことは自分がやりましょう、と言うのですが、ラーマがそうはさせません。自分が小屋の中にはシーターの誘拐がなされなくなってしまうことがわかっていたからです。ラーマ自身はるか昔に描 え が いた大いなる計画において、ひとつひとつのことがどう進んでいくか、すべて決まっていたのです。ラーマは、黄金の鹿を追いかけました。逃げ回る黄金の鹿を見つけると、ひょうと矢を

放ちました。

黄金の鹿は、実は魔物のマーリーチャでした。〔第三章、魔物の女タータキーの息子 (p21)〕
ラーマをシーターから引き離すために、鹿の姿に化けていたのです。死にゆくときに、マーリーチャはラーマの声色 かわいさ を真似て大声で叫びました。

「おーい、ラクシュマナ！シーター！」

その声を聞くと、シーターはもう気が気ではありません。ラクシュマナに、行って何があったのか見てきてくれと言います。その声はほんとうにラーマその人のようでしたから、何か危険なことがおこったのではないかと、恐怖にかられたのです。ラクシュマナはシーターに言いました。

「姉上が聞いておられる声は、ラーマさまの声ではございません。これは魔物のはかりごとです。われわれを、たばかっているのです。ラーマさまに危険なことなど何もおこりません。ラーマさまは最高神ナーラーヤナの化身です。案ずることなどありません」

シーターには、ラーマの大いなる計画がわかっていましたから、なんとか理由をつけてラクシュマナを行かせようと思いました。やさしい言い方ではラクシュマナを出ていかせられないとわかっていたので、たいへん険 けわ しい言い方をしました。

「ラクシュマナ、あなた、ラーマさまが死んだら、私を妻にする気であるのじゃないでしょうね」

そんな言葉にはとても耐えられません。ラクシュマナはラーマを探しに行くことにしました。とはいえ、その場を去る前に、庵 (アシュラム) のまわりを囲む線を引き、決して線から出ないでくださいとシーターに言い残し、ラーマを探しに出ていきました。

鳥のジャターユスと出会う

その隙 すき に、魔王ラーヴァナが苦行者の姿をしてやってきて、シーターをさらっていったのです。ラーマとラクシュマナが庵に戻ってくると、そこにはもう誰もいませんでした。

二人の兄弟はダンダカの森を、今度はシーターを探して歩いています。探しているうちに、鳥のジャターユスがひどい傷を負っているのを見つけました。ラーマはかつてジャターユスに出会ったとき、こいつは魔物ではないのかと疑ったものでした。そこで鳥は、自分はラーマの父ダシャラタ王の友なのだと言ったのです。鳥のジャターユスは、ふたりが庵 いおり を空けている間にシーターを見守る仕事を与えていただきたいと、ラーマに祈っていました。シーターが誘拐されたとき、ジャターユスは空中の魔王ラーヴァナに立ち向かい、シーターが連れ去られるのをなんとしても防ごうと、勇敢に戦いました。ところが魔王ラーヴァナはジャターユスの二つの翼を叩き折ってしまったのです。ジャターユスは、なすすべもなく死んでいくところでした。ちょうどそのときラーマたち兄弟がやってきて、シーターがさらわれたときの様子を聞いたのです。ラーマは鳥のジャターユスを哀れむとともに、自分のために命を犠牲にしてくれたことに深く感謝しました。ひざにジャターユスの頭をのせ、喉 のど に冷たい水をそそぎました。ラーマの手からそそがれる水を飲みながら、ジャターユスは息をひきとりました。ダシャラタ王も天国の境地 (シュバガティ Subagathi) に達する幸運には恵まれなかったのに、ジャターユスはラーマに膝枕 ひざまくら をしてもらい、この境地に達することができたのです。だからこそ、こんなふうにするのです。

心よ。何も願わぬように。

願えばそれだけ遅くなる。
何も願わなかったなら、
すぐに成し遂げられるだろうに。
ジャターユスとシャバリー-Shabhari はいまわの際 きわ に、
神のおそばにいたいとは願わなくとも
その祝福を受けただろうに。
〔 シャバリーについては第六章 (p 44) 参照 〕

帰依する者はいつ、どこで、どんなふうにして祝福されるのがふさわしいか、神は確実に知っています。神の恵みは、その人のした徳のある行為にまことにかなった形であらわれます。

鳥のジャターユスは死にゆくときに、マタンガMatanga山に住むスグリーヴァの助けを求めるようラーマに言い残しました。ラーマはジャターユスの弔 とむら いの儀式をおこない、マタンガ山めざして旅立ちました。

神のために生きる

旅の途中、ラーマとラクシュマナは多くの魔物に激しい暴力を加えなければなりません。シーターは暴力をひかえてもらおうとしたのに、結局はそのシーター自身が魔物の邪悪なやり口のえじきとなったのです。いみじくもシーターがラーマに語ったとおり、真実でないもの、欲望、暴力の三つの悪が、この世のすべての悪の原因です。それに対してシーターは自然(ブラクリティ)の象徴であり、真理と正義の化身であり、とうとい行為から外れることはありませんでした。シーターという模範には、インドのすべての女性が見習う値打ちがあります。だからこそ、「ラーマヤナ」はシーターの物語でもあると言われるのです。

「ラーマヤナ」は、人類へのさまざまな教訓に満ちています。俗世間の性質は苦しみに行きつくけれど、神聖な性質は人間に満ち足りた幸せを与えると教えています。感覚的な楽しみは、流れゆく雲のように、はかなく移りゆきます。はかない喜びが与えられるばかりです。それに対して、真の自己アートマのさとりは、永遠の喜びを与えてくれます。神の喜びに生きる人に苦しみはありません。ところが残念なことに今の人々は、神に帰依して永遠の喜びに生きる偉大な人々を模範として見習おうとしません。理想(アーダルシャAdarsha)よりも欲望(アーベシュタAbheesta)に惹きかれています。欲望など、はかないものです。ところが理想は滅びることがないのです。

神が人類を救うために人間の姿となってあらわれたのに、理想を求めて努力をしなかったら、それこそはまさに悲劇です。人々には、神の化身(アヴァターラ)の理想に従おうという判断に欠けています。神の化身(アヴァターラ)の教えと反対のことをして、喜んでいるのです。

神のために生きる人に、さいわいはあります。そうした人にとっては、神を悦ばせることが、何よりの大事です。

「どんな行為をするときも、神さまがお喜びになるように(サルヴァ・カルマ・バガヴァト・プリーティヤルタムSarva Karma Bhagwat Prityartham)」

神のために生きる人は、永遠の喜びによって報われます。聖者シャラバングの人生(p 36)はその最高の証あかしです。シャラバングはただ神のためだけに生きました。シャラバングの

ように生き、人生を神に捧げる聖者や聖人が、この国にはたくさんいたのです。

ところが今、人々は「ラーマヤナ」の内にある偉大な理想を忘れはててしまいました。自立心というものがありません。人の真似をし、他人に頼るばかりです。ほんとうはそれは、他人の奴隷になっているのです。他人の目でものを見、他人の耳で聞き、他人の頭で考えているのです。そんな人は人生で何ものにも達することはできません。こんな言葉があります。

聖なる姿を見たいと思わないから

目があっても何も見えぬ。

あのお方の妙 たえ なる調べを聞きたいと思わないから

耳があっても何も聞こえぬ。

人間として生まれるのは、まれなる機会です。多くの過去世でしてきた行為のおかげで、みなさんは人間として生まれたのです。アートマはひとつ、人類はひとつというところを深めていきなさい。「ラーマヤナ」には、人間の内なる神性を物語る話や喩 たと えがたくさんあります。人類への教えに満ちているのです。どのお話もどの章も、みなさんの学びに生かすことができます。だからラーマの物語をこころの奥に刻んで、自分自身の人生を全 まっとうするので

第六章 シーターを探して

心のあらゆるけがれをはらい、
とうとい思いを深めていれば、
英知ある者にとって世界のすべてが
神とともに輝いていると見えるだろう

学生のみなさん。愛の化身たち。

真の自己アートマの悦びに達したいと願う人は、ラーマの模範に従うべきです。人生の完成を願う人は、シーターの示した理想によって生きるべきです。これが「ラーマヤナ」で語られる、ラーマとシーターの物語の教えです。魔王ラーヴァナは、女への欲望という欠点を克服することができませんでした。そのために自分の息子や兄弟や親族は死ぬこととなります。ラーヴァナのせいで、ランカーの島は破壊されました。最後にはどうなったでしょう。ラーヴァナみずからが殺され、死んでからもその汚名はつづいたのです。ラーヴァナを滅ぼしたのは、邪悪な欲望です。もしもラーヴァナが自分の欲望を抑えることができたら、息子や兄弟や親族は生き延びて、豊かに栄えたことでしょう。魔王ラーヴァナの身勝手な生き方と、抑えがたい欲望が、一族の永遠の苦しみを招いたのです。

魔王ラーヴァナの妹、シュールパナカーあらわる

ある日、パンチャーヴァティーの庵 いおり にラーマとシーターがいたときのこと、ラクシュマナがあたりを見張っていると、こちらに向かってひとりの女が歩いてくるのが見えました。ラーマとシーターは見えていなくても、よく気がつくラクシュマナはその女に目をとめ、あなたは誰なのかと声をかけました。

女はラクシュマナを無視して、ラーマに向かってまっすぐに歩いてきました。ラーマもまた、あなたは誰なのかと聞きました。相手は逆に聞き返してきました。

「私が誰だって、そんなことはどうでもいいのよ。そんなことより、あんたは誰なの」

ラーマは、わたしはダシャラタの息子だと語りました。そこでその女も自分が誰なのか話しました。

「私は勇者ラーヴァナの妹、クムバカルナとヴィビーシャナとカラKharaとドゥーシャナ Dhushanaの妹よ。私の名前はシュールパナカー-Surpanakha」

どういうわけでここに来たか話してくれとラーマが言うと、シュールパナカーは、何の恥じらいもなく、自分はラーマと結婚したいと言うのです。

ラーマとラクシュマナは、この女のふるまいを見て笑ってしまい、少しからかってやることにしました。ラーマは言いました。

「お嬢さん。あなたはまさしく美の化身ですね。でも私は結婚するわけにはいかないんです。私

にはもう妻がいますのでね。ほらごらんなさい。この若者の方があなたにはぴったりだ。この男は妻を連れていませんからね」

シュールパナカーはラーマの言うことを真まに受けて、ラクシュマナに近づいて言いました。

「ラクシュマナ。あんた、私と結婚する気あるの？」

ラクシュマナはこう返しました。

「それもいいですね。でも私はあなたを召使いの地位にまでおとしめたくはありません。私はシュリー・ラーマの召使いなのですからです、私と結婚したら、あなたもシュリー・ラーマの召使いになってしまいます。あなたは立派な王家の血筋であられるラーヴァナさんの妹だ。私と結婚して召使いになるなんて、いいこととはいえませんね。だから私なんかじゃなくて、私の主人であられるシュリー・ラーマとご結婚なさい」

ふたりの兄弟はそんなふうにシュールパナカーをからかって遊んでいたのですが、おしまいにこの女は、ラーマに近づいてこんなことを言うのです。

「もしよかったら、シーターとラクシュマナを殺してあげるわよ。そうすれば私たちふたり、森で楽しく暮らせるじゃないの」

そう言って、シーターをひと呑みにしてやろうと襲いかかりました。そこでラーマは、ラクシュマナに空を見上げるしぐさで合図を送りました。ラクシュマナは賢い人です。その合図だけでラーマの言いたいことを察しました。空 そら は空 くう、空 くう は音を意味し、音は耳を意味するのだから、この女の鼻と耳をそぎ落とすようにラーマがいとわかったので

す。耳と鼻をなくしたシュールパナカーは、恐ろしい叫び声をあげました。助けを求めて声をあげ、〔魔物の兄〕カラKharaとドゥーシャナDhushanaを呼びました。カラとドゥーシャナ、そして一緒についてきた恐ろしい魔物の軍勢を、ラーマはまたたく間に討ち滅ぼしました。そこでシュールパナカーは魔王ラーヴァナに泣きついて、自分におこったみじめな出来事を話しました。魔王ラーヴァナは話を聞いて激しい怒りをあらわし、ラーマを倒すためにただちに四万もの魔物の軍勢を送りました。そこでラクシュマナは、ラーマと魔物たちとの戦いになるから、シーターをここにいさせるのはよい策 さく ではないと思いました。ラクシュマナはシーターを洞窟に連れていき、入り口でシーターを守っていました。ラーマは四万の魔物を相手に、勇敢に戦いました。ラーマの放った矢は四万本に増えて魔物どもにふりそそぎ、たちまち四万の軍隊を滅ぼしてしまいました。

戦争の原因

魔物たちの大軍がラーマの手によってことごとく倒されるのを見て、シュールパナカーはさらに怒り、憤 いきどお りを感じました。こうなったら、どんなことをしてもラーマとラクシュマナに死んでもらおうと思いました。そこで魔王ラーヴァナに言いました。

「兄さん。ラーマの奥さんのシーターったら、私あんなきれいな人見たことないわ。あの人なら兄さんのお妃にぴったりだわ。うまくやって、あの人を兄さんのお城に連れてきちゃえばいいのよ。それができれば、兄さんの人生でも最高の成功よ」

とうい言葉を聞かないで、
悪い言葉を聞くのに夢中。
それなのにどうして神をさとれよう。
知識などあったところで何になる。

悪い人は、悪い言葉にたやすく従ってしまいます。シュールパナカーの言葉によって魔王ラーヴァナの心は大きく揺さぶられました。そしてシーターを誘拐して自分の妻にするために、はかりごとをめぐらしました。シーターをさらう手助けをさせるために、魔物のマーリーチャ〔第三章（p21）魔物の女タータキーの息子〕を呼びよせました。黄金の鹿に化けて、まずシーターからラーマを引き離せ。そうすればシーターをさらってくることができる　　と言うのです。

魔物のマーリーチャはすでに、ラーマの神聖にして冒しがたい力を見たことがありましたから、何とかしてラーヴァナに道理を説こうとしました。

「ラーヴァナさま。あなたさまはラーマさまのもつ並びない力をご存じないのです。この世でラーマさまにかなう者はおりません。あなたさまのお力は、ラーマさまの限りない力とくらべれば、どこまでも小さなものにすぎません。どのみち命を落とし、この王国を滅ぼすだけです」

黄金の鹿

ラーヴァナは、家来のマーリーチャの言葉に腹を立て、大声でどなりつけました。

「マーリーチャよ。哀れでひ弱な人間など信じてどうする。しかもそいつは森を放浪しているのだろう。シーターは、わしのようなすべてを知り、何でもできる者にこそふさわしいのだ」

そして、言うことを聞かなければ殺してやると険しい声で言い放ちました。マーリーチャは考えました。

もしもラーヴァナさまの言うことを聞かなかつたら、私は必ずや、ラーヴァナさまの手にかかって殺されるだろう。逆にもし鹿に化けてラーマさまのところに行けば、ああ、ラーマさま、きっとあなたは私を追いかけて、私はその手にかかって殺されるでしょう。いずれにしても私は死ぬ他ありません。ラーヴァナさまのように悪いお方の手にかかるよりは、あなたに殺していただいた方がよほどいいと思います

心の中でそう祈り、魔物のマーリーチャは、

「ラーヴァナさまのお望みどおりにいたします」

としました。マーリーチャはそこで、誰もがうっとりするような黄金の鹿に姿を変え、パンチャーヴァティーのラーマの庵の近くで遊んでいました。シーターは黄金の鹿にすっかり魅せられてしまい、ラーマにこう言いました。

ラーマさま。私の願いをお聞きください。
金色のあの鹿に私のこころは奪われました。
ラーマさま。どうかあの鹿をつかまえて、
私の願いをかなえてください。
義弟 おとうと のラクシュマナが建ててくれたすてきな小屋の中で、
金色のあの鹿と遊びたいのです。

シーターはそれまで、どんな願いもかなえてくれと口にしたことはありませんでした。だからこそラーマは、シーターのために黄金の鹿を追ったのです。

その間に魔王ラーヴァナは、シーターをさらって行ってしまいました。鳥のジャターユスが、シーターが連れ去られるのを止めようとして空の上でこれをさえぎったのですが、ラーヴァナはジャターユスに致命的な傷を負わせたのでした。ラーマとラクシュマナが戻ってくると、小屋はものけのからとなっていました。ふたりは森をくまなく捜しました。シーターを求めてあらゆる藪や谷をすみずみまで捜し回ったのです。ラーマはすべてを知る者です。シーターがどこにいるのか知っているも、探している間は何もわからないかのようにふるまっていました。

シーターを探して、ラーマとラクシュマナは森の奥に進んでいきました。そこでふたりは奇怪な姿の妖怪に出くわしました。お腹のところに顔があるのです。ラーマたちはその姿を見て、思わず大声で笑ってしまいました。ふたりは不思議に思って、注意してこの妖怪を見てみました。

突然、この妖怪カバンダKabhandalは、右手と左手でふたりの身体をつかんでしまいました。ふたりはこの鉄のような握力から何とか逃れようとするのですが、うまくいきません。ラクシュマナは、この妖怪の手にかかったら死はまぬがれないと思い、自分が餌 えさ になればこの妖怪はラーマを離してくれるだろうと言いました。ラクシュマナは声を上げます。

「ラーマさま、こんなふうにはしかお助けできません。お許してください」

ところがラーマは、ラクシュマナの言葉を聞こうとしません。

「ラクシュマナよ、おまえは世界で誰よりも徳に生きる者だ。おまえのような弟はいない。わたしがこの妖怪の餌になる。おまえは行って、シーターを見つけ、守ってやってくれ」

こんなふうに、兄弟ふたりがお互いに相手のために自分を犠牲にすると行ってきかないのです。世界のどこに行っても、こんな理想の兄弟愛を目にすることはできないでしょう。猿の弟ヴァーリンと兄のスグリーヴァ、魔王ラーヴァナと弟のヴィビーシャナなどは兄弟同士で憎みあっているというのに、ラーマとラクシュマナにはただ純粋な愛だけがありました。最後に、ふたりはカバンダを倒そうと決め、妖怪の両腕を切り落としました。

するとたちまち、妖怪カバンダの身体から天人があらわれました。天人は言いました。

「ラーマ、今日、あなたの神性のお身体に触れることで、私にかけられた呪いが解けました。遠い昔、私は聖者の息子でした。ところが悪いことをした報いで呪いを受け、妖怪に変わってしまったのです。いま、あなたは私の呪いを解いてくださいました。いつまでもいつまでも、あなたに感謝いたします。ここから遠からぬところに聖者マタンガの庵がございます。そこで、神をあつく信じる年老いたご婦人が、あなた方のおいでを心待ちにしておられます」

ふたりの兄弟が北へ向って歩いていくと、聖者マタンガの庵が見えました。そこでふたりは、ラーマに帰依する立派な女性、シャバリーSabariに会いました。この人の師であった聖者マタンガが肉体を捨てたときに、ラーマとラクシュマナがここを訪れるからそれを待つようにと、言い残していたのです。シャバリーはたいへんな高齢となっていたのですが、聖者マタンガに言われたとおり、ラーマとラクシュマナを庵に迎えるために生きながらえていました。シャバリーはうやうやしくふたりを迎えました。水でふたりの足を洗い、その水を自分の頭につけました。大きく満ち足りて、そこでこの女性は肉体を捨てたのでした。ただしシャバリーは死んでいくとき、さらに北に向かって進み、リシュヤムカ山Rishyamuka〔「鹿の頭」を意味する〕のスグリーヴァに会うようラーマに告げたのでした。

〔猿の王〕スグリーヴァは、ラーマたちが近づいてくるのを山のいただきから見て、〔兄の〕ヴァーリンがさしむけた敵ではないかと疑いました。そこで、ふたりの客人が何者なのか、大臣のハヌマーンにさぐりに行かせることにしました。

スグリーヴァ、味方となる

ハヌマーンは平和・徳・力・英知の化身です。四つのヴェーダを修め、聖典のことを知りつくしていました。礼と作法においては大家と言えるほどでしたから、ふたりの兄弟と会う使者としておもむいたのです。ハヌマーンは、ブラーミン〔司祭階級バラモン〕の作法にのっとりラーマたちに話しかけました。そしてこれまでの話を聞いたあと、ふたりをスグリーヴァのもとへ連れていくことにしたのです。スグリーヴァは、山のいただきに住んでいました。ハヌマーンは、ラーマとラクシュマナを自分の両肩に乗せて、山の上まで運んでいくと申し出ました。こうしてハヌマーンはスグリーヴァに、ふたりの兄弟におこった物語を話したのです。

スグリーヴァはシーターが連れ去られた話を聞くと、兵士を呼んで猿が森の中で見つけてきた、飾り物の入った包みを持ってこさせました。ラーマはラクシュマナに、この飾り物がシーターのものかどうか、よく見てほしいと言いました。ラクシュマナは、包みを広げると、目に涙を浮かべて言いました。

「兄上。これこそは姉上のつけておられた足の指輪。私が毎朝シーターさまの足もとにひれ伏す折りに、いつもこれを目にしていた憶えがございます」

ラクシュマナは、純潔と徳の化身です。ラクシュマナには、学生が見習うに値する理想があります。ラーマとシーターとともに十三年も暮らしながら、ラクシュマナは一度たりともシーターの顔を見ることはなかったのです。

ラーマはいつもラクシュマナの徳をほめたたえます。ところがラクシュマナはつつまじやかに言うばかりです。

「ラーマさま、私はあなたのしもべ、あなたは最高神ナーラーヤナその人であられます。ひとえに、あなたさまのおそばにいるがためです」

徳の高い人はいつもひかえめで奥ゆかしいものです。

リシュヤムカ山の上で、ラーマとスグリーヴァは親交のしるしを交わしました。ラーマは、スグリーヴァにシーターを探す手助けをしてもらう代わりに、スグリーヴァを助けると約束しました。〔スグリーヴァはかつて猿族の王であったが、兄のヴァーリンに妻を奪われ、国を追われていた〕このときスグリーヴァは、兄のヴァーリンよりもラーマの方が強いかどうかを知りたくなって、ラーマの力を試してみようと思いました。ヴァーリンが矢を放てば、五本の木を次々と貫いたこともあったのです。スグリーヴァは、ラーマもこのすさまじい技にせまることができるかと聞きました。ラーマは深い哀れみを感じました。この猿の王さまには、ラーマが神であることがわからないのです。力の等しい者だけに、相手がどれほどの者かわかります。卑しく小さな者に大いなる者はわかりません。ラーマの使命のためにはハヌマーンが必要だったし、ハヌマーンはスグリーヴァの同族にあたる者でしたから、ラーマはこの力だめしを受けてみようと言ったのです。

ラーマは矢を射放ちました。矢は、五本の木を突き抜けたばかりか、その裏の山までも貫きました。スグリーヴァはラーマの力を疑ったことをただちに悔い改め、聖なる火を立ち会いとして

ラーマとの親交を誓いました。ラーマはスグリーヴァの味方をして、国王に即位させると約束しました。スグリーヴァに落ち度はないのだから、ヴァーリンの罠にはまったのだとラーマは見ていました。ヴァーリンは、スグリーヴァの妻を自分のものにするという、最も忌まわしい罪を犯していました。兄ならば弟の妻を、自分の娘のように思わなくてははいけないはずです。だからラーマは、不正な行為のゆえにヴァーリンを罰すると決めたのです。ラーマの約束に力を得て、スグリーヴァはただちにヴァーリンの城に向かい、戦いを挑みました。ところがスグリーヴァは哀れにも、ヴァーリンにさんざんに殴られて、逃げて帰らざるを得なかったのです。

ラーマは、今度は自分が必ずヴァーリンを倒すと約束し、もう一度ヴァーリンに戦いを挑むようスグリーヴァを説き伏せました。ふたりが死闘をくり広げている間に、木のうしろに隠れていたラーマがヴァーリンに向かって矢を放ち、ついに敵を倒しました。

ラーマのこの行為を責め、木のうしろに隠れてヴァーリンを殺したのは正しくないと言う人がいます。つまるところ、ラーマの行為は三つの点で正しいといえます。

一つめは、獵師は身を隠すことで動物をしとめるものであり、

二つめは、ヴァーリンは神の恵みを得ていて、敵の力の半分がヴァーリンに流れていってしまうために、誰も正面からヴァーリンを打ち倒すことができなかったうえに、

三つめは、もしもラーマがヴァーリンの前にあらわれて、ヴァーリンがラーマの足もとにひれ伏したら、ラーマはヴァーリンを守らざるを得なくなり、結果としてスグリーヴァとの約束がはたせなくなるからです。

これが、ラーマの行為が正しいとされる三つの理由です。ヴァーリンその人もまた、死にゆくときに、ラーマの手を握りしめて自分のあやまちを認め、ラーマは正しいことをしたのだと言いました。そしてラーマに、キシキンダー国Kishkindhaの王として兄のスグリーヴァを即位させ、自分の息子のアンガダAngadaを太子 たいし とするよう願ったのです。のちにラーマは、ヴァーリンとの約束をはたしました。

ヴァーリンの死から二カ月がすぎました。ところがスグリーヴァはラーマを助ける動きを見せません。ラーマはスグリーヴァにいましめを与えるために、ラクシュマナを使いに出しました。ラクシュマナはスグリーヴァに申しました。

「殿はラーマさまの助けを受けたあと、ご自身のお言葉をお忘れなのでしょうか」

スグリーヴァはうやうやしく言いました。

「今は雨季のただ中です。猿どもにとっては、シーター殿を探すのによい季節ではありません。それがしは、ラーマ殿から受けたご恩を忘れたことはありません。ほどなく使いの者がシーターさまを、森も谷も、あらゆるところをくまなく探すことでしょう」

ハヌマーン、ランカー島に行く

スグリーヴァは、シーターを探すために四方八方に兵士を向かわせました。ランカー島〔現在のスリーランカーとされている〕でシーターを探す仕事には、強者 つわもの（パラヴァーン Balavantha）にして賢 かしこ き者（デーマーン Dheemantha）として名高い、ハヌマーンを選びました。ハヌマーンは、ラーマの使者としてランカー島に行く資格をすべてそなえていました。力は強く、落ちつきがあり、すぐれた知恵に恵まれていました。一途に思いを定め、どんなことをしてもシーターを見つけ出そうという強い決意を抱いていました。シーターの行方を探そ

うというハヌマーンの強い意志をとどめるものは何もありません。シーターが囚われの身になっていないかと、魔王ラーヴァナの寝室まで調べました。ランカーの人々の寝室に入ってもハヌマーンの心は少しも迷いません。女たちがあられもない姿で寝ているのを見ても、決してよこしまな思いは浮かばないのです。

あるとき、この上なく美しい娘が魔王ラーヴァナの寝室で眠っているのを見つけました。シーターはたいへんな美女なのだからこの人がそうかもしれないと思ったのですが、そんなことを考えた自分をすぐに恥じ入りました。邪悪なラーヴァナの寝室に入るなど、シーターが同意するはずがないのです。それからハヌマーンはランカー島のすみずみまでシーターを探したのですが、どうしても見つかりません。ひどく気を落として海辺の木の上に登り、このまま海に飛びこんで死んでしまおうとも思いました。ラーマに命じられた仕事をはたせなかったと思うと、どうしようもなくこころが痛みました。するとにわかに、アーショカの樹の林をまだ探していなかったことに気がつきました。この見晴らしのきく場所から、その林が見えたのです。ハヌマーンは林に飛んでいきました。

ハヌマーンが庭に入ろうとしたところ、魔王ラーヴァナの長男〔インドラジット〕にとらえられてしまい、城に連れていかれました。ラーヴァナはこの国の王座に座っていました。悪の気をたぎらせて高いところに座っている姿を見て、ハヌマーンは思いました。

ラーマさまに帰依する者として、自分がこんな低いところに座っているのは申し訳が立たぬ

ハヌマーンはするすると尻尾をのばし、その尻尾をバネのように巻きつけてその上に座り、ラーヴァナよりもうんと高くその身を持ち上げました。ラーヴァナよりも高い座に座ったことで、ハヌマーンはしごくいい気分になりました。

こうして、魔王ラーヴァナとハヌマーンとの、激しいやりとりがはじまりました。

「この猿めが！ 汝 ぬし はいったい何者だ？ わしの庭をめちゃめちゃにしおって。誰の指図でこのランカーに来た？」

「王の中の王、偉大なるラーマさまよ。おまえの妹の鼻を切り落としたお方がおれさまをここにつかわしたのさ」

「汝 ぬし はなぜわしにそう無礼な口をきく」

「おれさまはな、ラーマさまの召使いだ。おまえはけがれた奴だから、こんな言い方で充分なのさ」

魔王ラーヴァナは、ハヌマーンの力を見て、うすら寒く感じました。ただの猿にこれだけの力と勇気があるならば、ラーマに従う者どもはさらにすぐれているに違いないと思ったのです。ラーヴァナは、ハヌマーンの尻尾を燃やして懲こらしめることにしました。尻尾は猿にとって大事なところだからです。家来どもが何尺もの布を運び、それをハヌマーンの尻尾に巻きつけ、火をつけました。するとハヌマーンは、あちこちの建物を飛び回り、火のついた尻尾で次から次へと屋敷に火をつけていきました。ランカー島にすさまじい被害を与えたあと、ハヌマーンは尻尾の火を消すために海に飛びこみました。

ランカーが大火事になったのを見て、ハヌマーンは反省しました。これではシーターが炎に巻き込まれるかもしれません。シーターの無事を見とどけるために、ハヌマーンはアーショカの樹の林へと急ぎました。なにしろ一度も顔を見たことがないので、林にいるたくさんの女性の中で、誰がラーマの妻なのかわかりません。やがて木の下に、細身の女性が目を伏せているの

を見つけました。シーターかもしれません。それを確かめようとして、ハヌマーンはラーマの物語をうたいはじめました。それを聞くと、木の下にいた女性は、涙をはらはらと流しながら面おもて を上げたのです。

ハヌマーン、シーターと会う

そのときシーターは、ヴィビーシャナ〔魔王ラーヴァナの弟。のちにラーマの側につく〕の妻サラマーSarama、とその二人の娘、アジャーターAjataとトゥリジャーターTrijataとともにいました。この三人の女性だけがランカー島でのシーターの友達なのだとはハヌマーンは察しました。この人たちが慰め、はげましてくれたから、シーターはこれまで生きてこられたのです。ハヌマーンは、木の下にいる女性がシーターかどうかを確かめるために、相手の目の前に指輪を放り投げました。その人は大いなる喜びとともに指輪を握りしめ、ハヌマーンに次々と質問を浴びせました。

「あなたはラーマさまの使者なのですか、それとも私をあざむくためにラーヴァナ殿がよこした魔物なのかしら。ここの魔物はおかしな姿となって、奇態なふるまいをするようだから」

そこで自分がほんとうにラーマの使者なのだとはわかってもらうために、ハヌマーンは自分の胸を引き裂いて、その胸の奥にまつられているラーマを見せました。ハヌマーンの胸の奥にしるされたラーマの姿を見て、シーターは気を失ってしまいました。そこでハヌマーンは、この女性こそはシーターその人であると確信したのです。

ラーマにシーターの居場所を知らせるために、ハヌマーンは一刻も無駄にせず、ただちに海を飛んで渡りました。猿どもがマドゥヴァナMadhuvana〔蜜の森〕で果物をむさぼっている間に、ハヌマーンは食べることも寝ることも打ち捨て、急いでラーマにこの吉報を知らせようとししました。

ハヌマーンは言いました。

「ラーマさま。シーターさまは、ゆかしく徳の高い、まこと女性の鑑 かがみ でございます。いま姫は、矢でできた鳥かごに閉じこめられた鸚鵡 おうむ のようなご苦労をされております。多くの魔物どもが、姫を殺さんと取り巻き、刀を振り回しております。怖ろしい女どもを見て姫が震えておられるのを、それがしは見てまいりました」

ハヌマーンのことを聞くうちに、ラーマは感情がこみあげてきて、すぐにもランカー島に出向いてラーヴァナと一戦まじえたいと思いました。ハヌマーンとスグリーヴァは、ラーマのはやる気持ちを抑え、ラーヴァナと戦うには、今しばらく準備の時が必要だと説きました。たくさんのすぐれた武人が集まって、魔王ラーヴァナを倒すために作戦を練りました。

ラーマとラーヴァナの戦いは、正義と悪、真理といつわりとの戦いです。それは、人間のこころの奥で永遠につづく戦いなのです。そこで、ラーマは愛（プレーマPrema）を象徴し、シーターは真の自己（アートマAtma）を象徴し、ラーヴァナは欲望（カーマKama）を象徴していて、その三つがひとりの人のこころの中にあるのです。

「ラーマヤナ」の目的と意味は、物質的な面だけにあるものではありません。内なる「ラーマヤナ」は、何よりも得がたきものです。全人類への教えに満ちているのです。

ラーマは敵を倒す作戦を立てるのに、きわめてすぐれた眼力と用心深さをあらわしました。「ラーマヤナ」は、いくさの戦略と洞察の教科書のようなのです。ラーマは組織の長として、誰に

何の責任を与えるべきか、それはどう遂行されるべきかを、知りつくしていました。適切な人材を適切な役目につけることができたのです。魔王ラーヴァナとのいくさの間、ラーマはダルマの原理を貫きました。相手の弱みにつけこむようなことはせず、敵の力を十分に示す機会を与えたのです。ラーマの示した模範は、いくさにおいても永遠に輝く星でありつづけます。

だから、ラーマの物語は、神聖な理想の甘い蜜であり、大いなる喜びです。ラーマを愛し、愛によってラーマをさとりなさい。ラーマとひとつになるのです。真の解脱とは、それをいうのです。

第七章 大戦争はじまる

アートマはいつもどこでも在 ありながら、
アートマはなぜ見えないかと人は聞く。
聞くだけで、ミルクがバターになるものか。

愛の化身たち。

宇宙が巨大な家だとすれば、世界のすべての人々はひとつの家族です。自分だけの欲は身を滅ぼすというのに、こんにちでは私欲が人生の根本になってしまっています。私欲があってはいけないと「ラーマヤナ」は教えています。

全宇宙に満ちている神をさとののは、何も難しいことはありません。ところが俗世間の考えにとらわれている限り、いつまでたっても神をさとり、神に達することはできません。世間で生きていながら狭い考えしかなかったら、この世で迷いつづけるばかりでしょう。同じ世間で生きていても、愛と犠牲と無私の心とともにあれば、「内面的な生き方」(ニヴリッティ Nivritti)に進んでいくことができます。さとりも迷いも、どの道を行くかによって決まります。残念ながら今は、外に向かう性質が、内に向かう性質を大きくしのいでいます。しかし「外面的な生き方」(プラヴリッティ Pravritti)をあてどもなくさまよっている限り、神のさとりは得られないのです。

ラーマは、ランカー島を滅ぼす使命とともに、海岸にやってきました。ラーマは「内面的な生き方(ニヴリッティ Nivritti)」の化身であり、ランカーは「外面的な生き方(プラヴリッティ Pravritti)」のただ中にあります。無知、我欲、おごりなどの悪い性質があると、たとえ頭のよさを認められていても、内面的な生き方(ニヴリッティ Nivritti)に進んでいくことはできません。ラーマとラクシュマナ、スグリーヴァ、アングダ Angada、ジャーンバヴァーン Jambavan は、ランカー島に向かって大きな軍隊を進める準備をしていました。ラーマは軍隊を、アングダが指揮する部隊と、ジャーンバヴァーンが指揮する部隊とのふたつに分けました。

ラーマは、ひどく疲れているかのように砂の上に横たわり、頭をラクシュマナのひざにのせていました。

満月の夜でした。ラーマは、ほんとうは疲れてなどいなかったのですが、とても疲れているかのようにふるまっていました。ラーマは、そこにいたみんなに、内面的な道(ニヴリッティ・マールガ Nivritti Marga)を教えようと思いました。アングダ Angada〔太子でヴァーリンの息子〕を呼んで、こう言ったのです。

「アングダ。月を見るがいい。なんと美しく輝いていることか。月はその面 おもて にしみひとつなく、見事な光を放っている」

そこにスグリーヴァがあらわれ、ラーマの言葉を聞いてこう言います。

「ラーマ殿、それがしの目には月にしみがあるように見えます。月もまた自然(ブラクリティ)の一部、山や谷のごときものもございましょう。それが、しみのように見えるのではありますまいか」

そこでラーマはハヌマーンを呼んで、同じことを言いました。ハヌマーンは応えます。

「ラーマチャンドラ〔ラーマの呼び名のひとつ。月 チャンドラ のように美しいラーマ〕。確かにしみひとつございませぬ。月の面 おもて にあなたさまのお顔が写っているのが見えるばかりです。月は鏡のごときもの。あなたさまのお顔が、月に見事に写っておりますよ」

スグリーヴァとハヌマーンの答えは、それぞれ外面的な生き方（プラヴリッティ Pravritti）と内面的な生き方（ニヴリッティ Nivritti）の違いを明らかにしています。

ヴィビーシャナ、ラーマの側に加わる

そうラーマが話していると、自分の名を呼ばわりながらこちらに歩いてくる者がいるのに気がつきました。四人のしもべを伴 とも にしています。猿 ヴァーナラ の戦士はこの人々を止とどめ、いろいろと問いました。その人は、ヴィビーシャナと申しました。

「ランカー島から来た、ヴィビーシャナと申します。ランカーの王、ラーヴァナの弟であります。兄が最高神ナーラーヤナの化身であられるラーマさまに非道なふるまいをしているため、もはやともに暮らすことを望みませぬ。わたくしはラーマさまに帰依いたします。ラーマさまの恵みを求めてここへ参りました」

ヴィビーシャナのこの言葉を聞いて、スグリーヴァはラーマに申し述べました。

「ラーマ殿。この男は敵方の身内です。たやすく信じてはなりません。われらの動きをひそかに見張り、魔王ラーヴァナに密告するために来たのでございましょう」

いろいろな人がラーマにさまざまに口添えしました。そこでハヌマーンは言いました。

「ラーマさま。王にふたつの敵がございます。身内からあらわれる敵、そして近隣の国からあらわれる敵です。このヴィビーシャナなる者は、ラーマさまの一族の者ではございませぬ。また、アヨーディヤの近隣の者でもありません。それゆえ、ラーマさまに悪意を抱き、ラーヴァナに密告をするような考えはもてぬはず。この男の帰依をよく見てやって、それにふさわしい扱いをしてはいただけませぬか」

ラーマはハヌマーンの助言を正しいと認めました。かたわらにヴィビーシャナを呼んで、さらにくわしく話すように言いました。

ヴィビーシャナはラーマに言いました。

「わたくしが行いを改めるようお諫 いさ めしたにもかかわらず、兄ラーヴァナの非道ぶりには限りがございます。わたくしはラーヴァナの悪 あ しき行いをとがめ、ラーマさまとのいくさに及ばぬよう申し上げました。するとラーヴァナと息子のインドラジットは怒り狂い、王国を去れと命じたのです。そしてわたくしに、裏切り者の汚名を着せました。わたくしはランカーの島のさいわいを祈念したのち、国を去りました。わたくしは、神の他に何も求めませぬ。神の御足の前で人生を聖なるものに変えることだけを願っています。これまで長い間、ラーマさまの御名 みな を唱えてまいりました。他ならぬラーマさまの御名が、ランカーにおけるわたくしとハヌマーンの仲を取りもったのです。ラーマさまのおみ足の他には生涯何も求めません。親族も友もいません。ただラーマさまのおそばにいたいだけです」

そこでラーマは言いました

「ヴィビーシャナ、恐れるな。おまえの兄は、犯したすべての悪事によって罰せられる。おまえはそれをよく近いうちに、みずからの目で見ることになるだろう」

ラーマはそれから、スグリーヴァとラクシュmanaを呼んで、ヴィビーシャナを後 のち にランカーの王となる者として遇するように命じました。そこでヴィビーシャナはこう申しました。「ラーマさま。わたくしはランカーの王になりたくて、ここに来たのではありません。求めているのは、神の国だけでございます。どうか、神の国の庶人としてください。たとえ召使いとなってもかまいません」

ところがラーマは、魔王ラーヴァナとの大戦争が始まる前に、ヴィビーシャナをランカーの王として即位させたのでした。とはいえ、猿 ヴァーナラ の戦士たちは、ヴィビーシャナが裏切って魔王ラーヴァナに密告をすることがないように、油断なく見張っておりました。けれどもラーマは完全にヴィビーシャナを信頼しました。ヴィビーシャナのところが一点のくもりもなく清らかであったからです。ラーマはヴィビーシャナを受け入れ、こう宣 の べました。「おまえはわたしのものだ」

海に橋を架ける

魔王ラーヴァナとのいくさの準備が大急ぎでおこなわれています。ランカー島までとどく橋を海に架けることになりました。そのときヴィビーシャナは言いました。

「ラーマチャンドラ。この海は、あなたさまの先祖、サガラ王Sagaraの息子たちが掘ったもの。海の向こうに橋を架けるのはかなりの難事です。軍隊が渡る道を得るために、海の神さまに祈ってみてはいかがでありますか」

ラーマは、これをよい進言であるとして、海の神さまに祈ることにしました。ラーマが懸命に祈っても、海の神さまは姿をあらわしません。ラーマは怒りを発し、海を懲 こ らしめることにしました。海に向かって矢を放つ用意をしていると、海の神さまが姿をあらわして、言いました。

「ラーマチャンドラよ。そなたこそまさしくナーラーヤナの化身。宇宙の神秘を知るお方だ。五つの元素〔地・水・火・風・空〕がそれぞれの役目をはたしているように、わしもまた、さまざまな掟に従って、自分の務めをはたしている。わしの中には何億もの生き物があり、そのすべてが海の掟に従っておる。多くの兵を渡らせるのは、わしにできることではない。だが、ひとつだけ手助けをしよう。まず橋を作るがいい。そうすれば、その橋が海に沈まぬようにはしてあげられる。そなたの軍勢に、ヴィシュヴァカルマンVishwakarma の息子、ナラNalaがいるはずだ。やつはこういう作業の名人だから、海の向こうまで橋を架けることは造作もなかるう」

ラーマはナラNalaを呼んで、橋を架けることはできるかと聞きました。ナラはできると言います。ラーマさまの恵みさえあれば、何千里の長さの橋でも架けられましようと言うのです。そこでラーマは、次の日こそ橋の建設のために最もよい日であると決めました。

猿 ヴァーナラ の戦士が、たくさんの石を運んで海に放りこんでも、みんな海の底に沈み込んでしまいます。ラーマチャンドラは、海の神さまがいつわりを語ったと思い、激しい怒りを発しました。すると海の神さまがあらわわれて、こう言いました。

「ラーマチャンドラよ。そなたの名前がなかったら、この世のすべては沈んでしまう。そなたの名前がなかったら、時のはじめに、すべては消え去る。石にラーマの名前を書かせ、海に放るように命ずるがいい」

猿 ヴァーナラ の戦士はみんな、石にラーマの名前を書いて、海に放りこみました。石は確

かに海に浮かびはするのですが、浮かんだまま、あちこちに散らばって流れていってしまいます。

そこでハヌマーンは戦士たちに知恵を貸し、一方の石に「ラー」、もう一方の石に「マ」と書いてお互いに引きつけ合うようにすればいいと言いました。すると石は互いにむすびついて、橋ができていったのです。

帰依（バクティBhakti）には三つの種類があります。すなわち、

並の帰依（サーダーラナSadharana）

中 ちゅう の帰依（マディヤミカMadhyamika）

一途 いちず な帰依（アナンヤAnanya）です。

並の帰依には、我欲のしるしがあります。「私」という気持ちで、あらゆる思いと行為を支配しています。

中の帰依は「私は神さまの中において、神さまは私の中にいる」という気持ちがあらわれています。

一途な帰依（アナニヤ・バクティAnanya bhakti）は、「私など、おりません。いるのは神さまだけです」という気持ちのあらわれです。

ハヌマーンはあるときラーマにこう言っています。

「ラーマさま。それがしが自分は肉体だと思えば、自分はラーマさまの召使いだという気持ちで満たされます。自分は一個の自己だと思えば、ラーマさまが信仰の対象であり、自分はラーマさまの写し絵だという気持ちで満たされます。そして、それがしが、自分はアートマだとわかれば、自分とラーマさまはひとつだという気持ちになるのです」

ハヌマーンはそうやって、深い帰依のころをあらわしました。

橋は、四日で完成しました。

人をあざむくラーヴァナ

そのころ魔王ラーヴァナは、シーターにさらにひどい仕打ちをしていました。幻術 げんじゅつ に長けたヴィディユッジフヴァVidhyut Jihvaに命じて、ラーマそっくりの生首を作らせ、シーターを苦みの淵に落とそうというのです。さらにまた、ラーマの矢の模造品も作るように命じられると、幻術師ヴィディユッジフヴァは言われたとおりにしました。生首と矢がシーターの目の前に置かれ、ラーヴァナがやってきてこう言います。

「シーターよ、見るがいい。これがラーマのなれのはてだ。おぬしはいつもラーマに望みを託していた。だが奴はもう死んでしまったのだ」

シーターはもう耐えられません。深い苦しみに沈み、手を合わせてこう言いました。

「おお、ラーヴァナさま！ お願いします。私の首を切り落としてください。そしてラーマさまの首と一緒に燃やしてください。ラーマさまがいなければ私は生きていけません。これが最後の願いです」

シーターは泣き出しました。そのとき魔王ラーヴァナに知らせが来て、急ぎの問題を話し合うために、すぐに〔ラーヴァナの長男〕インドラジットと会うことになりました。ラーヴァナは、すぐその場を去りました。ヴィビーシャナの妻、サラマーSaramaがシーターにささやきます。

「奥さま。ラーマさまを殺すことができる者など、この世に誰もおりません。ラーヴァナさまのまわりには、人をあざむく幻術師が幾人もおります。ラーマさまの首は本物ではありません。ラ

ーマチャンドラはご無事です。これはただの作り物です。心配はいらないのですよ」

サラマーSaramaが作り物の首に手をのせると、たちまち生首はかき消えてしまいました。次の日、ラーヴァナはシーターを訪ね、こう言いました。

「シーターよ！ラーマはまもなく死ぬだろう。おまえはわしの妃 きさき になり、この城はおまえのものになる。わしの富、栄光、武勇を語りおおせる者はこの世に誰もおらぬ。わしはどんなことでもでき、すべてを知っている者だ。わしとの結婚を心に決めるがいい」

シーターは、足もとに生えていた草を引き抜いて言いました。

「ラーマさまの豊かさとくらべれば、ラーヴァナさまの富など、この草のように小さなものです。ラーマさまは永遠にして不滅の、光に満ちた英知あるお方。ラーマさまとラーヴァナさまとは、くらべものになりません。ラーヴァナさまは、この草の切れはしと同じように卑しいのです」

シーターの言葉を聞いて、魔王ラーヴァナは、怒りの声をあげました。

「シーター、おまえに二ヶ月だけ時間をやろう。それまでにわしになびかなければ、料理人をここによこし、おまえを細かく刻んで、うまそうな料理にさせてやる。そしてわしがおまえの肉を食らってやろう。これが最後の警告だ！」

そう言ってラーヴァナは去っていきました。

その翌日、ラーマの軍勢とラーヴァナの軍勢とのすさまじい戦いがはじまりました。両軍の何千という兵士が命を落としました。ランカーの島は恐怖におののきました。あるとき戦場で、猿

ヴァーナラ の軍隊がみんな気を失ってしまったことがあります。ヴィビーシャナはそれを見て、これは魔物の幻術のせいだと言って猿 ヴァーナラ の軍隊をはげました。ヴィビーシャナはみずから幻術の技をもって反撃します。すると倒れていた戦士がみんな起きあがりました。そこで魔王ラーヴァナは、ラーマの目の前にシーターの生首が落ちてくるように見せかけました。前にサラマーSaramaがシーターの恐怖と悲しみを取り除いたのと同じように、ここではヴィビーシャナがラーマを勇気づけました。

「ラーマさま。この世で誰がシーターさまを殺 あや めることができましょう。みさおの化身であられるシーターさまに、誰が触れることができましょう。この首は本物ではありません。作り物です」

ラクシュマナは、ラーヴァナのあやかしに激しい怒りをあらわし、戦場に飛びこんでいって怖ろしいほどの戦いぶりを見せたのですが、ついに気を失ってしまいました。ラーマは、悲しみをあらわにしました。

「ああ、ラクシュマナ。わたしはお前を、わたしの六つめの生命 いのち の息 いき だと思っていた。今日、わたしの六つめの生命 いのち が絶えてしまった」

〔 五つの生命 いのち の息とは、(一)胸の中心に位置する空気の息(二)下腹部に位置する肉体の排出(三)お腹の中心に位置する食べものの消化(四)喉 のど に位置する心の調整(五)全身に位置する触覚、のことをいう。六つめの生命 いのち の息とは、いわば生命 いのち の次に大切な人を意味している〕

ラーマは、泣くふりをしていました。ヴィビーシャナがその場にあらわれ、ヒマラヤ山脈からサンジーヴァニーSanjeevaniという薬草を採ってくるようにハヌマーンに言いました。ハヌマーンは、どれがその薬草なのかわからなかったので、山をまるごと戦場まで運んできました。薬草が与えられると、ラクシュマナはたちまち意識を取り戻しました。

次の日に、ラーマは戦場にくり出しました。そうすると、ラーヴァナは、ラーマの攻撃にとて

も耐えられません。すっかり力を使い果たしてしまいました。ラーマは哀れみを知る者です。その日はラーヴァナとの戦うのをやめて、休息をとってまた次の日からいくさをはじめのようにラーヴァナに伝えました。ラーマは敵に対しても思いやりを示していました。ラーマのいくさは、正義ののいくさでした。魔王ラーヴァナの妃マンドーダリーは、夫の悪 あ しき道を正そうと、力をつくしていました。

「ラーヴァナさまは、ラーマさまが何人 なにびと かご存じないのです。あのお方こそまさしく最高神ナーラーヤナの化身。そしてラクシュマナはアディシェーシャAdisheshaの化身でございます。どうかシーター姫をラーマさまにお返しし、ラーマさまの御足にひれ伏しますように」

マンドーダリーがそう言っても、魔王ラーヴァナは耳を貸しません。

悪い人間の生き方を改めるのは至難のわざです。悪い人々は感覚の力に振り回され、感覚の力に敗 やぶ れるのです。欲望・おごり・むさぼり・怒り・逆上 のぼせ・ねたみは人生の六つの敵であり、悪い人間をいつも苦しめます。悪い性質はわたしたちの敵であり、この敵が人生を破滅させるのです。ねたみは悪性の腫瘍に、怒りは魔物に似ています。実は魔物とは、そういう生き物がいるのではありません。悪い性質をもっている人が、魔物なのです。魔物の性質は強くへばりついていて、たやすくは剥 は がれ落ちないものです。身体と同じように、心もさまざまな部分から成っていて、好ましくない部分もあります。心は肉体よりも長く生きつづけ、次の人生の肉体を住みかに見つけます。だから、外面的な生き方（プラプリッティPravritti）ではなく、内面的な生き方（ニヴリッテNirvitti）に心を向けることが大切です。それだけが自分を助けてくれるのです。

内面的な道（ニヴリッティ・マールガNivritti Marga）とはどういうことでしょうか。内面的な生き方（ニヴリッティNivritti）の本質は、何をしても神さまに悦んでもらえるようにすることです。これが人生の目的を達する最もやさしい道です。残念ながら、人々はこのわかりやすく、やさしい道を行こうとしないで、わざわざ難しい道に頼っています。人々の知識は飛躍的に増えたのに、人格は下がってゆくばかりです。学者であっても常識はまるでなく、全体的な知識に欠けています。立派な学位があっても、ごく当たり前のことさえわかっていません。全体的な知識がないからです。そのために、よいことと悪いこと、正しいことと間違っていること、きれいなことと汚いことの違いがわかりません。俗世間の性質を改めるべきです。内を見る目を磨くのです。

兵士たちが魔物を殺すようになると、ランカー島に大きな悲しみが広がりました。悪いことをしていない人たちも、このいくさの犠牲になりました。罪を犯した人はひとりでも、その罰はまわりの人にまで及ぶものです。森が火事で燃えたとして、ニームneemの木〔苦い樹皮が取れる〕だけが燃えて、マンゴーの木だけは 甘い実が生 なるから 燃えずに残っているなどということがあつたのでしょうか。山火事は、そこにあるすべての木を焼きつくすでしょう。森にジャスミンがあれば、あたり一面にその香りを放つでしょう。それと同じように戦争は、悪い人とともに、よい人まで殺してしまうのです。

ある日のこと、ラクシュマナがランカー島で戦っていたとき、たまたまある母親が抱いていた子供を射殺 いころ してしまいました。子供はたちまち死んでしまい、母親はすぐに子供を捨て、その場から逃げようとしていました。ラクシュマナはそれに気がついて、ラーマに話しかけました。

「兄上、あの女の身勝手なさまを見てください。子をもつ母でありながら、子供を捨てて自分が助かるために逃げ出そうとしています。ランカーの人間は骨の髄まで身勝手です。情けなどあり

ません」

それを聞いて、ラーマは応えました。

「ラクシュマナ、あの婦人へのおまえの見方は間違っている。ランカーにもよい人はいる。とう
とい思いがあったからこそ、あの人は逃げたのだ。よく見ておくといい」

ふたりは逃げている女性の行く手をさえぎって、問いたしました。

「なぜ、無慈悲にも子供を捨てて逃げたのか」

女性は答えました

「私は肉体のことなど、少しも執着しておりません。死んだ者は帰ってきません。ラーマさまは、
ラーヴァナさまを倒すためにこの都に来ておいでです。ラーマさまは、ラーヴァナさまを倒され
たあと、ランカーの民をアヨーディヤまで連れて行ってくださるかもしれません。私はどうし
ても生きのびたい。神のおそばにいる喜びを味わいたいのです。ラーマさまのお国の民となり、
ラーマさまにお仕えしたいのです。だから私は、自分の身体が生きのびよう願いました。この
肉体に執着しているのではございません」

ラクシュマナは、この女性のとうとい気持ちを知って、強くこころを動かされました。

正義のヴィビーシャナ

次の日、両軍はいくさの支度をしていました。明け方、魔王ラーヴァナの軍隊は、いくさの太
鼓を打ち鳴らしました。ラーマの軍隊もまた、太鼓の激しい音をとどろかせました。このとき、
ラーヴァナの次男がいくさに加わっていました。この男が幻術を使ったために、猿 ヴァーナラ
の側は、たいへんな混乱におちいりました。ヴィビーシャナは、魔物によるまやかしを知りつく
していました。幻術を迎え撃ち、ラーマの軍隊を救いました。このときラーマは言いました。

「ラクシュマナよ。おまえたちはみんな、はじめヴィビーシャナを友として受け入れようとしな
かった。だがいまや、この人はわれらの中でも最も大きな働きをしている。ヴィビーシャナはず
ばらしい。こんな人はいない」

ラーマはヴィビーシャナの偉大さを正しく認めました。ヴィビーシャナは、ダルマを支えるた
めに力をつくす者です。自分の兄であったラーヴァナが悪に溺れているのを見たときは、兄を諫
いさめ、その考えを改めようとした。罪と悪の一味に加わることを潔いさぎよしと
しなかったのです。ラーヴァナを変えることができないとわかってからは、兄を見限ってダルマ
の軍勢に加り、すべてを神にゆだねました。そういう点では、ヴィビーシャナはビーシュマより
もすぐれています。〔ビーシュマは「マハーバーラタ」において善のパーンダヴァ兄弟の武術の
師であったが、庇護を受けていた悪のカウラヴァ兄弟に味方した〕ビーシュマは人格高潔な人
ではありましたが、カウラヴァ兄弟が不正なやり方をしていても、これを見限ろうとはしません
でした。それどころか、カウラヴァの軍の総大将となることで、罪と悪事を担う一員とな
ったのです。

戦争は憎しみから生まれ、憎しみは欲望から生まれます。欲望が満たされなければ怒りが生ま
れ、欲望が満たされれば我欲が生まれます。だから欲望を減らし、憎しみを捨て、神の恵みを受
けるよう力をつくす努力をしなくてははいけません。これが人間にとって、何より大事な務めです。

第八章 ヴィビーシャナの最高の帰依

神のところで満ちていないなら、
ふたつのことで苦しむだろう。
数知れぬ自分の咎 とが を黙って隠し、
ささやかな他人の咎 とが を厳しく責めることになる。

愛の化身たち。

ふたりの人物の姿が「ラーマヤナ」において特にきわだっています。スグリーヴァとヴィビーシャナです。ヴィビーシャナはラーマを求め、ラーマはスグリーヴァを求めました。スグリーヴァは、会ってはじめてラーマの人格と偉大さを認めました。ヴィビーシャナは、ラーマに会う前からそのまれなる人格を認めていました。

クルクシェートラのいくさ〔叙事詩「マハーバーラタ」の大戦争〕は十八日の間つづきました。ラーマとラーヴァナとのいくさは七五日つづきました。物質的な意味では、この戦いはランカー島において七五日で終わったわけですが、ラーマとラーヴァナ、パーンダヴァ兄弟とカウラヴァ兄弟、真理といつわり、正義と悪との内なる戦いは、人のところの中でいつまでもつづきます。光と闇の戦いがいつ終わりを迎えるか、誰もわかりません。

どんな人でも神がわかるわけではありません。他人の妻を奪ったり、立派な人をばかにするようでは、神のことはわかりません。けがれなく、思いやりのある人だけが、神を知りたいと願うことができるのです。

ヴィビーシャナが捧 ささ げたもの

魔王ラーヴァナの長男インドラジット〔「インドラに打ち勝った者」という意味。かつて神々の王インドラを破ったことがあるため、こう呼ばれるようになった〕は、ある儀式をおこなってラーマを燃やして灰にしてやろうとしました。この幻術は、ラーマの軍勢に大きな騒ぎと混乱をもたらしました。ヴィビーシャナは魔物のまやかしを知りつくした人でしたから、返し技を使って相手の儀式による幻術の力を奪ってしまいました。ヴィビーシャナはラーマとラクシュマナに、黒イチゴの木の下でインドラジットが幻術の儀式をおこなっているから気をつけて見るように言いました。木のまわりは、いけにえにされた人の死骸がたくさんころがっています。ヴィビーシャナはラーマとラクシュマナに、インドラジットの幻術の技についてよく気をつけるように言い、その木と本人を引き離すように言い添えました。インドラジットの力は、その木のそばにいるときに幾重にも大きくなると教えたのです。インドラジットは、ヴィビーシャナがラーマの軍隊に戦場で力を貸しているのを見て、いきどおりをあらわしました。ヴィビーシャナに導かれ、ラクシュマナがハヌマーンに肩に乗って自分に迫ってきたのを見て、インドラジットの怒りは爆発しました。ヴィビーシャナに言い放ちます。

「ぬしはランカーを裏切った。おのれの領民を売ったのだ」

ヴィビーシャナは言い返しました。

「インドラジット、くだらぬばか話におぼれて時を無駄にするのは、悪 あしき者の常である。わしはそなたの父ラーヴァナに、悪の道から離れるように幾度も申し上げた。だがそなたの父は、わしの言うことに耳を貸そうとしなかった。人の妻を奪おうなど、恐ろしい罪である。それをそなたの父にわかってもらおうとした。不正（アダルマ Adharma）に向かうなら、おのれの身も領民も失うことになるとも申し上げた。クムバカルナ〔ラーヴァナの弟〕とシュールパナカーの前でも、はっきりと申した。悪いと知りながら悪に手を染め、おのれ自身とランカーをここまでしてしまったのは、そなたの父だ。わしのはからいは何の益もなかった。そなたの父にとって、不正ほど愛いとおいしいものはないようだ。いつわりが喜び、悪しき行いが生きる道となっている。そこまで悪に染まってしまって、どうしてここを変えることができようか。ランカーのこの不幸を作ったのは、そなたの父だ。ランカーの破滅は、ラーヴァナのなした業 わざ である。原因はわしにはない」

インドラジットは、この言葉に納得できず、声を張り上げました。

「父上の手助けを望まぬのであったらば、せめて中立の立場を守ればよかったであろう。なにも敵の一味となることはあるまいに」

それに対して、ヴィビーシャナはこう言いました。

「そなたには、英知が欠けている。だから真理といつわり、正義と悪とを見きわめることができないのだ。わしはその違いを痛く感じ、シュリー・ラーマの側に加わった。ダルマが危機に瀕ひんしているときに中立のままているのは、人としてあるまじき不正であり、悪である。この世はラーヴァナから救われるべきなのだ。わしはラーマさまの身近にいることを悦ぶ。これにまさる宝はない」

舌のたとえ

ヴィビーシャナはランカー島において、誰よりも真理と正義を貫き、深い信仰を抱いていました。ハヌマーンがはじめてランカー島までやってきたとき、ヴィビーシャナの屋敷でその家主に出会ったのです。ヴィビーシャナはハヌマーンに言いました。

「ハヌマーンよ。わしはあまたの魔物どもの中であって、何をするによく気をつけている。あたかも舌が多くの歯に囲まれているようなものだ。そんなことでいったいいつまで生きられよう。いつになったらラーマさまの恵みが得られるのだろう。いつ神のおそばにいる喜びを味わえるのだろう」

そこでハヌマーンはヴィビーシャナに言いました。

「ヴィビーシャナさま。この世においてところある者が悪しき魔物に苦しめられるさまは、まさしく舌が鋭い歯に取り巻かれているようなもの。ただし、ひとつだけお忘れなさいますな。舌はあなたさまとともに生まれましたが、歯は途中からあらわれて、いつかは抜け落ちるもの。しかるに舌は、あなたさまとともに生まれ、死ぬまでともにあるでしょう」

舌は身体の聖なる部分です。それに加えて徳もあります。悪い者どもに囲まれてはいながら、甘い魅力と真理の化身でありつづけています。歯は、いつもは舌を外に出してくれないけれど、必要とあらば舌を外に出し、助けます。唇が乾かわけば、舌は出てきて唇をしめらせるでしょう。

トゥルシーダースTulsidasの帰依

多くの聖者や修行者(サーダカSadhaka)が、ラーマのために生涯を捧げる自覚をもちました。トゥルシーダースTulsidas〔一六～一七世紀の詩人。叙事詩『ラーマ・チャリット・マーナス』を書いた〕は神に帰依した偉大な人で、チトラクータChitrakoota山を住まいとしていました。毎日みそぎのあと、聖なる水を木に捧げていました。ある日、目の前に精霊があらわれて、言いました。

「先生が『ラーマヤナ』についてお話しになるときに、最初にやってきて、最後に帰っていくご老人がいるでしょう。明日、その人の足もとにひれ伏して、恵みをお求めなさい」

精霊はそう言って、姿を消しました。

次の日、トゥルシーダースは、白檀 びやくだん の粉の支度をしながらラーマの名を唱えていました。そのうちに、年老いたブラーミン〔パラモン〕がやって来ました。トゥルシーダースは「ラーマヤナ」についてのお話をはじめました。

お話が終わると、そのブラーミンを残してみんな帰って行きました。トゥルシーダースは老人のもとへ行ってその足もとにひれ伏しました。その人はトゥルシーダースに、どんな恵みをお望みかと聞きました。トゥルシーダースは答えました。

「わたくしは、麗 うるわ しきシュリー・ラーマの姿のダルシャン〔神にまみえる機会〕を得たいと願っております」

そこで老いたブラーミンは言いました。

「幾日もしないうちにシュリー・ラーマのダルシャンが得られるでありますよ」

このブラーミンは誰だったのでしょうか。それは他ならぬハヌマーンでした。ラーマの栄光が歌われるところ、ハヌマーンはどこにでもいます。ラーマの栄光を聴くと、ハヌマーンはこの上ない悦びに満たされるのです。

何日かあと、トゥルシーダースが世界の主 ぬし のために白檀 びやくだん の粉の支度をしていると、まだ幼い年頃の男の子がやってきました。トゥルシーダースのもとへ来て、話しかけます。

「お師匠さま。白檀の粉を少しだけいただけませんか」

トゥルシーダースは、気安い気持ちで男の子の願いを聞いてあげました。男の子に粉をあげているときに、木の上にいた鳥はみんな、トゥルシーダースを深く哀れみました。ラーマという神さまを何年もひたすら思いつづけてきたというのに、この男の子が彼 かのシュリー・ラーマであることがわからないのです。世界の主 ぬし は、あらゆるところにいるものです。

森の奥でも荒地 あれち でも、
街の中でも田舎でも、
山の上でも水辺でも、
神は哀れな者を助ける。

それから二日のち、老人はトゥルシーダースに、近頃神さまの姿を見ることはなかったかと尋ねました。トゥルシーダースが、見ていないと応えると、老人は言いました。

「あのとき男の子の姿でやってきて白檀の粉を受けたのは、いったいどなたとお思いか。あらゆる姿は神のもの、あらゆる名前は神のもの。たったひとつの姿に限ってあの方をあがめるのは、実に愚かなことではないか。ラーマチャンドラは、そなたのこころの内なる存在。そなたのこころ(heart)は、神さまのまつられている祭壇だ。世界の主 ぬし をさしおいて、他のいかなるものも、こころの祭壇におまつりしてはいけない。いとしい者よ、身内の人や友達に家のどこを使ってもらってもいいだろう。しかし聖なる祭壇に、身内や友達をおまつりするものではない。身内にしても友達も、道の途中でやってきて、道の途中で去っていく。身内や友につくすのはいい。こころまで渡してはならぬ。こころの中をまごころで満たすのだ。こころがまごころで満ちていれば、そこが神の宮となる。

『こころ(フルドゥHrudh)』と

『神(ダヤdaya)』がひとつになれば、

『神の宿るまごころ(フルダヤHrudaya)』となる」

ハヌマーンはトゥルシーダースにそう教えを説いて、姿を消したのです。

投げてはならぬ

ハヌマーンは戦っている間、心の中はひたすらラーマのことを思っていました。ハヌマーンはヴィビーシャナと精神的な道について幾度も意見を交わしたものです。ハヌマーンは言っていました。

手にすべきものを手にしたときは、

成し遂げるまで投げてはならぬ。

望むべきものを望んだときは、

成し遂げるまで投げてはならぬ。

問うべきことを問うたときは、

成し遂げるまで投げてはならぬ。

思うべきことを思ったときは、

成し遂げるまで投げてはならぬ。

あくまで願いつづけければ、神も応えてくれるはず。

願うなら、ただひたすらに願うのだ。

それが神に帰依する者の務め。

帰依する者は、負けてはならぬ。逃げてはならぬ。

ヴィビーシャナは道を求めるたいへん立派な人でした。幼いうちから苦行をおこない、神に親しんでいました。創造神ブラフマーが目の前にあらわれて、こう言ったことがあります。

「ヴィビーシャナよ。ほしいものがあれば何となりと申すがいい」

ヴィビーシャナは言いました。

「神さま。わたくしが正しい道をゆき、施しを忘れず、犠牲をはらう生き方ができますように、どうか祝福してください。どうかわたくしのこころが思いやりで満たされ、頑 かなかく なにな

ることのないように」

ブラフマーはヴィビーシャナに祝福を与えました。

クムバカルナ〔ラーヴァナの弟〕は魔物の性質の者でした。苦行をおこなうと、創造神ブラフマーがあらわれ、

「神の恵みを願うがいい」

と言いました。クムバカルナは、思いやりのない

「冷たいところ（ニルダヤNirdaya）」

を願ったのですが、魔物にありがちな、ろれつの回らぬ言い方のために

「眠たいところ（ニッドラNidra）」

と言ってしまいました。それからというもの、クムバカルナはものすごく眠る人になったのです。〔クムバカルナは六ヶ月眠って一日だけ目を覚ます。最後にはラーマに倒される〕

思いやりのない人は人間（マーナヴァManava）ではありません。魔物（ダーナヴァDhanava）です。どんなときも、まごころをなくしてはいけません。

こんな言葉があります。

信じるころによって、人生の目標に達する。

王の息子も貧しい者も、愚かな者も賢い人も、

信じるころによって、人生の目標に達する。

お腹に息をためこんで、

鼻をつまんで苦行をしても、

茶色の衣〔出家者の衣〕をまとっても

腕輪や首輪で飾っても、

あくまでも、信じるころによって、人生の目標に達する。

ヴィビーシャナはいつも努力を重ね、思いやりに満ちていました。だからこそ、ラーマの原理を知ることができたのです。真理と正義に従うことで、神を信じる人生を送りました。神の名前と形とは、すなわち真理であり、正義です。真理（サティア）と正義（ダルマ）こそは、「ラーマヤナ」の核心です。

神の住まい

ラーマは猿 ヴァーナラ の戦士たちとともに神聖な話をする機会を設け、多くのすぐれた教えを説きました。舌は鋭い刃物のような歯に囲まれている。舌のようにふるまうのだと教えました。真理を求める者には、あらゆる場面でさまざまな障害が待っています。舌は歯よりも長く保ちます。舌を取り巻いている歯のように、悪い人はいずれ抜け落ちていくでしょう。歯が舌と別れていくように、悪い人はみなさんから別れていきます。神はみなさんを守ってくれます。神に守られるというそのことが、みなさんの身につけているお守りなのです。神はみなさんのために何でもします。ティヤーガラジャThyagarajaは言っています〔次の詩はクリシュナをたたえている〕。

世界の主 ぬし よ。

あなたにかなう讚美など、語れる者がいるのでしょうか。

あなたのくださるお情けをいつも私は待つばかり。

どうか私に哀れみを。

あなたはかつてご自分の師匠の息子をよみがえらせた。

ヴァスデーヴァ Vasudeva とデーヴァーキー Devaki〔クリシュナの父と母〕を自由にし、

ドラウパディー〔正義のパーンダヴァ兄弟の妻〕にあふれるほどの衣を与えて祝福し、

パーンダヴァ兄弟を守り、

〔学友〕クチェラー Kuchela の願いをかなえ、

醜女 しこめ のクブジャー Kubja を美女へと変えた。

創造の神ブラフマーもその栄光を語りおおせはしないでしょう。

あなたのくださるお情けをいつも私は待つばかり。

あるとき聖者ナーラダ Narada は、最高神ナーラーヤナ〔ヴィシュヌ〕を訪ね、問いかけました。

「世界の主 ぬし よ。どちらに住んでおいででしょう。第一の住まいはどこなのですか」

最高神ナーラーヤナは答えました。

「ヴァイクンタ Vaikunta〔天界〕、カイラーサ Kailasa〔聖地〕、スヴァルガ Swarga〔天界〕などは、わたしの仮の宿りである。わたしの永遠の住まいは、信じる者によってわたしの栄光が歌われるところだ」

神は人のこころの奥を住まいとしています。こころに神を見るのです。

第九章 ラーヴァナ倒れる

自分の腹を満たすため、必死になって働いている。
よい学歴を得るために、狂おしいほど努力する。
でも、幸せは得られない。
なぜそのように苦しみはつづくのか。
こころの底から祈るなら、
神さまが救ってくれないはずがない。

愛の化身たち。

真理・正義・平安・愛は、さまざまな聖典の基礎であり、すべての宗教の核心であり、あまたある道の行き先であり、あらゆる根本の中の根本です。

人々は他の人のあら探しをすることに夢中で、自分の欠点に気がつきません。その原因は、物質的な考え方にあることがわかるでしょう。人間は、

真の自己（アートマ）といつわりの自己（アナートマ）

肉体に宿る者（シャリーリーShariri）と、肉体（シャリーラムShariram）

土地を知る者〔英知〕（クシェートラジニャKshetragna）と、土地〔物質〕（クシェートラKshetra）

永遠のもの（スティラSthira）と、はかないもの（アスティラAsthira）

などから成っています。ここにあるような二元性を除いて、この宇宙で何ものも見いだすことはできません。

世界のすべては、「外面的な生き方」（ブラヴリッティPravritti）と「内面的な生き方」（ニヴリッティNivritti）の織りなす物語です。

肉体、土地（クシェートラKshetra）物質は、「外面的な生き方」に、

アートマ、純粹意識、肉体に宿る者は、「内面的な生き方」にあたります。

神の化身（アヴァターラ）でさえも、人間の肉体をまとっているため、「外面的な生き方」の制約を受けています。ラーマもその例外ではありません。全知にして全能ではあっても、人間の肉体をしているために、まやかしの力にとらわれているかのようにふるまう必要があったのです。

ラーヴァナの首、落とされる

ラーマは、魔王ラーヴァナと戦う用意をしました。ラーヴァナはすでに、息子のインドラジット、弟のクムバカルナ他、味方の軍勢をことごとく失っていました。いまやラーヴァナは、まるでランカーの城跡のように、ただひとり残されていました。

ラーマとラーヴァナとの戦いは、七日七晩にわたってつづきました。インドラ神が、敵かたきのインドラジットが倒されたことを喜んで、ぜひいくさのためにラーマさまにお役立っていた

だきたいと、天界の馬車を送ってきました。最強の武器をそなえた戦闘用の馬車です。マターリ Mathaliの乗る天界の馬車が、光をきらめかせながら地上に降り立つさまは、目にもまばゆいほどでした。魔物による新手のからくりではないかと、猿 ヴァーナラ の軍勢が思ったほどです。馬車のふたつの車輪が地面に触れると、マターリ Mathaliが戦車から降り、両手を合わせてラーマに申し述べました。

「世界の主 ぬし よ。この馬車を、インドラの神から献上いたします。それにインドラの神みずからが、魔王ラーヴァナを相手に戦うつもりでございます」

ラーマはいくさを戦う間、すぐれた現実感覚と用心深さを示していました。それでも、どうしてラーマは戦争という手段を選んだのか、どうして多くの死者を出さねばならなかったのかと問う人がいます。創造した者は、罰する資格があるのです。

実際には、神が罰したり守ったりするものではありません。みずからの徳がその人を守り、みずからの悪徳がその人を罰するのです。人は自分の行為の報いから逃 のが れることはできません。魔王ラーヴァナは、みずからの悪 あ しき行為の報いを受けることになりました。罰はすぐにあらわれなくても、いつか必ずその人にあらわれます。ラーヴァナに、悪しき行為の報いの時がせまっていました。

いつときは、お妃のマンドーダリーが、くどいほどにラーヴァナに言い聞かせようとしたものです。

「ラーヴァナさまは、悪事に溺れておられます。清らかでとうとい多くの婦人を、言葉につくせぬほど苦しめているではありませんか。ラーヴァナさまの犯している怖ろしい罪は、いずれご自身に還ってきます」

マンドーダリー妃はさらにこう言います。

「ラーヴァナさまも、きびしいカルマの法則からは逃れられませぬ。わたくしは王家の娘であり、息子のインドラジットは無敵の勇者であり、あなたさまはわたくしの主人ではあるけれど、ラーヴァナさまとわたくしどものことを思うと、いつも不安でなりません。どうかお気をつけください。女は炎のようなもの。みだらな目、言葉、ふるまいで、女を辱 はずかし めてはなりません。それは大きな罪だからです」

ラーヴァナはマンドーダリーの言葉をまともに受け取ろうとしませんでした。それどころか、嘲笑 あざわらって っていました。

ラーマと魔王ラーヴァナとの戦いは、すさまじいものでした。ラーヴァナは蛇の矢(サルパーストラSarpastra)を放ちました。あたり一面が、たくさんの蛇でおおわれました。ラーマが大驚の矢(ガルダーストラGarudastra)を放って反撃すると、蛇はみんなたちまち食べられてしまいました。森を放浪しているただの人間に、限りない力があるのを見て、ラーヴァナは驚きました。マンドーダリーの言葉を思い出します。妃はこう言っていました。

「ラーヴァナさまはシュリー・ラーマのお力をあまりに低く見ておいでです。ラーヴァナさま、ラーマさまはただのお人ではございません。あのお方こそまさしく最高神ナーラーヤナの化身。猿どもの力を得て海を渡る橋を架ける者など、いったいどこにおりましょう。ラーヴァナさまは、みさおと徳の鑑 かがみ であられるシーター姫を誘拐してしまわれたのです。まだ遅くはございません。どうかラーマさまをお訪ねください。シーター姫をお返しし、お情けをいただくのです」

そのときはラーヴァナも言い返しました。

「たとえこの身は朽ちようとも、ラーマの情けなどいらぬわ！」

戦いの七日目、ラーマはインドラ神からもらった「首の矢（カンターストラKantastra）」を放ち、魔王ラーヴァナの十の首を切り落としました。ここに大魔王は倒れ、息絶えたのです。

神さまへの奉仕が、解脱への乗り物

魔王ラーヴァナの十の頭は、四つのヴェーダVeda（p12）と六つのシャーストラShastras〔「マヌ法典」などの聖典〕をあらわしています。ラーヴァナはその書物をすべて学んでいたのに、そこから何の恵みも得られませんでした。実践は、書物を学ぶことよりはるかに大切です。〔本日の〕この講話の前に演説をした人が、ハヌマーンはどんなふうヴィビーシャナに助言をしたかという話をしました。ハヌマーンが、ランカー島でシーターを探しているとき、お城の片隅でラーマの名を唱える声が聞こえてきました。ただちに声のする部屋に入って行くと、ヴィビーシャナを見つけたのです。ふたりともラーマに帰依する者同士ですから、互いに挨拶を交わしました。ヴィビーシャナはハヌマーンに言いました。

「ハヌマーンよ。そなたは幾月 いくつき かに前にラーマさまにお会いしただけなのに、すでにその精神において、まことに高い境地に達している。しかもそなたはラーマさまの身近にあって甘い魅力を味わっておいでだ。しかるにこのわしは、これまで何年もラーマさまの御名 みなを唱えてきたというのに、いまだラーマさまの恵みはこの身にあらわれておらぬ。ラーマさまのダルシャン〔その姿にまみえる機会〕も、ただの一度も得られていない」

これに対して、ハヌマーンはこう言いました。

「これはしたり、ヴィビーシャナさま。ラーマさまの使命のために働くべきだとは申しませぬが、ラーマさまの理想のために奉仕をなさるなら、あのお方の御名を唱える恵みは十分に得られましょう。苦行をしたり、神さまの御名を唱え（ジャパJapa）たり、瞑想をするだけでは足りませぬ。奉仕（セヴァSeva）も大切でございます。ご奉仕こそは人生を渡る舟。果物を見ているだけでは足りませぬ。見ているだけでは腹は太りませぬ。果物を食べて、腹におさめねばならないのです」

自分を大きく変えていく、三つの段階があります。

「神について知る（ジナトゥムJnatum）」

「神を見る（ドラシュトゥムDrashtum）」

「神とひとつになる（ブラヴェーシュトゥムPraveshtum）」

です。

「神について知る（ジナトゥムJnatum）」とは、経験することです。本があるとします。まず、それがどんな本かを知ることが必要です。次にその本を手に入れます。最後にその本を読むでしょう。そうしてはじめて、その本を味わうこととなります。それと同じように、神さまの名前を唱えているだけでは何にもなりません。ラーマの名前（ラーマスマラナムRamasmaramam）を現実の生活に生かしていくべきです。ラーヴァナはヴェーダを修めていたけれど、そのうちの一言も実践をしませんでした。かつてはランカー島のすみずみまでヴェーダを唱える声が響き渡っていたものです。魔物の中には、ヴェーダに詳しい者もたくさんいて、よく唱えていたものです。けれどもみんな、唱えている言葉を少しも実際におこなわなかったのです。すべてのシャーストラShastras〔聖典〕が、

「決して誰も傷つけないで、すべての人を助けるように（Help Ever, Hurt Never）」

と教えているにもかかわらず、ラーヴァナはそれをおこなおうとはしませんでした。

学問よりも実践

人間には思いのままになる、たいへん大きな力があります。ところがそのことに気がつきません。世間の考え方にとらわれているからです。朝から晩まで、ただの暮らしのためだけに、ひたすら時間を使っています。

夜が明けてから暮れるまで、少しも休むことはなく
お腹を満たすためだけに、必死になって働いている。
役にも立たない学問と、浅はかなものを追い求め、
人生を棒に振っている。
人間よ。そんなに先を争って、
蓮 はす の眼 まなこ〔神〕の地を忘れ、
いったい何を手に入れた。
人間よ。よく考えてみるがいい。

今の世界は悪に色どられていて、人々はいつわりにも手を染めて自分の時間を汚しています。心がいつわりで汚れてしまうと、人生そのものがいつわりにも変わってしまいます。見ること、知ること、なすことのすべてが、いつわりにも変わります。心の中にあるものが目や耳や舌や行為をとおしてあらわれます。内にあるものだけが、外に出てくるのです。

この聖典の教えをいつも守らなければいけません。

「真理を語れ(サッチャム・ヴァダ Satyam Vada)」

口にしたことならば、必ずおこなわなくてはなりません。自分のすべきことをしなかったら、それは嘘をつくのと同じです。嘘であるばかりか、裏切りであり、あざむきです。

聖典の教えのふたつ目は、

「正義をおこなえ(ダルマム・チャラ Dharmam Chara)」です。

何が正義(ダルマ)で何が正義でない(アダルマ Adharma)か、わからないという人がたくさんいます。我欲にとらわれて、したい放題のことをしています。何をするべきで、何をするべきでないかわかっていても、わからないふりをしているのです。

みなさんは、これまでたくさんのよいお話を聞きました。その中のいくつかを実際におこなったのでしょうか。

明かりのことを聞くだけで、暗い闇夜は終わるだろうか。
薬の効き目を聞くだけで、病気の人が治るだろうか。
お金の力を聞くだけで、貧乏暮らしを捨てられようか。

学んだことを実践しなければ、この世界で多くのものは得られません。人間が人生でよいことをしなければ、この世界はよくなりません。人間とは何でしょう。心のあるものが人間です。心とは何でしょう。さまざまな思いの寄せ集めが、心です。思っていることから、その人の性質が

生まれます。悪い思いを断ち切って、はじめて「人間」の名に値するのです。

教育が立派だとして何になる。
神の書かれた額のしるしを
消せる者などどこにもいない。
頭の中があやしい思いばかりなら
心は鈍いままだろう、何の役にも立たないだろう。

魔王ラーヴァナは、六四の学問を修めることで、何か得るものがあったのでしょうか。学問は、英知に向かうべきものです。ところが今の教育では、学生の就職先のことばかり考えています。

人間は、自分の不幸を自分で作ります。ラーヴァナが戦場で倒れたとき、お妃のマンドーダリーはなきがらに向かって、泣きました。

「おお、ラーヴァナさま、せっかく学んだ学問はどうしたのです。道をお改めくださいと、わたくしは幾度も申し上げました。あなたさまのように偉大な王が猿どもに苦しめられるとは、なんと恥ずべきことでしょう。でもあなたさまはラーマさまの手でみまかられたのです。これをわたくしはさいわいと思っております」

まさしくそのとき、ラーヴァナの遺体を見にヴィビーシャナがやってきました。はじめマンドーダリーは、ヴィビーシャナにきびしい言葉をあびせました。それから、自分のあやまちに気づいて言いました。

「ヴィビーシャナ。そなたを責めてもせんないこと。そなたは何度も兄のラーヴァナさまに助言をしておられた。ただ、その言葉がラーヴァナさまの頭に入らなかったのですね」

頭が空であったなら、どんなものでも頭に入る。
頭がたわごとばかりなら、何も頭に入らない。
頭の中のごみくずを、すっかり捨て去らないならば、
清い思いで満たすなど、いったいどうしてできようか。

マンドーダリーはシーターのもとへ行って、許しを乞いたいと考えました。しかし、そこでこう思ったのです。

「私はとうの昔にシーター姫のもとに行くべきでした。いまさら行ったところで、いったい何になりましょう」

悪い芽を取り除く

魔王ラーヴァナは死にました。ひどく哀れなことでした。人々は遺体の前で泣いていました。未亡人となった女たちは、夫のむくろの前で泣きつづけていました。いくさで孤児となった子供たちは、親のなきがらのそばで泣いていました。ランカー島の人々の表情は、みんな暗い影に沈んでいました。すべての原因はどこにあったのでしょうか。ラーヴァナの欲望です。それが、ランカーにおこった悲劇の原因です。一匹の蠅 はえ も大きな悲劇のもととなることがあります。たった一滴の毒を入れることで、器いっぱい牛乳が毒に変わってしまいます。王国にはいい人

もいたけれど、ラーヴァナの悪い行いのせいで、すべてが醜く汚れてしまったのです。ほんの小さな傷で命を落とすこともあります。蟻 あり は小さくても、大蛇を倒すことができます。それと同じように、はじめは小さなあやまちでも、大きな悲劇になり得るのです。小さな種も大きな樹に成長する力を秘めています。種は樹に成長して、果物を実らせることも、棘 とげ を生

は わせることもできます。だから、果物の生 なる種だけを蒔 ま いて、棘 とげ の生 なる種を蒔かないように、よく気をつけなくてははいけないのです。それと同じように、欠点というものは、大きくなってから直すのは難しいのですから、早いうちに改めるべきです。だからこそ「ウパニシャッド」〔ヴェーダの奥義書。ヴェーダータの文献〕は言うのです。

「仕事をあつこうやまうように（タスマイ・ナマツハ・カルマンTasmai namah karman）」

どうして仕事（カルマ）をうやまうべきなのでしょう。神さまに悦んでもらえるように、行いを清らかで聖なるものにすることが大事だからです。ヴェーダはまた、

「神さまにお喜びいただくために、すべての仕事をするように」

とも言っています。神に悦んでもらえるように仕事をすれば、神はいつもみなさんを守ります。

よいことだけをする

真理を語り、よいことをしてください。真理、真実ばかり一日中話すわけにもいかないと言うならば、一定の時間を設け、せめてその間は無理にでも真実を実践するのです。わたしたちはカリーの時代 ユガ〔ヒンドゥー教の宇宙観における第四の時代。末世〕に生きています。この時代にあっては、高潔なたましいの人でさえ嘘をつかざるを得ないことがあります。どうしてそんなことになってしまうのでしょうか。付き合う人が悪いからです。こういう言葉があります。

「友を教えてもらえれば、あなたがどんな人かがわかる」

付き合う仲間によって、自分の質も変わってくるのです。

友がよければ執着を捨てられ、
執着を捨てれば迷いは消える。
迷いが消えれば心は落ちつき、
心が落ちつけば、解脱に至る。

いつもよい人との交際を深め、決して悪い人と付き合うことのないようにするのです。どんな犠牲をはらっても、悪い付き合いから離れなさい。自分に悪いところがあると思ったら、その悪い性質をただちに捨てるべきです。それは罪を犯すことになると気づいたら、やめなさい。魔王ラーヴァナの致命的な欠点は、悪いこととわかっていながら罪を犯していたことです。悪意がなければ、罪にはなりません。

心に向かってこう言うのです。

「心よ、充分な気づきとともにラーマの御名を瞑想するのだ」

これは、世間のことにも格式の高いことにも同じように役立ちます。大きな石は、敷石にも建築の石材にも使えれば、聖なる像を彫ることもできます。敷石は歩くために、石材は建物を建てるために、聖なる像は神さまに祈るために使われます。石そのものは同じで、使う目的が違うのです。

学生のみなさん。マンディル(寺院)にいても、学校や大学にいても、寮にいても、いつも立派なふるまいをしてください。誰もが感心するような、よい行いをするのです。

心のことは、心が証 あか し、
身体のは、よい徳が証し、
愚かな人は、愚かさが証し、
人間のことは、スワミが証し。

よいことをしていれば、悪いことなどおこりません。だから、よいことだけをしてください。よい行いをしていれば、人生が価値あるものになります。まことの人間とは、内にすぐれた人間性をそなえているものです。朝起きたらすぐにこう思うようにしなさい。

「ぼくは人間だ。動物でも魔物でもない」

今、世界全体がいつわりと悪に染まっているために、はてしない不和(アシャーティ Ashanti)がつついています。真理と正義があれば平和(シャーティ)に向かいます。反対に、いつわりと悪があれば不和(アシャーティ)に向うでしょう。茶色のキンマ〔香辛料の一種〕と、みどりの葉と、白いライムを合わせると、赤い色になります。三つの成分を混ぜることで、新しい色があらわれるのです〔これは南アジアの嗜好品、パーンのことをさしている〕。真理は清らかなもの、ダルマは我欲のないものです。このふたつがむすびつけば、こころは平安に向かいます。このふたつが、たおやかにむすばれば、人のこころは平安を得られるでしょう。サティア(真理)とダルマ(正義)は、鳥に翼がふたつあるようなものです。自転車に車輪がふたつあるようなものです。車輪がひとつしかない自転車に乗ることはできません。魔王ラーヴァナは、サティアとダルマを守らずに、いつわり(アサティア Asathya)と悪(アダルマ)ばかりに従っていました。だからラーヴァナの人生は破滅したのです。

ラーマもラーヴァナも学者でした。ラーマは三つの学問を修めていただけなのに、ラーヴァナは六四の学問〔すべての学問〕を修めていました。ふたりの違いは、何をしたかの違いです。ラーマは学んだことをすべておこなっていたのに対して、ラーヴァナは学んだことを少しもおこなわなかったために、人格がねじ曲ってしまったのです。

「ラーマヤナ」の精神的な意味

「ラーマヤナ」は、シーターの誘拐や、ラーマの怒り、ラーヴァナの死といった出来事の寄せ集めではありません。ほんとうの「ラーマヤナ」とは、そういうものではないのです。「ラーマヤナ」の奥にある精神的な意味を理解するべきです。

ダシャラタ王とは何だったのでしょうか。コーサラ国の王というだけではありません。ダシャラタ王は、人間の肉体という二輪の戦車を意味しています。人間の肉体には、行為の五つの器官〔見・聞き・味わい・触れ・臭いをかく〕と、知覚の五つの器官〔目・耳・舌・皮膚・鼻〕があります。

アヨーディヤはコーサラ国の都という町にとどまりません。アヨーディヤは守りの堅い城塞、つまりこころ(heart)をあらわしています。都は十の器官が取り巻いている中心にあたります。

三人のお妃 カウサリヤー、スミトラー、カイケーイー はそれぞれ、
純性（サットヴァ）、鈍性（タマス）、激性（ラジャス）の性質をあらわしています。
三つの性質を意味する三人のお妃は、
ラーマ、ラクシュマナ、バラタ、シャトルグナ
の四人を産みました。この四人は、
正義（ダルマ）、富（アルタ）、欲望（カーマ）、解脱（モークシャ）
を象徴しています。

ダルマは英知（ブラジニャーナPrajnana）を求めます。ダルマの化身であるラーマは、英知の
化身であるシーターと結婚しました。

ラーマはシーター（英知、ブラジニャーナPrajnana）を連れて、無知（アジニャーナAjnana）
の森に行きました。そこで、

悪（ドゥルナヤDurnaya）の化身ラーヴァナが、シーターを誘拐しました。

それによってラーマは

正しい判断（ヴィヴェーカViveka）の化身スグリーヴァ、そして

誤った判断（アヴィヴェーカAviveka）の化身ヴァーリンValiと出会うことになったのです。

ラーマは正しい判断（ヴィヴェーカViveka）の味方をし、誤った判断を倒しました。

ラーマは世間の執着（サムサーラSamsara）の海を渡る必要があったので、

勇気（ダイルヤDairya）の化身ハヌマーンの手を借りることになります。

世間の執着の海を渡ると、

静かな落ちつきの化身ヴィビーシャナ、激情の化身ラーヴァナ、怠惰の化身クムバカルナと出
会いました。

ダルマ（ラーマ）は、

タマス（鈍性のクムバカルナ）と

ラジャス（激性のラーヴァナ）を倒して、

サットヴァ（純性のヴィビーシャナ）を王として即位させました。

サットヴァの性質を王にしたあと、ラーマは、

経験を伴った英知（アヌバヴァジニャーナAnubhavajnana）の化身であるシーターを取り戻し
ました。

英知（ブラジニャーナPrajnana）は、究極的には、経験を伴った英知（アヌバヴァジニャーナ）
に変わります。

英知（ブラジニャーナPrajnana）が

経験を伴った英知（アヌバヴァジニャーナ）へと

変革するのが、まことの英知です。試練と苦難を経て、まことの学問に達することが大事なの
です。

外面的な生き方（ブラブリッティPravritti）の世界にいるために、サットヴァ（純性）な人でもラジャス（激性）の人になってしまう。ヴィビーシャナ（サットヴァ）は、ラーヴァナ（ラジャス）やクムバカルナ（タマス）の一味であったせいで、ひどい苦しみを味わっていました。ヴィビーシャナは、神の時を待ちこがれていました。やがて時が来ると、神その人に、王位につけてもらったのです。

大聖 パラマハンサ ラーマクリシュナもまた、つらい思いで神を待ちこがれていました。そ

れは激しい願いであり、苦しみでした。それがラーマクリシュナを徳の高い人に育てたのです。ラーマクリシュナは、女神カーリーの姿があらわれるのを夜遅くまで待っていました。夜中もすぎると、ひどく悲しみました。

「ああ、今日も一日無駄でした。あなたさまを見るできませんでした」

同じカルカッタの街には、オーロピンド・ゴーシュAravinda Ghoseやビピン・チャンドラ・パルBipin Chandra Palのような立派な知識人が住んでいたのですが、こんにち、人々のところに生きている名は、ラーマクリシュナです。ラーマクリシュナは、神への一途な信仰によって、人々のところに永遠に残るようになりました。ゆるぎのない信仰があったから、偉大な高みにまで昇ることができたのです。

ラーヴァナは、アートマは遍在であると信じなかった（アートマ・ヴィシヴァーサAtma Vishwasaに欠けていた）ために、底なしのぬかるみに沈んでしまいました。せっかくの苦行（タパスTapas）も怠け心（タマスTamas）に変わってしまったのです。苦行によって信仰は厚くなるはずなのですが、ラーヴァナの場合はそうならなかったのです。

「ラーマヤナ」は、真実といつわり、公正と不当、正義と不正、善と悪との戦いが語られています。これは人間の奥でいつもつづいている永遠の戦いです。神に祝福される人とは、この戦いを乗り越え、永遠の勝利に達した人です。この勝利に達する時が、この地でラーマが王となる時なのです。

第一章 シーター、みさおの化身

わたしは功德ではなく罪でもない。楽しみでなく苦しみでもない。
わたしは神の讃歌でも、聖地参りでも、施しでも、儀式の成果でもない。
食べものではなく、食べものの精 せい から成る肉体でもない。
わたしは「完全存在、完全知恵、完全至福」(サット・チット・アーナンダ)の化身である。

罪を恐れなくなって、悪 あ しき行為はさらに増え、
神を信じなくなって、悪しき行為になり代わる。
信仰あつい人々をお救いになるあの方の
名前を唱える人などと、
めったに会えることもない。
心よ。神の名を唱え、永遠 とわ の安らぎを得るがいい。

学生のみなさん。愛の化身たち。

人間は自然を調べて支配しようという、抑えがたい欲望にとらわれています。そのために、自分の肉体の力、知識の力、地位の力、数の力を信じるようになりました。そうやって、何を成し遂げたのでしょうか。神の恵みも助けもなかったら、ほんのわずかな成果も味わうことはできません。どんなことも、神が見ていてくれるときにはじめて勝利はあるのです。自然は誰のものでもありません。神だけのものです。だからまず神の恵みを得ることが、自然を克服する道なのです。

自然 (Prakriti) と神 (Paramatra)

自然とは、五つの元素を寄せ集めただけのものではありません。五つの生命の原理でも、五つの鞘 さや でも、あるいは五つの感覚の組み合わせでもありません。自然とはまさに神が形をなしたものです。人間は、美しい自然を操作するためにさまざまな努力をしています。プラトンは自然を、真・善・美と言いあらわしました。アリストテレスの弟子であったアレクサンダー大王は、この世界について同じ真理を語っています。ところが、自然の妙なる美しさはどこから来ているのでしょうか。神は、美そのものです。だから自然も美しいのです。神は自然の中に写し出されています。神の許しもなしに自然を征服しようとしても、しくじり、苦しむことでしょう。ゆきつくところは、困難、障害、苦勞ばかりです。「ラーマーヤナ」では、この真理が説かれています。

{ 五つの元素とは地・水・火・風・空。

五つの生命の原理については（第七章 p54）を参照。

五つの鞘 さや とはアトマをおおっているもの。「食べものの鞘 さや 」すなわち肉体、「生気の鞘」「心の鞘」「知性の鞘」「悦びの鞘」

五つの感覚とは、見、聞き、臭いをかぎ、触れ、味わう感覚のはたらきをさしている]

魔王ラーヴァナはシュリー・ラーマに逆らい、シーターを手に入れようとしてしました。自然は神の持ちものです。誰も自分のものにはできません。自然を我がものにしようという夢は、無知のあらわれにすぎません。そんなことをしても、うまくいくはずはないのです。ラーヴァナは最後にはどうなったでしょう。家族、兄弟、息子ばかりか、国そのものまで失うことになりました。だから自然を手に入れる前に、まず神の恵みを得るべきなのです。自然が身体だとすれば、神は身体の内にも宿るたましいです。身体にたましいがなければ、何の役にも立ちません。たましいが内にある限り、身体には高い価値があります。身体のどこかが病気のときに、身体が自分で治せるものでしょうか。そんなことはできません。神は、

行為する主体

行為の手段

行為そのもの

この三つを支配しています。神にはたくさん名前があります。その中に、

「行為の報いをもたらすお方」

という呼び名があります。人はただ、自分に定められた仕事をはたすだけです。行為の報いをもたらすのは、神です。愚かな人はこの真理がわからずに、自然を我がものにしようとして夢見ています。身体や知識や科学の力さえあれば、仕事を成し遂げられると思っているのです。

ヤマとラーマ

ヒラニヤカシブはすぐれた科学者でした。はるか昔に、五つの元素のすべてを操作するのに成功していました。ところが、自然のすべてを支配することはできなかったのです。息子のブラブラダはこう言いました。

「父上は、世界中を支配しておいでかもしれません。ただ、ご自身の感覚を支配したとは言えないでしょう」

それはこういう意味です。自分の心を支配することができなかつたら、成功しても何にもならない。心を落ちつかせてはじめて、自然を手にすることができる。そのために必要なのは、神をさとり、神の恵みを受けることです。神はすべてを支配し、すべてを与えるものです。しかも自分を信じる者に、神はすすんでとらわれてくれます。悪い感情をもっている人には、敵となってあらわれます。ブランダラダーサPurandharadasa〔一五～一六世紀の南インド、カンナダ語の詩人、作曲家〕はうたっています。

「ラーマさま。

あなたを信じるヴィビーシャナには神さまとなってあらわれて、

あなたに刃向かうラーヴァナには、死の神ヤマYamaとなってあらわれた。

あなたはラーマであるだけでなく、同時にヤマでもあるのです。

あなたの他にこの世の誰も、死の神ヤマではありません。

あなたを愛する者にはラーマ、
あなたに刃向かう者にはヤマ、
違う姿であられる。
いつもいかなる場合でも、あなたに祈ったプラフラダ。
その人にナーラーヤナとなりあらわれた。
あなたに楯突 たてつ くヒラニヤカシブ。
その人に死の姿となりあらわれた」

だからラーマは、最高神であるとともに、死の神でもあります。カンサ王〔クリシュナを殺そうとした王〕は自分の従姉妹 いとこ への思いやりなど少しもなく、それどころか殺すつもりでいたのが、クリシュナが、ヤマとなってあらわれたのです。そしてカンサの信心深い父ウグラセーナUgrasena〔息子のカンサによって幽閉されたが、クリシュナによって助け出された〕には、神となってあらわれました。だからよいことも悪いことも、その人のこころのあり方によるのです。

神に帰依する人は、いつも神さまの名を唱えているべきです。信じるこころに限度はありません。いつでもどんな場面でも、神さまを思うのです。このカリの時代 ユガ に、人々は「自分の仕事」と「神のための仕事」を区別するようになりました。瞑想をしたり、神さまを思ったり、神さまをあがめてさまざまなお勤めをするのは「神のための仕事」であり、家の用事や、商売や、会社づとめや、畑仕事などは、神とかかわりのない「自分の仕事」だと思っています。そんなふうに分けて考えるのは、神をさとする妨げになります。神さまをほんとうに信じるというのは、そういう区別を立てないことです。「あなたのもの」や「私のもの」という範囲など、どこにもありません。この身体の中にはただひとつの神がいて、いのちの力となって生きているからです。

どんな行為をするときも、いつでも神をうやまうように

いにしえの賢者はこう語っています。

「どんな行為をするときも、いつでも神をうやまうように(プラーノーパーサナPraanoupasana)」

ご存じのように、警察官は工作中、それぞれの役職に応じた制服を着ます。けれども仕事が終われば家に帰って、自分の服を着るでしょう。それと同じように、神に帰依する人は、バドリナートBadrinathや、ケーダールナートKedarnath、アマルナートAmarnath〔いずれもヒマラヤの聖地〕、マーナサ・サローヴァルManasa Sarovar〔カイラーサ山のマノーサロワル湖〕のような聖地にお参りに行くときは、神への帰依という衣をまとっています。お参りから戻れば神への帰依は忘れ、家の事情にからんだ世間の見方に変わり、俗な考えをするようになります。そういうものは、帰依ではありません。帰依というのは、いつでもどこでもどんな場合も、ひたすらに神を思うことです。帰依の豊かな喜びを味わうために、この物質的な身体力を借りて、あらゆる努力をするべきなのです。

こころには、人もいれば神もいて、
お互いに違った役を演じている。
だがこの劇を演出している方がいる。
同じ役者の内側に、善と悪とがともにある。

神はひとつです。よいところも悪いところも、その内には神だけがいます。神を知りたいと思うなら、まずこの原理を知らなくてははいけません。そうしてはじめて、自然は自分のものになります。みなさんは、自分の習慣や感情や感覚を思うように変えることができるでしょうか。クリシュナはこう言っています。

「いとしい者よ。きみはわたしの一部だ。わたしと違った存在ではない。わたしはきみの中にいて、きみはわたしの中にいる」

今、人々は旅行に行っているいろいろな場所を見たいという欲望にかきたてられています。どこへ行ってもどこへ行かなくても、いずれは必ず死の国に行くのです。魚は水の中で暮らして、水がなければ、片時も生きていられません。水の外へ出されたら、必死になって水に帰ろうとします。ところが人間は、自分がどこから来たのか忘れてしまいました。それで怪しむことなく暮らしています。人間に魚ほどの知恵もないとは、情けないではありませんか。自分がやってきた大いなるみなもとを忘れてはいけません。そこにアートマはあります。そこに神は宿るのです。この原理をさとるために、努めはげむべきです。

ヴェーダは、神さまの身体のそれぞれの部分を、蓮はすの花に喩たとえています。顔、手、足、目、そのすべてを蓮の花に見立てているのです。蓮はどこで生まれるのでしょうか。泥の中で生まれ、水に浮かんでいます。泥も水もなかったら、ほんのわずかも生きられないのに、自分の内側に泥や水を入らせません。ここに人間の理想があります。人間は、はてしない生まれ変わりという泥の中で生まれ、生活という水の上に浮かんでいます。そこで蓮のように超然としていくことができずに、自分の中に泥や水を入らせてしまうのです。それどころか、害となる執着を増すばかりです。なすべき務めをつづけながら、その中で人間の内なる神を味わうことが大切です。努力をしても報われない人がいます。なぜでしょうか。神の恵みを願わなかったからです。

人はみな、泣いて生まれて、泣いて死ぬ。
その間、何度も何度も泣いている。
だが、ダルマの衰えを見て泣いているのか。
神さまのために泣いているのか。

ダルマの衰えに泣き、神のために泣く。このふたつこそが、泣くに値するのです。

どうして目が与えられたか知っているか。
人の罪を見るためか。
そうではない。
カイラーサ〔聖なる山〕に住むお方〔シヴァ神〕を見てころを深く満たすため。

なぜ目は与えられたのでしょうか。いろいろな人を見るためでしょうか。自分自身をよく見つめることがなければ、とても足りません。すべては自分の内にあります。まずこの真理に気づくべきです。

めでたい知らせ

魔王ラーヴァナが戦いで倒れたので、シーターにこのめでたい知らせを伝えるように、ラーマはハヌマーンに命じました。ハヌマーンはひと飛びでアーショカの樹の庭まで飛んでいきました。このうれしい知らせをシーターに伝えることができる日を待ちこがれていたのです。シーターの前に行き、この知らせを伝えました。ハヌマーンのあとからヴィビーシャナが来て、言いました。「シーターさま。ラーマさまとお会いになる支度をなさいますように。わたくしは空飛ぶ馬車の支度をしてまいります」

そう言って、準備のためにその場を去りました。ヴィビーシャナの妻サラマーSarama と娘のトゥリジャーターTrijataとアジャーターAjataがさまざまな飾り付けをしてシーターの身支度をととのえました。シーターの目から涙がこぼれました。とてもうれしかったけれど、これまでのことを思い出してしまったのです。シーターは、ラーマと再び会えると思うと、胸が高鳴りました。

囚 とら われの身から放たれて、
ついにこの目でラーマさまのお姿を見られます。
もうすぐ私はラーマさまに会える。
私の嫁いだラーマさま。ずっとお側 そば にいられなかった。
ふたりが別れてもうすでに十 とう の月がすぎました。
囚 とら われの身から放たれて、
再びこの目でラーマさまのお姿を見られます。
大切なラクシュマナ！徳の高いあなたをどんなにおとしめたことでしょう。
私を置き去りにするための、
私の言葉はどれほどあなたを傷つけたでしょう。

あのと看の看を思ふと、とても悲しくなりました。ラーマの勝利の知らせが届いたときは、冷たい恵みの雨が降り注ぐように感じられました。喜びのあまり、ハヌマーンに話しかけることさえできないほどでした。ほとんど動くもできず、どうしたらいいかもわからないほどでした。シーターは、このうれしい知らせを十ヶ月の間待ちこがれていたのです。サラマーたちに身支度をしてもらったあと、空飛ぶ馬車まで連れていってもらいました。この馬車は何だったのでしょうか。〔魔王ラーヴァナの〕プシュパカPushpakaの馬車〔「花の車」を意味する〕でした。シーターはこれでさらわれてきたのです。馬車に座ると、あのと看の看を思い出しました。

ほんの瞬 まばたき する間に、シーターはラーマのそばに来ていました。

厳しい試練

けれども、ラーマはシーターの方を見ようともしません。ラーマは言いました。「わたしはシーターを見ることができない。わたしはこの世界を救うために生を受けた。この世界に理想を示さねばならぬ。シーターはランカーで十月 とうつき をすごした。このまま戻ってこさせれば、人々にうしろ指をさされることになる。まずは、よく調べてみなければ、彼女を迎えることはできない」

シーターはひどく傷つきました。ハヌマーンを見て、言いました。

「ああ、ハヌマーン。あなたが私にこのことを知らせてくれていたら、私はその場で喜んで命を断ったことでしょう。いったいどうして私が猿 ヴァーナラ や魔物（ラクシャサRakshasa）の中に連れてこられ、こんな辱 はずかし めを受けなければいけないのでしょうか」

学生も、家庭をもつ人も、大人も、若者も、ここに理想を見るべきです。シーターが空飛ぶ馬車から降りたとき、アンガダAngadaやスグリーヴァをはじめとして、みんなうやうやしく頭を下げていました。ところが猿の中に品性の低い者がいて、シーターを見ようと首をのぼしていました。ラーマはそこで、アンガダAngadaたちのふるまいは徳の高いものであり、そうでない猿

ヴァーナラ のふるまいは、卑しいものであると言いました。徳の高いふるまいは人間の特性、卑しいふるまいは猿の特性です。人間の特性とは何でしょうか。目上の人をうやまい、頭を下げることです。シーターは、女神ラクシュミーLakshmi〔ヴィシュヌ神の妻。美と富の女神〕の化身です。シュリー・ラーマの妻なのです。目を開けて見られるような人ではありません。ラクシュマナでさえ頭を下げていました。ラクシュマナは十年も同じところに住んでいても、シーターの顔を一度たりとも見ることはありませんでした。見ることに思いをかきたてます。こんにちでは、悪意あるものの方があふれています。人から悪意の目で見られたために、熱を出して倒れたという人の話をよく聞くでしょう。だから人を見るときは、よくよく慎 つつし まなくては

いけないのです。

ラーマは、ラクシュマナに火をつけるように命じました。シーターに、その火の中に飛びこむように言ったのです。シーターをアヨーディーヤに連れて帰るには、火の神さまに認められる必要がありました。その言葉にラクシュマナは激しい怒りをあらわしました。それまでラーマに逆らうことなど決してなかったのに、ついに口を開きました。

「ラーマさま、物に狂わせられましたか。知恵がくもられたのですか。いったい何をおっしゃいます。何か誤った考えにとらわれてしまったのですか。シーターさまほど立派な女性はおられません。この上なく清らかな、すべての女性の鑑 かがみ です。ラーマさまはあまりにシーターさまを卑 いや しめておられます。ラーマさまのお疑いどおりであれば、どうしてシーターさまは十月 とうつき も苦しむことがありますでしょう。そのことをお考えになられたのでしょうか」

ラーマにはラクシュマナのところがわかっています。ラクシュマナにはラーマのところがわかっています。ラクシュマナの怒りの声を聞いて、ラーマはこう言いました。

「ラクシュマナ、いまわれらは、理想の人間として生きている。他の人々が従うことができるように、模範を示さなければならないのだ。シーターが立派であることはわたしもわかっている。だが、人としてのよさが明らかにされなくてはいけない。あの方は立派な人だと世間は語る。だがよい人間であることは、立派な人間であることよりもはるかに大切だ。だからシーターが偉く立派な女性である以上に、よい女性であることを、わたしはこの世に示さねばならない」

シーターはラーマの言葉を聞いていました。涙を流しながら炎のまわりを回り、祈りを捧げました。

「私がまことに真理の化身であるならば、いつどんなときも私にいかなる悪いところもないならば、どうかこの炎の熱が冷めますように。いかなるときも、どんな思いもどんな名前も、ラーマさまの名前の他は私の心に浮ぶことはありませんでした。ただ、ラーヴァナ殿が私をチトラクータの山から連れ去ったとき、私は捕らえられ、馬車に押しこまれたのです。どうして触れられるのを防ぐことができたでしょう。そのときも私は、ただラーマさまだけを思っていました。その

上で、私を試すとおっしゃるならば、そのとおりにいたします」

そう言って、シーターは燃えさかる薪 たきぎ の山に飛びこみました。

そこに多くの神々がその姿をあらわれました。神さまも女神さまも、ラーマの行いをとがめていました。すべてを知っていながらこんな愚かなことをするラーマに異を唱えています。ところがラーマはほんとうは、シーターに何の罪もないことがわかっていたのです。そうでなくてどうして多くの苦勞をし、食べることも飲むことも忘れてランカーまで来て、魔物（ラクシャサ）に傷つけられたのでしょうか。インドラジットとの戦いのあとなどは、ラーマの身体は血みどろになっていました。ラクシュマナはとても見ていられず、気を失ったほどでした。この愛情がラーマとラクシュマナの絆 きずな でした。ふたりの兄弟はどうしてそれほど多くの障害に立ち向かったのでしょうか。どうして海を渡る橋など架けたのでしょうか。みんなシーターのためだったのではありませんか。ラーマにはシーターのみさおがわかっていました。

「わたしはおまえがどんな女かわかっている。だが世間の者は、けたたましく鳴くカラスのように、あらぬ想像をするものだ」

シーターが言いました。

「鳥 からす がさわがしい声で鳴いていると、コーキラ〔美しく鳴く鳥〕もそのたおやかな歌を止めるでしょう。ラーマさま。世間は鳥 からす のようにうわさ話にうつつをぬかしています。しかしラーマさまはコーキラのようなお方。どうして世間の言うことに気を取られることがありますでしょう」

そこにいたみんなが、こぞってシーターを支持しました。

「まさしくシーターさまのおっしゃるとおり」

人は決して自分の欠点を見ようとしません。ところが他人の欠点は幾重 いくえ にも大きく見えるのです。ラーマはそうではありませんでした。ラーマには絶対にどんな欠点もありませんでした。けれども人々に理想を示すためにこんなことをしなければならなかったのです。シーターが炎に飛びこむと、火の神さまがあらわれて、シーターをラーマに引き渡してくれました。

「シーター姫はこの上なく清らかな女性である。この方こそまさしく女神ラクシュミーの化身。このお方のこころにはいかなるけがれもなく、いかなるあやまちからも、咎 とが からまめがれている」

火の神がそう言ったときに、ようやくラーマはシーターを迎えました。

シーターのみどころ

ここに、もうひとつお話があります。ハヌマーンがシーターにめでたい知らせを伝えに来たとき、こう言いました。

「姫。吉報をお知らせに参りました。ただし、もうひとつ務めをはたすお許しをいただかねばなりません。それがしには、長い間姫を苦しめていた魔物を殺す役目もございます。魔物どもを八つ裂きにいたします。どうか、お許しをたまわれ」

そこでシーターは言いました。

「ハヌマーン。魔物たちを責めるいわれはありません。ただ自分たちの主人に命じられたことをしていただいただけではありませんか。あやまちはあの者どもにあるのではなく、主人にあります」

そこでシーターは、ハヌマーンに物語を聞かせました。

獵師が虎のあとを追っていました。ところが虎は獵師を見つけて、逆に追いかけてきました。獵師は木に駆け寄り、よじ登りました。獵師は虎が行ってしまうのを待っているのですが、虎の方は木の下でじっと見張っています。そこで獵師がふと見上げると、もっと上の枝に熊くまがいるのがわかりました。そこで虎は熊に話しかけました。

「熊さん。そいつはわしが遠くから追いかけてきた獲物なんだ。いまその木に登っている。そいつを食べられるように、こっちに落としてはくれないかね」

すると熊はこう言いました。

「虎よ。ここはわしの住みかなのだ。この獵師は助けを求めてここに来た。わしにとっては客人だ。わしとしてはこの客人をどうあっても守ってやらねばならん。だからこの人を下に落とすわけにはいかないのだ」

それでも虎は、あきらめてその場を去る気にはなりません。しばらくすると熊は眠ってしまいました。そこで虎は獵師に話しかけました。

「おい、獵師のお方。わしはただ、食べものがほしただけなんだよ。それがあんたか他の誰かかはどうでもいいんだ。わしのためにその眠っている熊の奴を突き落としてもらえれば、あんたのことは見逃してやるよ。わしは熊を食べてどこかに行ってしまうからさ」

獵師に邪悪な気持ちがあがりました。あからさまな我欲のため、自分だけが助かりたいために、眠っていた熊を突き落としてしまいました。かわいそうな熊は、宙に落ちていくうちに、うまく枝をつかむことができたために、死をまぬがれました。よい人はいつもこんなふうを守られるものです。熊にはやさしいところがありました。その徳によって守られたのです。恩を仇あだで返すのは、とても悪いことです。熊はふたたび、ゆっくり木を登っていきました。そこで虎が熊に言いました。

「おいおい熊さんよ。あんたがせっかく親切にしてやったのに、その男は恩を仇で返しやがったじゃないか。そいつは、あんたの親切を忘れた、感謝の気持ちなどまるでない奴だ。そんな奴はこっちに落としてしまうのが、賢いやり方ってもんじゃないか」

そこで熊は言いました。

「虎よ。人の罪は、あくまでもその人のものだ。人の徳もまた、その人のものだ。その報いは自分自身が受ける。よいことをするのはわしの天性だ。悪いことをするのはこの男の天性だ。この男は自分の罪のゆえにつらい報いを受けるだろう。わしは自分の徳のゆえに豊かに報われるだろう。わしはこの男を下に落とすことはできない」

シーターはつづけて言いました。

「それと同じように、私の天性はまごころにあるのです。ハヌマーン、あの者たちは私を苦しめたけれど、だからといって殺してしまうのは望みません。人を苦しめるのは魔物の天性です。苦しみにあっても許す心を忘れないのが私の天性です。だから、あの者たちを罰することはしないでください」

ハヌマーンはそれを聞いて、感動しました。この世界には、親切にされても恩を仇で返す人がたくさんいます。魔物とはそういう人です。けれども善に対して徳をもって報いる人、そんな人こそは神の化身なのです。

シーターを迎えたあと、ラーマはアヨーディヤーに戻るために出発しました。その途上、聖者パラドヴァージャBharadwaja【『リグ・ヴェーダ』の多くの讃歌の作者とされる】の庵いおりに立ち寄りました。以前行く途中でも休ませてもらったことがあったのです。パラドヴァージャは

たいそう喜びました。自分のもっていた武器をすべてラーマに与え、まもなくおこなわれる即位の式を祝福しました。

ラーマがアヨーディヤーに近づいているうちに、ちょうど十四年という期間がすぎようとしていました。約束の時までにラーマが戻ってこなければ、バラタはみずからの身体を燃やしてしまうという誓いどおり、命を絶つつもりでいました。〔第四章 p33ページ〕。ラーマは聖者バラドヴァージャの庵にとどまっていたために、ほんの少し帰りが遅くなりました。バラタは積み上げていた薪 まき に火をつけました。飛びこむ覚悟はもうできていました。ちょうどそのとき、ラーマはハヌマーンに言葉を伝えるように言いました。風は飛行機よりも速く駆け抜けます〔ハヌマーンは風の神の子とされている〕。だからハヌマーンは、ラーマがまもなく帰るという知らせをバラタに伝える仕事をまかされたのです。バラタは大いに喜び、熱い思いでラーマの戻るのを待ち、すべての支度を整えました。

バラタの最高の帰依

ここで考えるべきことはふたつあります。バラタはラーマに帰依する人として、たいへんすぐれた人でした。ラクシュマナはラーマにとって頼りになる、忠実な召使いでした。ラクシュマナはその気持ちを、身をもってあらわそうと思っていました。バラタはどんな姿もたない神を見ていました。ラクシュマナはラーマとシーターの身にいかなる障 さわ りもないように、一度たりとも目を離すことなく、まめまめしくお世話をしていました。十四年の間、眠るということがどんなことなのかも知らないほどでした。ラクシュマナのように見事に私欲を捨てた生き方は、神さまの形ある相 すがた をうやまう人のものです。それに対してバラタの生き方は、形のないうやまう人のものであり、あえてアヨーディヤーから離れて暮らしていたのです。バラタはナンディグラマNandigramに小さな庵 いおり を建て、そこでいつもラーマの名を唱えていました。ラクシュマナがラーマのために身を捨てて仕 つか えていたのに対して、バラタは心のすべてをラーマに定めていたのです。これがこのふたりの違いです。ラクシュマナはこう祈っていました。

「私はラーマさまの思いのままにお使いいただく召使いです。それを除いて私の人生はありません。私はラーマさまの六つめの生命 いのち の呼吸（プラーナPrana）となります〔第七章の「六つめの生命 いのち」 p54〕」

それに対してバラタはこう祈っていました。

「私の身体などありません。私は完全にラーマさまの中にいるのです」

そう思いながら、いつも神の名を唱えていたのです。これは、

「神を思え。そうすれば神になるであろう（ブラフマヴィット・ブラフマイヴァ・バヴァティ Brahnavit Brahmaiva Bhavati）」

と言われるものです。十四年の間いつもラーマを思っているうちに、バラタもまたラーマと同じように顔が深く蒼 あお みがかってきたのです。

バラタは馬車に乗って、サラユー川の岸辺に行きました。そこでラーマとシーターとラクシュマナを迎え、馬車に乗せて、アヨーディヤーの街まで進んでいきました。アヨーディヤーの人々は驚きの目でふたりを見ていました。

「どちらがラーマさまでどちらがバラタさまなのだろう」

ふたりともラーマに見えたのです。どちらも苦行者の身なりをし、髪は毛はちりちりで、顔色も同じようです。ラーマを歓迎するために来ていた国の人々は呆然と立ちつくしていました。みんな、この人がラーマだと思って、花輪をかけようとバラタに近づきました。バラタは人々のとまどいを察し、ラーマの方を花輪で飾るように身振りで示しました。そこではじめて人々は、どちらがラーマでどちらがバラタかわかったのです。バラタも他のふたりの兄弟も、神の化身のさまざまな相すがたでありました。

アヨーディヤーに着くと、兄弟らは沐浴をしました。聖者ヴァシシュタやヴァーマデーヴァ Vamadevaたちは、さまざまな穀物や宝石をたずさえてきました。みんなはそれを受け取り、飾り物としました。奇跡がおこったのはこの時です。猿どもがごとく人間に変わり、馬や象やラクダに乗って都にやってきたのです。猿 ヴァーナラ とは何でしょう。人間 ナラ とは何でしょう。知性のある者が人間 ナラ、愚かさのある者が猿 ヴァーナラ です。猿 ヴァーナラ とは、落ちつきのない者です。人間 ナラ には、静かな落ちつきという徳性があるのです。

即位の式がおこなわれました。あふれるほどの施しが行なわれました。ラーマは何十億枚という金貨をブラーミン〔バラモン僧〕に配りました。何千万枚どころではなく何十億枚もの金貨です。何万頭という牛が施しとしてふるまわれました。バラタの喜びは、とめどもないほどでした。こう思っていました。

「財産を貯めるのは、いったい誰のためだろう。ラーマさまのご帰還こそが、私にとってのさいわいだ。これに勝るものはない。財産のすべてを施しに使ってしまえばよろしい」

そう思い、夢中になって、人々のためにさまざまな品の施しをしていました。

ハヌマーン、最高の帰依の者

広間の片側にはあらゆる領地の王と、同盟をむすんだ国ぐにの王が座り、反対の側には大臣がそろって座っていました。聖者や出家僧はまた別の場所に座していました。人をうやまうラーマの姿勢は、申し分のないものでした。聖者に対しては奥ゆかしさを示し、かしこみて頭を下げました。諸国の王を見てやさしく微笑みかけました。それがこの人々への贈り物だったのです。それから国の人々を見て、両の掌 たなごころ を上げて祝福しました。女性の方も見て、軽くうなずきました。そうやって、さまざまに異なったやり方で敬意をあらわしたのです。

その日に、ラーマはシーターに、見事な真珠の首飾りを手渡しました。この上なく価値の高いものです。ラーマは言いました。

「誰でもおまえの好む者にこの首飾りを与えるといい。おまえがわたしを好むというのはわかっている。だが、いまこの場にいる誰でもいいから、おまえの好む者に与えてもらいたい」

シーターはその首飾りを、ラーマの御足に触れていたハヌマーンに与えました。こうしてこの戦士をたたえたのです。

「ラーマさまに帰依する者としてあなたの右に出る者はいません。ラーマさまの命令をすべて忠実にはたしました。私を探すために力をつくしてくれました」

シーターはそう言ってハヌマーンをたたえました。けれどもハヌマーンはその言葉を少しも聞いておりません。それどころか首飾りからひとつひとつ真珠をもぎとって耳もとに持っていき、歯で咬んでは放り投げるのに夢中になっています。それを見たラーマはハヌマーンに、まだ昔の

癖が残っているか、と聞きました。ハヌマーンは応えました。

「とんでもございませぬ、ラーマさま。このハヌマーンは、いつもラーマさまをお慕した いする気持ちに満ちております。口ではラーマさまの御名を唱え、耳ではラーマさまの御名を聞いております。神を信じる九つの道で、それがしにとってこれに勝るものはございません。さればこそ、あなたさまの召使いにさせていただいたのです。神を信じる九つの道とは、

- 神の話を聞く（シュラヴァナ Sravana）
- 神の栄光を歌う（キールタナ Keertana）
- 神を瞑想する（ヴィシュヌスマラナ Vishnusmarana）
- 神の御足に触れる（パダセーヴァナ Padasevana）
- 神をうやまう（ヴァンダナ Vandana）
- 神をあがめる（アルチャナ Archana）
- 神のしもべとなる（ダースヤ Dasya）
- 神の恋人になる（スネーハ Sneha）
- 神にみずからをゆだねる（アートマニヴェーダナ Atmanivedana）

でございます。あなたさまの召使いになることで、それがしはあなたさまに親しむ者となりました。召使いになれなければ、親しい友にもなれませぬ。まずは親しい友となり、しかるのちに、あなたさまにみずからを捧げることができたのです。それがし、ラーマさまの御名の他に何も聞くことを望みませぬ。それゆえ、この真珠のひと粒ひと粒にラーマさまの御名が鳴り響いているか、必死の思いで聞いておりました」

ラーマは、ハヌマーンの偉大なる帰依のころを世界に知らしめるために、こう言いました。「ハヌマーンよ、出すぎた奴め。真珠にラーマの名が鳴り響くことがあるうか」

ハヌマーンは応えました。

「たとえひと粒の真珠の中にさえ、あなたさまの御名がひそんでおります。あなたさまの名がないならば、それがしにとっては真珠も石ころと同じもの。だから投げて捨てたのです。おお、シュリー・ラーマ。このハヌマーンの身体のすべてに、あなたさまの御名が響きわたっておりますよ」

そこでハヌマーンは、自分の腕から毛を一本引き抜いて、ラーマの耳もとに近づけました。するとその一本の毛さえも

「ラーマ、ラーマ……」

と唱えておりました。これが、ハヌマーンの偉大な帰依のころです。だからこそ、これほどまでにラーマからよく信ぜられ、親しい友となることができたのです。他の人ならラーマから離れることもあるでしょう。しかしハヌマーンは決してラーマから離れることはありませんでした。ラクシュマナ、バラタ、シャトルグナ、そしてシータでさえ、時にはラーマといくらか離れることもありました。けれどもハヌマーンは、ほんの片時もラーマから離れることはなかったのです。なぜでしょうか。いつもラーマの名を唱え、いつもラーマに仕えたことが、ハヌマーンを信じがたいほどの高みに引き上げたのです。ハヌマーンは、心と、身体と、たましいをつくして、いつもラーマに仕えていました。

ラーマはハヌマーンにたいへん満足しました。王座から立ち上がり、こう言いました。「ハヌマーンよ。おまえにどんな恵みを与えてやればいいたろう。おまえにふさわしい贈り物はどこにもない。だからわたしそのものを、おまえに与えよう」

そう言って、ラーマはハヌマーンを抱きしめました。ハヌマーンはこの恵みによって至上の悦びに我を忘れました。この境地は、

「神と自分とのへだたりのない至上の境地（ニルヴィカルパ・サマーディ Nirvikalpa Samadhi）」と呼ばれます。この至上の境地（サマーディ Samadhi）はどのようなものでしょう。

ある対象に十二秒の間完全に心を定めれば、それは「集中（ダーラナー Dharana）」〔意識をひとつに保つこと〕と呼ばれます。

「集中（ダーラナー Dharana）」が十二あればひとつの「瞑想（ディヤーナ Dhyana）」となります。

「瞑想（ディヤーナ Dhyana）」が十二あれば、ひとつの「至上の境地（サマーディ）」となります。

これが、

「集中（ダーラナー Dharana）」

「瞑想（ディヤーナ Dhyana）」

「至上の境地（サマーディ）」

という三つの境地の関係です。ハヌマーンはこの、至上の境地（サマーディ）にただちに入ったものでした。

「ラーマヤナ」は、ハヌマーンのすさまじいほどの大きな帰依のこころを全世界に伝える聖典なのです。

第一章 真理（サティア）と正義（ダルマ）

こころから神を信じる人がまろやかな調べで神の光をうたうなら、
その日はまことによい日といえる。
貧しい人を助けに行って、ともに分かちあえるなら、
その日はまことによい日といえる。
神を求める人々に豊かな食事をふるまって、みんなの飢えを満たすなら、
その日はまことによい日といえる。
とうとい人に親しんで、神の話を聞くならば、
その日はまことによい日といえる。
そんな日こそが、いつわりのないまことの日。
そうでない日は、甲 とむら いの日と変わらない。

アヨーディヤーはシュリー・ラーマの即位の式でわきたっていました。どの人の顔も喜びの表情であふれていました。イクシュヴァークー族Ikshwaku の初代の王マヌManuがいただいていた王冠が、いまラーマの頭上に置かれようとしています。アヨーディヤーの高僧であるヴァシシュタVasista、やヴァーマデーヴァVamadeva、ジャパーリJabaliは、この神聖な王冠がラーマの頭上にいただける日を、長い間待ちこがれていました。諸国の王、総督、副官など、たくさんの人がアーリヤーヴァルタAryavarta〔インドにおけるヴィンディヤー山脈よりも北の部分〕の各地から都へと集まっていました。大きな板が正門の上にかかげられました。そこにはこんな言葉がありました。

「真理（サティア）と正義（ダルマ）に生きる者は、死の恐怖からまぬがれる」

ラーマ王は、真理と正義を広める仕事にその身を捧げました。この王の統治のもとでは、偉い人もそうでない人も、老いも若きも、男も女も、さとりを得た人も至らざる人も、誰もが真理と正義とともにありました。

「王そのままに、臣下 しんか もふるまう（ヤター・ラジャー・タター・プラジャーyatha raja tatha praja）」

のです。王と同じように大臣もふるまっていました。大臣と同じように役人もふるまっていました。そして役人と同じように国の人々もふるまっていたのです。三人の弟 バラタ、ラクシュマナ、シャトルグナ は、王国のすみずみまで、ダルマがおこなわれるよう心をくだいていました。ダルマにそむく者については、いつも王に報告がなされていました。

ラーマの統治（ラーマ・ラージャRama Rajya）は、真理と正義の統治と呼ばれていました。人々は病気で苦しむことがなく、子供は幼くして死ぬことがなく、妻は夫と死に別れてつらい思いをすることがありませんでした。雨はほどよい時期に降り、人々は豊かに栄えていました。ラーマの統治（ラーマ・ラージャRama Rajya）は、平和と調和と豊かさに色どられていました。ラーマの統治にあっては、ラーマのような君主、ヴァシシュタやヴァーマデーヴァVamadevaのような

聖人、バラタやラクシュマナやシャトルグナのように助けを惜しまぬ人々が必ずあらわれるのです。

感謝の価値

ラーマの王国の人々は、いつも感謝の気持ちに満ちていました。何かよいことをして、感謝をされないことはありませんでした。ラーマ自身も即位の式の日には、自分を助けてくれた人々に深い感謝をあらわしました。

ラーマは誰よりもまず、偉大なる猿 ヴァーナラ の英雄ハヌマーンへの感謝の気持ちをあらわしました。ハヌマーンは、シーターの居場所を探し、はかり知れないほどの働きをしてくれました。

次に、鳥のジャターユスに深い感謝と恩義をあらわしました。ジャターユスはシーターを救うために自分の命を捨てたのです。

次に、猿 ヴァーナラ の王スグリーヴァに感謝しました。スグリーヴァはシーターを探すときにも、魔王ラーヴァナとの戦いにおいても、ラーマのために自分の兵を出し、王みずからも働いてくれました。

次に、ラーマはヴィビーシャナに感謝しました。魔物どもによって次々とくり出されるあやかしを切り抜けてラーマを助け、偉大な働きをしたのはヴィビーシャナでした。

猿 ヴァーナラ はよその国の者です。もともとはラーマやシーターとは何かかわりもなかったのです。それなのに戦争では進んで自分たちの命を犠牲にして戦ってくれました。ラーマは、猿 ヴァーナラ のみんなにも感謝の気持ちをあらわすことを忘れませんでした。

そうやって、いくさで自分に力を貸してくれたすべてのものに、ラーマはここからの感謝の気持ちをあらわしたのです。

ここに「ラーマヤナ」の大切な教えがあります。人は一生を通じて、恩を受けた人に感謝をしなければなりません。感謝をあらわせる人にだけ、人と呼ばれる資格があります。感謝を知らない人は、魔物と同じです。魔物と人は、姿かたちは何も違いません。何をしているかによって違いが決まるのです。悪いところをもち、悪いことをするのが魔物です。親切にされても少しも気にかけて、人を傷つけることに夢中になっている邪悪な者、それが魔物です。いつわりがいのちの呼吸と思っている愚か者が魔物です。今の世界では、人々はいつわりが大切と思い、どうにもならないほど悪いことをしています。しかしわたしたちのヴェーダはこう言っています。

「真理を語り、正義をおこなえ(サッチャム・ヴァダ・ダルマム・チャラ Sathyam Vada Dharmam Chara.)」

ところが今の世界では、普段の会話の中で真理や正義という言葉も、絶えて聞くことはありません。

真理と正義の価値

正義は、それ自体客観的に存在しています。人が何を信じているかに左右されるものではありません。正義そのものに特性と姿があります。燃えるものは火と呼ばれます。燃える力は火のもつ特性です。信じていても信じていなくても、火には燃える力があるでしょう。火の燃える力は、

火に何ができるか、できないかというその人の信念と、何のかかわりもありません。知っていても知らなくても、火に触れればやけどをします。火にはそういう性質があるからです。よく似た話として、氷のことを考えてみましょう。冷たいことが氷の特性です。その人が信じていても信じていなくても、氷の冷たさに変わりはありません。冷たくなければその特性はもうないのだから、氷とはいえなくなります。別の喩えをしましょう。太陽は輝いています。明るく照らすのは太陽の自然な特性です。明るく輝いて見えないこともあるでしょう。それでもやはり太陽は輝いています。太陽の輝きは、人が信じているかどうかにかかわらず。雲でおおわれていたり、目が病んでいてその輝きが見えないこともあるでしょう。しかし自分が見えないからといって、太陽に輝く力が無いとはいえないのです。

それと同じように、人間にもある特性があります。どんな特性でしょう。すべての行為において、

「心と言葉と行為がひとつであること(トゥリカラナシュッディ Trikaranasuddhi)」

です。これこそは、人が人と呼ばれるのに必要な特性です。心と言葉と行為がひとつである(トゥリカラナシュッディ Trikaranasuddhi) は、人間のダルマ〔なすべき務め〕です。あることを心で思い、それとは違うことを話し、まるで違ったことをしていれば、それは悪(アダルマ Adharma)です。今の時代に悪がはびこっているとすれば、心と言葉と行為がひとつにむずばれていないからです。学問のある人から学問のない人まで、このむずびつきを大切に人は、ほんとうに見られなくなってしまいました。

信じてもないのに信じているかのようにふるまう人は、いつか必ず身を滅ぼします。それが魔物の特性をもつ人です。今、真理と正義は姿を消してしまいました。高い徳をそなえた理想の人々が、真理と正義を守るために努めはげまなければなりません。人々が真理と正義に従って生きる国は、いつも豊かでいられるでしょう。真理とよい人格は何よりも大切です。そんな人々が世に出ていけば、パーラタ〔インドの古称〕は豊かさで幸福で輝きわたるでしょう。遠い昔から、インドの文化は精神的な知識という富を世界に伝えてきました。

「世界のすべてが平和でさいわいでありますように(ローカー・サマスター・スキノー・バヴァントウ Loka samastha sukhino bhavanthu)」

と、いつも祝福してきたのです。王、国民、徳のある女性、聖者、神の教えを伝える人々が、正義を守るよう努めてきました。家庭をもつごくふつうの人でも、真理と正義の原理にかなった生き方をしてきました。なぜでしょうか。王その人が真理と正義を厳しく守っていたからです。だから人々もそのように生きる条件がととのっていたのです。今、権力をもつ人々は、このふたつの原理とともに生きようとしません。そんなことでどうして人々が真理と正義とともに生きることができるでしょう。これは人々に非があるのではなく、すべて指導者が悪いのです。指導者が正しくないから世の中はこんなありさまなのです。誰もが我欲であふれています。自分の悪

あしき欲望をはたそうとやっきになっています。権力と地位がほしくてたまりません。どこへ行っても、我欲の強い指導者ばかり目にします。人々の無事と幸福を願っている人は、ほんとうにいないのです。

国が栄えるように望むなら、偉大なたましいの人々の理想にそのまま従うべきです。古代の聖者に従ってきたから、この国はこれまで生きのびてこられたのです。偉大な人にとって、今の状態から得るものは何もありません。聖者ヴァシシュタは、どうしてダシャラタ王のお城で暮らしていたのでしょうか。この人には、王の富も黄金も立派な家も必要ありませんでした。シーターも

またハヌマーンに、同じことを言っています。

「ハヌマーン。富や黄金や立派な家などで、あなたを悦ばせることはできません。たとえ私が三つの世界〔宇宙のすべて〕を持ってきて渡したところで、とても借りは返せません。あなたはすべてを捨てた、まことに神を信じる者です。この徳性のために、あなたは三つの世界のすべてを歩きかうことができるようになりました。あなたが世界をめぐるから、三つの世界は無事で豊かに栄えるのです」

いま、真理と正義が拡がっていかねばなりません。ところが、何が真理で何が正義なのかを疑い、言い争っている人がいます。そういう愚かな人に手を貸そうという人さえいます。何が真理か、何が正義かもわからないで、どうして人間になることができるでしょう。このふたつがわからなければ、人間ではありません。真理と正義は、みなさんの天性です。みなさんのいのちとは、真理であり正義です。もしも何が真理で何が正義かわからないと思っていたら、どれほどの愚かな者に成りはてることでしょう。真理と正義こそは、心と言葉と行為のむすびつき（トゥリカラナシュッディ Trikaranasuddhi）が形をなしたものです。真理とは、思うとおりに話すことです。正義とは、言うとおりにおこなうことです。三つがひとつにむすびつくことが、根本です。だからこそ

「人間の学問の目的は、人間性にある」

というのです。心と言葉と行為がひとつであるのが、人間のしるしです。

ナラシンハムールティ Narasimhamurthyは、（この講話の前の演説で）真理と正義を手に入れなければいけないと話していました。真理と正義は、手に入れるようなものではありません。すでに永遠にみなさんの中にあるものです。真理と正義は、みなさんとともに生まれました。生まれたあとで頭はできたのでしょうか。生まれたあとで手はできたのでしょうか。頭も手も、生まれたときにすべてあらわれるのと同じように、真理と正義もみなさんが生まれるとともにあらわれたのです。探し求める必要も、手に入れる必要もありません。真理や正義は、売り買いされるような商品ではありません。こころから自然に生まれ出るものです。真理と正義はみなさんにとって、いのちと同じように本質的なものです。みなさんのすべきことは、すでにもっているものを守ることに尽きます。他に手に入れるべきものは何もありません。真理と正義は、みなさんが生まれながらにそなえている権利です。

今、人々は、責任も満足に果たさないのに、権利ばかり求めています。義務を果たさない人に権利はありません。権利を求めて騒いでいるのは、無知という他はありません。どんな権利を要求しているのでしょうか。求めるべき権利など何もないのです。ほんとうは、真理と正義を捨ててしまったら、この地上に住む値打ちもなくなります。真理と正義とともに生きるときにはじめて、この地上に生きることができるのです。そうでなかったら、ランカーの島に家を建てた方がいいでしょう。真理と正義を信じ、これに従うのが、まことの人間です。

そのためには捨てること、放棄をすることが肝心だと言われます。放棄とは何でしょうか。家や奥さんや家族や財産を捨てて森に隠れ住むのが放棄だという人がいます。これはまったくの誤解です。放棄とは、喜びも苦しみも変わらぬ目でとらえられることです。褒められても責められても、同じ気持ちで受け止められることです。何かを得ても何かを失っても、同じように喜び、耐えられることです。まことの放棄とは、〔損や得のような〕二元的な気持ちを滅ぼすことです。放棄のしるしは、神を信じるこころにあります。何もかも捨ててしまうことではありません。褒められても貶さげず 罵られても、言いたいように言わせておきなさい。どちら

も同じように落ちついた心で受けとめるのです。喜んでのぼせるのも、苦しみに負けてしまうのもいけません。非難されて泣くことも、讃 たた えられて笑うこともないように。これがまことの放棄です。

放棄のほんとうの意味がわかっていない人がたくさんいます。何もかも捨てることだと思っているのです。さまざまな違いを捨て、二元性を捨てるほかは、何も捨てる必要はありません。二元性とは、自分自身のさいわいのためにあるものです。喜びも苦しみも、みなさんのためにあります。いま、何らかの理由で苦しんでいる人もいるでしょう。その苦しみがいずれどんな喜びのきっかけになるか、わかっている人がいるのでしょうか。みなさんは、どこかの山に登ることがあるはず。そのときは、高いところにいると思うかもしれませんが、でも、いずれまた下 くだっていかなければならないのです。これまで高いところに行けなかったとしても、案ずることはありません。歩きつづければいいのです。そうすれば再び別の登り道に出会うでしょう。喜びと苦しみは、登る道と下る道のようなものです。静かで落ちついた心をもちなさい。それがまことの放棄です。

悦びのみなもと

ラーマと離ればなれになって、アーショカの樹の庭でとらわれの身でいたときに、シーターはとてつらく感じていました。魔王ラーヴァナは、庭をきらびやかに飾り立てました。美しく飾った庭を見せれば、シーターがよるめくであろうという、愚かな望みがあったのです。シーターはなびきはしませんでした。そんな価値のない、はかない美しさに惹かれることはありません。ところが小さな猿が木の枝に座ってラーマの栄光を歌ったとき、シーターはそれを大きな悦びとともに聞いたのです。

ラーマ、ラーマ、ラーマ、シーター。

太陽の一族に生まれ、シーターの愛を勝ち取って

聖者(リシRishi)の呪いからアハリヤーAhalyaを解き放ち、帰依する者に祝福を与える者は、

ラーマ、ラーマの神。

ラーマ、ラーマ、ラーマ、シーター。

(アハリヤーについては第三章(p 22) を参照)

シーターは、いったい誰が魔物(ラクシャサRakshasa)の国で、神の栄光など歌っているのか、どうしても知りたくなりました。顔を上げてあたりを見渡しました。そんなところで猿を見て、うれしいと思うのでしょうか。猿は美しく見えるのでしょうか。決して見てくれのいいものではありません。ところがそのときのシーターには、猿は何よりも美しく見えました。美しさは、そこで歌われていたラーマの名にありました。愛する人の名前を聞いて、シーターはたとえようもない悦びを感じました。だからこそ、「美は悦び」と言われるのです。悦びは人生を豊かにします。悦びのない美など、何の役にも立ちません。「ラーマヤナ」はこのように、美と悦びの大切さを教えてくれるのです。

シーターとラーマはどうすれば悦んだのでしょうか。国の人々の幸せこそが、ふたりにとっての

大きな喜びでした。人々が真理と正義を实践すれば、シーターとラーマは悦んだのです。ふたりは人々に、他の何もかも求めませんでした。いつも人々に多くのものを与え、大きな愛のところで人々の面倒を見ていました。それははるか昔から、すべての神の化身（アヴァターラ Avatar）の徳性であったのです。

すべては神（ブラフマン）

こんにち、外面的な世界と神（ブラフマン）〔宇宙の最高原理〕とのつながりを、人々が尋ねることが多くなりました。ほんとうは、どちらも変りはありません。世界は結果であり、神（ブラフマン）が原因です。この世界に、神（ブラフマン）でないものはありません。たとえ話をしましょう。土に種を植えれば、芽が出て苗木「なえぎ」になります。やがて枝や葉が伸びて一本の木になります。木には花や実が生「な」ります。その花や実、枝や葉は、どこから来たのでしょうか。みんな小さな種から生まれました。種が枝になり、種が木になり、種が花や実になったのです。だから姿や大きさはさまざまに違っても、同じ種を見ているのです。その意味で「バガヴァッド・ギーター」〔叙事詩『マハーバーラタ』の一部。神の化身クリシュナの説いた神の詩「うた」〕は、こう言っています。

「わたしは種であり、種から生まれるさまざまな形である。（ビージャム・マーム・サルヴァ・ブーターナム Bijam maam, sarva bhutanaam）」〔「ギーター」第七章第一節〕

陶器はいろいろ、土はひとつ。
牛はいろいろ、ミルクはひとつ。
金細工はいろいろ、金はひとつ。
姿はいろいろ、神はひとつ。

すべては神です。肉体はさまざまであり、その名前や姿が違うだけで、いるのは神だけです。神聖な道を進む人すべてが、この真理を理解しなければなりません。残念ながら、今の教育を受けた人は、みんな必死でお金を求め、人生でお金が一番大事だと思っています。お金はもちろん大切です。お金がなければ、世の中で生きていくことはできないでしょう。ただし、お金を望むのも、度を越えてはいけません。他の人のためになるようなお金の使い方をするべきです。ただし持っているだけなら、地中に石が埋まっているのと変わりません。お金を隠しておいてはいけません。誰も知らないまま地中に埋まったままの宝石がたくさんあります。それが何の役に立っているのでしょうか。地上に掘り起こすべきです。その宝石に使う価値があれば、磨いて、世の中に出すべきです。それをよいことに使うべきです。それと同じように、もし宝石のような人材が埋もれていて、よいことに生かされていないならば、使い道のないまま、だめになってしまうでしょう。

富が増えれば、おごりも増える。
おごりが増えれば、悪い性質も増える
富を限れば、おごりも静まる。
おごりを静めれば、悪い性質は消える。

みなさん。この真理を理解して、よく覚えておきなさい。お金は大切です。ただし、施しのために、正義をなすために、世界のさいわいのために使うことを忘れず、犠牲の心を学ぶのです。この自己犠牲という偉大な精神は、「ラーマヤナ」でも同じように見られます。ラーマはすべてを犠牲にしました。ヴェーダは言っています。

「行為でも、子孫でもなく、富でもなく、
犠牲によって、人は不滅のものに達する」

それが、ラーマの王国が不滅の誉れを得た理由です。ラーマは、王の衣を捨てて森へ行くこと意志しました。たくさんの牛を施しました。必要とあらば、みずからの身を捧げる自覚がありました。この犠牲の心があったからこそ、ラーマの原理は不滅のものとなったのです。自分では何も受けとることなく、自分の履物、はきものまで人にあげていました。それは、完全な自己犠牲から生まれた放棄の心（ヴァイラーギヤ Vairagya）であり、その理想的な見本です。

ここは、何を持っているかに左右される

放棄というものを、何もかも捨ててしまうのと同じように考えがちです。放棄のまことの意味は、静かで落ち着いた心の状態を得ることです。たとえ人から非難されても褒められても、平たいらかな静けさとともに受けとめるのです。みなさんは人から傷つけられるかもしれないし、別の人からよくしてもらえるかもしれません。どちらの場合も、落ちついて受けとめなさい。たとえば思い切った事業をおこせば、損をすることもあろうし、利益が生まれることもあるでしょう。どちらの場合も、変らぬ姿勢でさばいていきなさい。静かで落ちついた心が、修行（ヨーガ Yoga）の証あかしです。落ちつきは、人生にまことの安全を与えてくれます。よるべのない人を、できる限り守りお世話してあげなさい。犠牲の気持ちを深めようと思ったら、まず内に神のこころを抱かなければなりません。神のこころがなければ、他にどんな気持ちであっても、何にもなりません。

こころのありようは、何を持っているか、それが武器なのか富なのかによって変わります。シーターはラーマにこう言っています。

「ラーマさま。森に住んでいる獣たちは、ラーマさまに少しも害をなしていません。何のさわりもない生き物をいじめるのは、大きな罪ではありませんか。魔物（ラクシャサ Rakshasas）は、ダンダカの森をうろついています。そのうちほんの一匹も、ラーマさまの行く手をさえぎる者はありません。それなのにどうして、魔物を傷つけるのですか。あの者ども殺そう、傷つけようという思いがおきるのは、ラーマさまが武器をお持ちだからではありませんか。武器を手放してしまえば、そんな思いは浮かばぬはず。ラーマさまは内に真理と正義をおもちです。ただ、その徳を打ち消すような、暴力の性もおもちなのです。どうか暴力から遠ざかりなさいませ。そうなさればラーマさまは、非暴力の化身となられるでしょう」

シーターはよい喩えをあげてこれを説きました。

インドラ神はあるとき、聖者が瞑想しているのを見かけました。インドラ神は、この修行僧が深い瞑想の状態にあるのか、うわべだけそう見せかけているだけなのか、試してみたくまりました。そこで武人に身を変えて、大きな鋭い刀を手に聖者の前にあらわれ、言いました。

「聖者さま。私は急ぎの使命の途上にございます。ここにある刀は、まことに値打ちの高いもの。

これを、聖者さまのもとに置いてまいりますので、ぜひお預 はず かりいただきとうございませぬ。帰る道すがら、取りにまいります。どうかそれまで無事にお持ちいただくわけにはいきませぬか」

聖者はこれを受け入れ、

「この刀をあずかろう」

と言葉にしました。そのとたん、聖者の頭の中は、刀でいっぱいになってしまいました。どこへ行くにも刀を持っていかなければなりません。この刀を見張っていると口にしてしまったのですから。ところが刀を持っていたために、暴力的な思いが次から次へと浮かんでくるのです。苦行の功德は少しずつ減っていきました。どうしてこんなことになったのでしょうか。持っていたものの影響です。

神だけがまことの友

学生は、何よりもよい考えを身につけなくてははいけません。あまりしゃべりすぎてはいけません。友達づきあいも度を越えてはいけません。ここで言う友達づきあいとは、どういうものでしょうか。まことの友とは何でしょう。世間の友達は、まことの友ではありません。富や地位や権力が充分にあるうちは「ねえねえ」と言って、みなさんに群 ぐら がってきます。ふところにお金のある限り「ねえ、映画でも見に行こうよ」と、誘ってきます。お金や権力や地位がなくなってくると「さよなら」も言わないまま、いなくなっていることに気づくでしょう。そしてどうあっても、みなさんを避けようとするでしょう。そんな人は友ではありません。神だけがまことの友です。みなさんがどこに行っても、神が離れることはありません。

森の奥でも、空の上でも

街の中でも田舎でも、

山の上でも下界でも

神さまは、迷える者を救いとる、たったひとりのお方です。

すべてをなくしてしまったら、世間の友達はみなさんを見捨ててしまうでしょう。池に水があるうちは、蛙 かえる はやかましく鳴いています。水が干上がってしまったら、一匹の蛙もいなくなるでしょう。世間の友情や人間関係は、そんなものです。みなさんは毎日それを経験しています。人生で、そんな友情をどれだけ育ててきたのでしょうか。いま、その友達はどこにいます。みなさんが何年か大学にいる間は、「ねえねえ」と言いながら、みなさんにまわりつきます。大学が終われば、みんな散り散りになってしまうでしょう。ある友達は東に、別の友達は西に行きます。会いたいと思っても、南北の壁〔貧富の差〕が道をさえぎっています。そんな友情を深めても仕方がありません。確かに誰とでも親しく話し、仲良くすることは大切です。ただ、あまり近づきすぎて、執着をもってはいけません。いつも相手を楽しませることはできなくても、いつも楽しそうに話すことはできるでしょう。

憎しみをもってはいけません。それとともに、あまり密にすぎる友情も避けるべきです。必要な程度に近づき、度を越さないようにするのです。友達づきあいは、一定の限度にとどめるべきです。どんな限度もない友情は、神との友情だけです。神はどんなときも離れることはないから

です。

どんな人との関係も、玄関までしか来られない。
神の名だけは決して離れず、おまえを救う。

みなさんがどこに行っても、神はいつもすぐうしろにひかえています。世間の友達は、そんなふうと一緒にいてはくれません。「ラーマヤナ」がその例を示しています。戦場でラクシュマナは気を失ってしまいました。そのときラーマは嘆き悲しみました。

「ああ、ラクシュマナ。わたしはシーターのような妻を見つけることも、カウサリヤーのような母を見つけることもできるだろう。だが、おまえのような弟をもつことは、二度とできまい。おまえがいなければ生きていようとは思わない。わたしも死んでしまいたい。ジャームバヴァーン Jambavan、スグリーヴァ、アンガダ Angada、ハヌマーン。おまえたちはみんなキシキンダー Kishkindha に帰ってかまわない。ラクシュマナが息を吹き返さなければ、わたしは海に身を投げようと思う」

こんな固い絆 きずな は、人間のたましいと神との間にしかありません。

〔サティア・サイ大学の〕副学長 (Vice-Chancellor) は、ラーマは神である、そしてラクシュマナは人間のたましいであると言いました。ラクシュマナもまた神です。誰もが神です。ただの人間などどこにもいません。神とは何でしょう。神とは、まばゆい光です。神はこのまばゆい光の姿ですべての人の中に生きています。愛とはこの光を作りなす神聖な素材です。神とは、すなわちこの愛の化身なのです。

(おしまい)